

---

# とある科学の力量変換（クレイドル）

玉露飴

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

とある科学の力量変換<sup>クレイドル</sup>

### 【Nコード】

N6290N

### 【作者名】

玉露飴

### 【あらすじ】

軍隊をも軽く屠る事が出来るチカラ、『超能力』。

それは、能力者揃いの学園都市でも数少ないLevel5の特徴。力を【反射】する少年と力を【吸収】する少女が出会う時、物語は始まる。

つとカッコつけたは割には作者は文才が限りなくゼロなので、それでも良いと言う方はどうぞ^^;

## オリキャラの説明（前書き）

どうも、玉露飴と申すものです。

今回は他の作者様が投稿している『とある』系列に影響されて自分も書きたくなって投稿してしまった次第です……。

さて、この小説は基本は原作の通りに進めていきたいのですが、もしかしたらオリジナルも含まれるやもしれませぬ。

いや、含みまする 反語

それでも良いという心が太平洋並みに広大な読者様はどうぞ、よろしくお願いします。

【更新する可能性あり】

## オリキャラの説明

名前：湾 千五百 （みずくま ちいほ）

性別：女

身長：151cm

年齢：13歳（現在）

能力名：力量変換  
クレイドル

能力詳細：

自分自身が受けたエネルギーを全て吸収、変換する能力。  
エネルギーとは物理学的な仕事をなし得る諸量―（運動エネルギー・位置エネルギー・など）の総称。しかし熱、光、電磁気、質量もエネルギーの一形態である。受けたエネルギーは全て変換されるため、自身にはダメージは及ばない。

例：車に撥ねられたとしても運動エネルギーなどとして変換されるため自身は無傷。

受けたエネルギーは全て自分だけの現実により、地球には存在しない超高エネルギー体 パーソナルリアリティ ダークエネルギー に変換される。

ダークエネルギー は超高エネルギーであり、衝突された物体は量子レベルで分解、量子分解する。

ここでのダークエネルギーは現実にあるダークエネルギーとは違い、あくまで正体不明のエネルギーである。

現在状況：

過去の事件の影響で精神安定剤を服用しているが、それ以外は他の学生となんら変わらない。その能力の特異性故に、幼少時に研究所アクセラレータでの一方通行に並ぶ研究対象であった。

> i 1 1 8 0 4 — 1 5 7 0 <

色を付けられなくてスイマセン（――；）<

名前：深泉 水曜 （ふかいずみ すてら）

性別：女

身長：160cm

能力名：幻影分身イリュージョン

能力詳細：

自分とそっくりな像を作り、それを動かす能力。  
トリックアート

偏光能力の一種で、彼女は自分の周りに相手の視線を複数結ばせることで分身としている。しかし、自分そっくりな像を作り、さらに動かすという動作をとらせるには空間移動程ではないがそれなりに演算が複雑であり、水曜は今のところ4体が限界。

彼女の能力は自分の周りに複数の像をつくるだけなので、相手からだと本体も含んで見えてしまう。それでも分身の特徴故か、見分

けるのは難しい。

現在状況：

力量変換との戦闘中、Level12からLevel13へと進化したことにより、念願だった常盤台中学への入学条件をクリアする。現在、力量変換こと千五百ちいほが手回しに奔走中。

挿絵：

現在思案中・・・

名前：瀬川 一筆（せがわ ひとふで）

性別：男

身長：175cm

年齢：30～40歳

現在状況：

力量変換に関わる『実験』を指示・監修している研究員。愛煙家で、研究の合間合間でタバコを吸っている様子。彼女募集中。

挿絵：

おっさんの挿絵は需要あるのだろうか…

名前：如月 翼（きさらぎ たすく）

性別：男

年齢：17歳

能力名：風使い  
エアロシューター

現在状況：

暗部組織『テキスト』のリーダー。研究所に拾われるまではパツとしない仕事を受け持っていたらしい。加佐子や斗近・エセ侍など、キャラが濃いメンバー相手に手を焼いている。苦労症。研究所に依頼された、研究所襲撃作戦での力量変換との戦闘で左腕を切り取られ、その短い命を絶つ。

名前：愛沼 加佐子（あいぬま かさね）

性別：女

年齢：17歳

能力名：発火能力  
パイロキネシス

現在状況：

暗部組織『テキスト』に所属。戦闘狂で、よく能力者相手に勝負を仕掛けている。翼をからかって反応を楽しんでいる張本人。研究所

に依頼された、研究所襲撃作戦での力量変換との戦闘中、その戦力の差から戦意を喪失。最後に千五百に攻撃するも、反撃されて死亡した。

名前：雛山 斗近（ひなやま とちか）

性別：女

年齢：15歳

能力名：電撃使い  
エレクトロマスター

現在状況：

暗部組織『テキスト』に所属。先輩3人に対しタメ口で会話する。普段はおだやかな性格で、目を離すとよく日光を浴びてのほほんとしている。リーダーである翼に好意を抱いていたが、研究所に依頼された、研究所襲撃作戦での力量変換との戦闘中、翼の左腕を切られたことにより激昂。本来のレベル以上の攻撃を力量変換に浴びせるが、反撃を受けて死亡。翼への淡い思いを抱いたまま、15歳という短い人生に幕を下ろした。

名前：不明（エセ侍）

性別：男



年齢：16歳

能力名：水流操作スイマー

現在状況：

暗部組織『テキスト』に所属。常に和服を着ており、普段の学校へもそれで登校している模様。あまり喋ろうとはしないが、話しかけられたらちゃんと答える。仕事の時だけ帯刀するが、未だ刀を抜いたことは無い。研究所から依頼された研究所襲撃作戦での途中、力量変換の不意打ちにより死亡した。

## オリキャラの説明（後書き）

他の作者様のキャラクターと被らないように努力しておりますが、何分作品数が多いためどうしても表現が被ってしまうかもしれません。

その場合はこの玉露飴にご連絡くださいませ。

主人公の説明に対する質問もお待ちしておりますm（| |）m

## 第1話 力量変換と一方通行の日常（前書き）

まさかの連投ですw

しかも早速のオリジナルのストーリー！。

時間軸的には原作より数年前のお話です。

それでわどうぞ。

## 第1話 力量変換と一方通行の日常

### 学園都市

そこは「記憶術」だの「暗記術」という名目で超能力研究、即ち「脳の開発」を行っている都市。

その目的は、「人間を超えた身体を手にすることで神様の答えにたどりつく」ことだという。その為に人為的に生徒の脳にある種の障害を起こさせ、通常の人間と違う『才能ある人間』に身体をつくりかえる。

東京西部を一気に開発して作り出され、一部を神奈川や埼玉に及ばせながら東京都の中央三分の一を円形に占めている。

総人口は二三〇万人弱。その八割は学生である。内部は二三の学区に分かれているらしい。

開発以外の科学技術もぶっ飛んでおり、最先端の技術を実験的に実用化・運用しているため、どうやら外よりも数十年分ぐらい文明が進んでるらしい。

警備は非常に厳重で、交通の遮断に加えて周囲が高さ5メートル・厚さ3メートルの壁で囲まれている上に、街全体を三機の監視衛星が常に宇宙から監視している。

『それでは力量変換<sup>クレイドル</sup>、準備はいいかい？』

「はい。ボクは大丈夫です」

そんな半分刑務所のような都市の、とある学区内にある研究所の地下実験室に、ボクはいた。

地下実験室といっても地上から何百メートルも下に存在しており、そんなところで行う実験などそう多くは無い。

【地上でやるとまずい実験】か、【地上にばれるとまずい実験】の二つだ。まあ、今のボクに対して行われている実験は、そのどちらにも当てはまる。

それは、ボクが時間割りで【超能力】に目覚めてからだった。  
カリキュラム

その途端に今までいたクラスから特別クラスへとボクは放り込まれた。そのクラスに生徒はもう一人いた。どうやらその子もボクと同じく【超能力】に目覚めたらここに連れてこられたらしい。

一つの狭い教室には、机が二つ置いてあるだけ。  
しかもボクの場合はほとんど授業に出ることはなく、こうして実験の日々が続いている。

『これより実験を開始します』

ボクから遠く離れた場所にあるスピーカーから、そんなファックスを読み込んで喋っているような声が響くと、その直後に数秒警報サイレンが鳴る。

今ボクの状態は、とても大きい空間の壁の中央に手足を金具で固定されていて、まさに十字架に架けられた聖人イエスさなである。

そしてボクの目の前、数メートル先にあるのは細い何かの発射口。どうやら今日も、いつもと同じらしい。

警報サイレンが鳴りやむと、その細い発射口の向こうにある機械から甲高い音が聞こえ始める。その音は次第に大きくなり、耳の鼓膜を容赦なく圧迫する。

「……………」

ボクはそれを握り拳に力を入れて、必死に耐える。ここで能力を使ってしまうと数値が狂ってしまい、もう一度やり直さなければならぬ。

もう鼓膜が限界とばかりに痙攣を始めた時、射出高からなにかが超高速で飛び出した。

その赤く光る何かは残像を残しながら一瞬でボクの元へ飛来し、衝突した。

本来なら軽く人間を跡形もなく消し飛ばせるソレは、なぜか衝突した瞬間にさつきまで響いていた轟音と共に嘘のように消滅していた。

『実験終了。クレイドル 力量変換が変換したエネルギー数値を元に演算を開始します』

「……ふう……」

ボクはその声を聞いて、力んでいた肩の力を抜く。  
大丈夫だと分かっているにも、超高速でボクの身体目がけて飛来するアレは、やっぱり怖いものには変わらない。

ボジトロンランチャー  
陽電子砲。

それがボクに衝突してきた正体だった。

やっと実験が終わり、地下実験室から地上のフロア上がったボ

クは、よろよろと仮眠室へと向かう。

「一日一回とはいえ、あの脳を引き裂くような音はどうにかならないのかなあ……」

「よオ、今日もまたお疲れみたいだなア？」

フラフラと仮眠室に向かうボクに声を掛けたのはもう一人の生徒、クラスメートアクセラレータ一方通行だ。

本名はボクは知らない。というかボク自身、自分の本名も知らないので、そこら辺は周りの研究者達せんせいが呼んでいる呼び名で互いに呼んでいる。

そんな彼が声をかけたのでボクが彼の方へ振り向くと、なぜか彼は顔を赤くした。

「ふむう？どうしたの一方通行？顔が赤いよ？」

「な、おめエのカッコがソナだからだ！なんか羽織るくらいしろクレイドル力量変換！」

彼が顔を赤くして顔をボクからそむけながら必死に訴えてくるので、ボクは今の自分の身体を見下ろす。

実験の時はいつも数値をより正確にとるために、ボク能力が一番発揮されやすい裸体に近い服装に着替えさせられる。

ボクは女の子なので必要最低限といったら胸と股を特殊なテープでテーピングするぐらいだろうか。

まあ、一方通行は男の子だから、なにか意識するのもかもしれないけれど。

「ふむう？別にボクはこのままでも問題ないよ。このほうが動きや

すいし、いちいち着替えたりしなくて済むし」

「俺には問題あんだよ！いいからなにか着とけ！」

そう言つと一方通行は顔を赤くしたまま足早にボクの横をすれ違  
おうとして……。

「えいつ」

ボクの両腕に捕まった。

「ンなあ！？」

「ふっふっふー、逃がさないよー？」

赤みがかかっていた白い肌はボクが腕に抱きついたためか更に赤  
くなり、さながら茹ったタコのようなだった。

ボクは一方通行の腕に抱きついたまま顔を彼の顔に近づける。

「ふむう？どうしてそんなに顔が真っ赤なのかな。やっぱり恥ずか  
しい？」

「クソッ、いいから離せてめエ！」

もはや白かった肌はどこにも見当たらないくらいに茹った一方通  
行は、強引に引きはがそうとボクを【反射】する。

一方通行の能力は『ベクトル操作』。あらゆる力の向きを変える  
その能力は、静電気から核ミサイルまで、彼には通じることはない。  
そんな化け物じみた能力を人間の肌に直接行使したならば、それ  
は皮膚が全て吹き飛ぶか、血流が逆流して血管が爆発するか、果て



はさらに惨い凄惨な姿になるはずだ。

しかし今、目の前に居る少女はその花のような笑顔をこちらに向けたまま何も起きていないように腕に抱きついたままだった。

「……ッたくよオ、おめエのその能力も十分にばけモンだよなア？」

「ふむう……。その言い方はちょっと傷つくかも。その化け物じみた能力のおかげでこうして一方通行に唯一触れるんだよ？」

「……ホント不思議だよなア……」

『クレイドル 力量変換』。それは自分自身が受けたエネルギーを全て吸収、変換する能力。

あらゆる力量を【吸収】する彼女にとって、一方通行がいくら【向き】を変更しても、彼女に及ぶ力量はすべて【吸収】されてしまい、うまいこと中和されているのだ。

ようするに彼女に核ミサイルを放ったとしても、彼女はその莫大なエネルギーを【吸収】してしまうだけで、かすり傷一つつかない、正真正銘の化け物である。

「どうせボクが抱きついていても熱は【反射】しちゃってるんですよ？ だったら問題ないよー」

「問題あんだよ。邪魔だからどけッつつてんのによオ」

「ふむう、照れてるね照れてるのだね照れちゃってるね？ これだから弄りがいがあるよぉ」

そういつて力量変換が両腕に更に力を込めて捕まえていた一方通

行の腕を自身の胸に押し当てた。

「                    ツ！！」

【反射】しているので腕に感覚は伝わってはこないが、視覚的に一方通行はたじろいでしまった。

もちろん彼も年頃の男の子なわけで、女の子に抱きつかれるのはまんざらでもない。しかも力量変換の容姿も悪くないし、性格は若干うっとうしいが悪印象とまではいかない。

しかしその触れた場所がまずかった。

彼の身体は今【反射】に設定されている。つまり彼の身体に着くものは跳ね返してしまうわけで。

でも力量変換の身体は彼の逆、【吸収】の能力だ。【反射】の影響は受けない。

そう、“彼女自身”は。

ペリッ。

一方通行の目の前で、彼女の“最低限の場所”を隠していたテープが、【反射】によって乾いた音を立てて引きはがされる。

「え？」

「ああ？」

全裸の少女に胸を押しつけられる一方通行。  
アクセラレータ

自分が隠していた部分を見られた力量変換。<sup>クレイドル</sup>

その時はゆつくりと、しかし確実に一方通行に迫っていた。

「……ふむう、何か言うことは？ 一方通行ア？」

「……だから邪魔だツツツたンd」

その後、一方通行が唯一【反射】できない、力量変換の攻撃<sup>ヒンタ</sup>が放たれた。

その時に「不幸だアーーーーーッ！」とか聞こえたのは幻聴であろっ。

## 第1話 力量変換と一方通行の日常（後書き）

如何だったでせうか？

一方通行のキャラが崩壊している気がしてならないのですが……。

気のせいですね おい

なるべく返信させて頂きますので、ご意見、ご感想など、お待ちしております。

でわまた次回。 ノシ

## 第2話 力量変換と一方通行の日常 〱 崩壊〱 (前書き)

早く原作介入したいなあ……どうも玉露飴です。

なんと早くもお気に入り件数が6件も……いやはや、驚きで息が出来ませんでしたよw

それでわどうぞ

## 第2話 力量変換と一方通行の日常　　く崩壊く

「ふむう、学校に行ってみたいなあ」

身体クレイの“必要最低限”の場所をテーピングで隠した少女、力量変換ドルは、地下実験室へ向かうエレベータの中で、そんな言葉をうわごとのように呟いた。

彼女はこの学園都市に来て、時間割りカリキュラムを受けて能力に目覚めて以来、授業という授業を受けたことが無い。それは彼女の超能力の特性が原因なのだが、一応そこは自覚しているつもりだった。

原子炉の中に放り込んでも死なない。おそらく隕石が衝突しても死なないその身体は、まさに化け物と呼ばれるにふさわしい能力だった。

「まあ、一方通行クラスメイトがいるならボクはムリに行きたいとも思わないけどね」

クレイドル  
力量変換。

それは身体に触れるエネルギーを【吸収】し、別のエネルギーに【変換】する能力。

よって彼女に身体に触れる全ての力量は例外なく【吸収】されてしまう。ちなみに、質量もエネルギーの一形態として認識されているため、物体でさえも【吸収】が可能である。

だが、今の彼女は『それだけ』である。

【吸収】や【変換】はできても、まだその【変換】した超高エネルギーを【行使】することが出来ないのである。

ようつするに、自身の能力に対する経験が少ないのだ。

彼女の友達一方通行だって、まだベクトルを【反射】することし

かできていない。

「早く一人前になりたいなあ……」

ようやく地下実験室に着いたらしく、エレベータがガクンと揺れて停止し、目の前の自動ドアをゆっくりと開く。

「力量変換、ただいま参上しました」

「ああ、では早速だが所定の位置についてくれ」

忙しそうにパソコンと向き合う研究者達<sup>せんせい</sup>は、彼女の声を聞くなり実験室の中へと促した。

今日もまた陽電子砲<sup>ボジトロンチャ</sup>の実験なのだろうか。細い射出工が特殊強化ガラスの向こうから覗き込んでいる。

すでに着替えは済んでいる。というか昨日からこのままである格好で研究者の言う所定の位置へといそいそと向かう。

横に備え付けてあるはしごを上り、十字架のようないつもの場所<sup>ボジション</sup>に着く。

足を拘束具でしっかりと固定し、外れないのを確認した後に、次は手首を拘束具で固定する。彼女の今の状況は、彼女の“必要最低限”の部分しか隠していない身体の手足を、拘束具で固定されているという、なんとも怪しい雰囲気<sup>きふき</sup>が漂う姿だった。

『準備はいいかい、力量変換？』

「はい、おーけーです」

しかし、いつもスピーカーから聞こえてくるその男性研究員の声

は、その姿に欲情するわけでもなく、ただひたすらに淡々としている。

だが、今日は何かが違った。

なにか欲情する以外で興奮しているような…、何か今から起こることを楽しみにしているような、そんな声だった。

「ついに目覚めちゃったのかな、あのセンス」

それでも彼女はそんな声を聞いても、冷静であつた。

襲い掛かってきたとしても、いざとなったら“人間という質量”  
として【吸収】すればいい。

研究者が力量変換のことを『モルモット』というのなら、ボクにとつて世界は『餌』だ。

ただそれだけだった。

『これより実験を開始します』

そんなアナウンスが響いた後、お決まりのサイレンが鳴り響く。

そのサイレンを聞き流しながら、力量変換はこの実験が終わったあとのことを考えていた。

今日は少しメンドクサイと言っていたから、まだ実験は終わっていないだろう。だったら実験が終わるまでエレベーターの前で待ってみようかなあー、などと考えてみる。

あの初心な少年のことだ。また顔を真っ赤にして、照れ隠しするのだろう。

「ふふ、楽しみだなー」

そんな一方通行の茹る姿を想像して思わず顔から笑みがこぼれると同時に、射出工から壮絶な音を立てて、何かが飛び出したのに気



づいた。

しかし彼女はまだ気づいてなかった。この実験が 力量変換の能力拡張実験 だとは知らずに。

「なんだ……？これはよオ……」

一方通行は思わず息を呑んでいた。  
なぜか「研究施設から外に行こう」と研究員の車「コン」に寄せられ、適当に各学区を周っていたら、突然地震のような揺れが起きたからだ。  
一方通行は【反射】で防ぐことができたが、その直下型ともいえる一瞬の縦揺れは、学園都市の交通機能をマヒさせていた。  
ビルの窓ガラスは割れ、学区は軽くパニックに陥っている。

「クソッ」

とりあえず今の地震のせいで街路樹に衝突し動かなくなった研究員と車「コン」を捨て、外に出る。そのうち風紀委員とやらがなんとかしてくれるだろう。

それにしても、凄惨だった。

“樹形図ツリーダイアグラムの設計者”はこんな地震イレギュラーが起こるとは言っていなかった。だとしたら、これははじめての予想外かもしれない。

「研究所はッ」

一方通行は思いがけない出来事に軽くパニックになりながら、なぜか研究所のことを心配していた。

化け物な自分を上回る、さらに化け物な“アイツ”。

それでもアイツはおかしいぐらいに明るく笑って、【反発】する自分を優しく【包容】してくれた。

自分でも分かっている。そんなアイツの性格に甘えているだけなんだと。

でも俺はそんな日常を気に入ってしまった。だってアイツは温かな揺りかご、“クレイドル”なのだから。

だから俺は失いたくなかったのだろう。自分が帰る揺りかごが壊れてしまうのを。

研究所のある方角からは、黒い煙が何本も、空の雲に追いつこうとするように立っていた。

一方通行はその場から駆け出した。こんな時にベクトル操作が満足に出来ない自分自身を恨んだ。

今、一方通行は一般人と同じように地面を蹴って進んでいる。

日光すら【反射】して、まっ白な腕を必死に動かして。

はじめて感じる、心臓が高鳴り脈打つを感じながら。

研究所は無事だった。

しかし、呼吸が乱れたまま中に入った一方通行は、思わずその呼吸が止まるかと思った。

広いロビーがあったその場所は、中心に大きな穴をぽっかりと空けて荒れ果てている。

「なんだよ、これはよオ……」

その穴から下を覗いてみると、数十メートル先から光が届かないのか、黒い色で染まっていた。

穴の大きさは大体で直径十メートルほど。それも、とてもきれいな円で、だ。

ありえない。

地下実験室での実験は確か陽電子砲だったはずだ。その影響だったとしたらこんなきれいな風穴では済まないはずだ。

「いやア、待てよオイ。その実験に協力してたのは……」

“一日一回とはいえ、あの脳を引き裂くような音はどうにかならないのかなあ……”

「ッ！ー！」

一方通行はその頭に浮かんできた最悪の結果を予想し、絶句した。彼女、力量変換は受けたエネルギーを【吸収】、【変換】する能力だ。

なら、その “【吸収】【変換】されたエネルギーはどこへ行く？”

バッテリーだって、電力を永遠にためておくことは出来ない。放っておいたら放電して徐々にその蓄えていた電力を消費していくだろう。

しかし彼女の場合は毎日、一日一回のペースで陽電子砲という絶大なエネルギーの充電をしていた。一日で放電してしまうような量ではない。

しかも彼女の場合、まだうまく【吸収】を扱えない。人を触って【吸収】することは無くなったが、それ以外はまだ分からない。

俺と同じく、太陽光エネルギーを【吸収】していたら？

地面に触れて、人間には感知できない震度一以下の地震のエネルギーを【吸収】していたら？

それはバッテリーを充電器に繋げっぱなしなのと同じだ。

そんなことをしたらバッテリーは過充電を起こし、ダメになってしまう。でも、それは家庭用のバッテリーの話だ。

彼女は家庭用のコンセントから流れる電流とは比較にならないほどのエネルギーを蓄積させている。

“そんなものが過充電程度でとどまるはずがない”

キイイイイイン。

突然そんな音がきれいすぎる風穴のそこから聞こえてきた。

「ッ！」

一方通行はほぼ条件反射の域で身体に【反射】を展開する。

それから一瞬の間も置かず、“黒い柱”が昇ってきた。

それは核反応にも及ぶかもしれない、この世では考えられない超高エネルギーの奔流。

風穴を押し広げるように、それは風穴の淵に立っていた一方通行を飲み込んだ。

「ぐツ!？」

しかしそれが力の流れであるなら、一方通行のベクトル操作は有効である。

その地面の底から沸いてくる死の奔流を【反射】しながら、一方通行は研究所の屋根を突き破って外に放り出された。

途中で奔流から脱出することができなかつたら、あの柱に乗せられてどこまで押し上げられたんだろう。

「チツ! オイ、力量変換! 大丈夫かア!？」

地面に叩きつけられる衝撃を【反射】して、研究所にいるであろう力量変換に向かって叫ぶ。

瞬間、柱が消えたと同時に研究所の天井を突き破って、何かが飛び出してきた。

それはさっきの柱と同じ、黒い色をしていた。

遠めから見ても人の形をしているのはわかる。しかしそれには不自然すぎた。

なぜ背中に羽が生えている？

なぜ宙に浮いたまま落ちてこない？

なぜ、あの姿を見てどこかで見たような気分になる？

そしてその漆黒の三対の翼を持つ、どこかで見たような姿の人間は、一方通行の方を見て、言った。

「いいねこれ。すごくいいよ」

キシツと音を立てて、彼女、クレイドル力量変換は歪んだ笑顔を浮かべた。

## 第2話 力量変換と一方通行の日常 〽崩壊〽（後書き）

あれ、一方通行のキャラが分からなく……。

まあ、孤独ではなかった一方通行はこんな感じに丸くなってたかも  
しれせんし。  
想像ですがw

ご意見、ご感想、お待ちしております。

でわまた次回

### 第3話 力量変換と一方通行の日常 〵決意〵（前書き）

まさかの連投その2。

本音を言つとこの暗い過去編をさっさと終わらせて、原作キャラとおしゃべりさせたいですw

でわどろぞ。



### 第3話 力量変換と一方通行の日常 〱決意〱

アクセラレータ

一方通行は目の前で起きた出来事に、思わず絶句していた。

ツリーダイアグラム

突然、樹形図の設計者が予言していなかった直下型の地震が起き、その被害を受けたのか研究所は風穴を空けられ、その穴の中から自分の知っている人間が翼を生やして飛び出してきた。

「どうなつてんだよお、オイ」

一方通行は空中に浮かんだままこちらを見下ろしている力量変換クレイドルを睨みながら一人愚痴る。

クラスメイト

今日の朝までどうでもいいようなことを駄弁っていた友達が突然、目の前で背中に羽を生やして飛んでいるのだ。

そんな奇奇怪怪な様子に一方通行が警戒していると、自分が睨んでいた人物が口を開いた。

「すごいよ一方通行。これ、すごくいい。ボク、空飛んでるよ?」

アハハと、声には似つかない歪んだ笑顔で、少女は笑う。

ルシフェル

黒い三対の翼を持つ目の前の彼女は、さながら墮天使のようにも見える。

すると突然、ピタッと突然笑い声が止むと、力量変換はスツと一方通行に向き直る。

「一方通行。ボク、どうやらレベルアップしたみたいだよ?」

「……ンで、そのレベルアップしたテメエはこれからどうすんだよオ?」

一方通行がそう問うと、彼女は少女らしい仕草で悩み始める。身体が揺れるたびに、背中の三対の黒い翼も揺れる。同時に、羽のようなものがヒラヒラと地面に舞い落ちてくる。

その羽はヒラヒラと研究所の残骸にぶつかり、容易く残骸を貫通した。

超高エネルギーが物体に触れた時に起こる量子分解に、その様子は似ていた。

「……なるほどオ、研究員がテメエをいじくった結果ってワケかア？」

一方通行はその現象を見て冷や汗をかいた。

よつするに目の前の力量変換は、触れた物を容赦なく分解する羽毛と、想像もつかないエネルギーを蓄えた翼を三対も持つ、神話級の化け物だからだ。

「……ふむう、やっぱり学校に行ってみたいかなあ」

「……はア？」

そんな様子の一方通行の心境を知ってか知らずか、彼女は全く緊張を感じさせない、のびのびとした口調でそんなことを言い放った。

この緊迫した状況で学校に行きたいという少女を見て、一方通行は思わ吹き出してしまった。

「クククク……、テメエ、なに言ってんだよオ？」

「ふむう？ボクは一方通行に何がしたいのかーって聞かれたから、

学校に行きたいーって、言っただけだよ？」

それでも笑うことをやめない一方通行に、力量変換はただ不満そうに首をかしげる。

（なんだよ。外見は変わっても、中身はアイツのまんまじゃねエか）

自分が一番心配していた部分が消え、一方通行はそんな自分に笑っていた。

力量変換はいつまでも笑うことをやめない一方通行に腹を立てたのか、顔をムスツと膨らませて睨みつける。

「ふむう、一方通行が笑うのを止めてくれない。どうしてかなッ……！！」

その時、一方通行は笑っていた顔を一瞬で引っ込ませ、【反射】を展開した。

刹那、今まで感じたことの無い風圧が、彼の身体を襲った。

「クッ！？」

【反射】はしているものの、何分彼は初めての全力疾走で疲れていた。【反射】のほんの少しの隙間を縫ってそのカマイタチは彼の白い肌を襲う。

カマイタチが去った後、数本の赤い線が入った一方通行は、それでも彼女の姿を視界から逃すことはなかった。

「うわあああああああああああ！？」

さっきの黒い柱分のエネルギーをまた充電してしまったのか、さ

っきのカマイタチは彼女の“放電”によるものだったらしい。  
力量変換は自身のなかで暴れるエネルギーに悶えながら空中でも  
がき続けている。

「チツ、浮いてたんじゃなんもできねエじゃねエか……！」

一方通行は今の状況に焦っていた。このまま空中で“充電”を続  
けていたらマズイ、と。

しかし一体どうやって彼女を助ける？

彼女は自分より十数メートル上に浮いたまま降りてくる気配が無  
い。恐らくまだ自分の能力をうまく扱えていないのだろう。

彼女は声にならない叫び声をあげながら頭を抱えて身悶えする。

そのたびに黒い羽は舞い落ちる数を増やし、辺りの瓦礫を抉ってい  
く。

「俺はどうすりゃいい……？」

考える。度重なる演算の疲労と、全力疾走で酸欠のボロボロの状  
態で。

「アイツは意味わかんねエくらいのエネルギーを演算してやがんだ。  
俺がここで諦めるわけには……？」

意味わかんねエくらいのエネルギーを演算？そこで一方通行は気  
がついた。

そんな大量の演算が、あの自分の能力に慣れていない小さな少女  
に、ましてや長時間行えるワケが無い。

要するにあの膨大なエネルギーを抱えている時間には限界がある  
のだ。

そしてその膨大なエネルギーを手放した時、行き場を失ったそれ

はどうなるか。

それに気づいた時には、すでに少女の身体はゆっくりと落下を始めていた。

「ンだよそりゃ！」

一方通行は考えるより先に彼女の下へ走り出していた。もう下手に【反射】も使えない疲れきったボロボロの身体で。

しかし彼はその最後の力を振り絞って【反射】を展開し、落ちてきた彼女を何とか受け止める。

その時に何度か黒い羽に当たるが、【反射】のお陰かダメージは無い。

「クソ、俺が掴んでてもヤバインだよなア!？」

彼の状態は【反射】。力量変換の状態は【吸収】である。

一方通行が【反射】した力量はすべて彼女が【吸収】してしまう。これでは彼女の脳にさらに圧迫をかけてしまっている状態だ。

「どこだ、どこかコイツが“放電”しても問題ねエ場所は!？」

首をぐるぐると回して辺りを探ると、一点を見つけて目が止まった。

ついさっき、黒い柱と力量変換が飛び出してきた、直径十数メートルの風穴だ。おそらくこの下は陽電子砲の実験施設までつながっているのだろう。

しかしそうするとこの穴の深さは数百メートルなのだろうか。“その時に発生してしまうエネルギーはどのくらいのものなのか”。

「……う……っ……」

抱えている腕の中で、いつも自分のことをからかつては太陽のよう  
に笑っている少女が、いままで見たことも無い苦しそうな表情を  
浮かべている。

「……躊躇ってる暇なンぞ、ねエよなア!？」

一方通行は彼女を抱えたままその風穴へと飛びこんだ。  
そうだ。こんなところで無くすワケにはいかないんだ。  
孤独だと思っていた俺を包み込んでくれた、この温かな揺りがこ  
を。

穴に飛び込んでから数秒後、腕の中で力量変換の翼から淡い、黒  
い光を放ち始めた。

「さア来い! テメエの揺りかごの掃除、手伝ってやつからよオ!」

直後、再び学園都市を地震が襲った。

それと同時に、学園都市の空へと伸びる黒い柱を、学園都市中の  
人々が目撃した。

地震はその後、複数回起こっていたが回数を経ることに弱体化し  
ていき、次第に収まっていた。

「ここは……どこだア?」

一方通行が目を覚ますと、そこはあまり見覚えの無い部屋だった。気だるい身体をなんとか起き上がらせると、自分の日光を反射していたまっ白な肌はところどころ傷つき、絆創膏や包帯が巻かれている。

他にも点滴や電極が付けられている辺り、病院にでも運ばれたのだろう。

「……ふみゃあ……」

どこからか猫のような声がして首だけを横に振り向くと、そこにはついさっきまで自分が抱きかかえていた少女が気の抜けた表情で自分と同様、ベッドで寝かされていた。

あの過充電状態からは想像もつかないその隙だらけな寝顔は、彼の不安だらけだった心を癒した。

「ったくよオ、俺はコイツになンかあてられたかア？」

そういつて一方通行は自然と笑みがこぼれた。今までの笑みとは違う、少なくとも自分が好意を抱くものに対する笑み。

自分と同じ赤い目をしながら、髪は真っ黒な彼女は規則正しく胸の辺りの毛布を上下させている。

「……がつこ、一方通行も……いつしよ……に……」

それは寝言だったのか、力量変換はそう呟くと寝返りを打ってこちらから表情は見えなくなってしまった。

「学校、ねエ……」

一方通行が彼女の向こう側にある窓から空を覗く。そこには果てしなく青が広がり、白い雲がのんびりとその青に反して浮かんでいる。

今回の事件で、彼女の能力はLevel 15であることは証明されてしまった。

しかしそれと同時に、今回のような急速な進行の実験は危険だと研究者達は理解したようで、力量変換に対する実験は恐らく減少するだろう。

「次は俺、かア……？」

力量変換は完成した。ならば次は一方通行を、と来るだろう。

「ハッ、上等じゃねエか。研究者達のデメエロ実験に付き合っおあそびてやつからよオ？」

そして、俺がお前を超える化け物になって、お前が学校に行けるような暇人にしてやるよ。

自分の横で眠る、その全てを飲み込む小さな華奢な背中を見て、そう一方通行は決心した。



### 第3話 力量変換と一方通行の日常 〵決意〵（後書き）

過去編はここで終了です。お疲れ様でした、自分。おい

ただいま作者は絶賛レールガンを見直し中ですハハ；

少々お待ちをw

ご意見、ご感想、お待ちしております！

でわまた次回 ノシ

#### 第4話 はじめてのおつかい？（前書き）

おーっと、まさかの連投ッ！（野球中継風）

……げふんげふん。

でわどうぞ。（9月19日改稿）

## 第4話 はじめてのおつかい？

結果から言うと、力量変換クレイドルの起こした直下型連続地震、通称『想イレギュラー』  
定外事件』は単なる報道ミスとして処理された。

もちろんそれが能力者によって引き起こされたなどとは口が裂けても言えないので、天然物ノーマルの地震であると、上層部から学園都市へとニュースで報道された。

しかしその被害は学園都市の耐震技術が功を奏したのか、ガラスが割れるなどの比較的に軽微な損害に抑えられた。

そしてその震源地でもある、力量変換や一方通行アクセラレータが実験に加わっていた研究施設は復旧不可能として破棄。その事件終了直後に立ち入り禁止区域に認定され、幕を閉じた。

そして力量変換のその後であるが、彼女は学校へ登校することを許可された。

理由として挙げられるのは、今回の事件が深く関わっている。まず、力量変換に対する実験スピードを見誤ったこと。これは力量変換の実験を担当する研究者の独断先行であつたことが判明し、以後、上層部の管理の下に慎重に扱われることになった。

そして次に、彼女が精神的な病を患った事に関連する。精神を患ったと言っても重度なものではなく、軽度なものとして処方薬で十分対応はできるが、なんともこのような過ちを繰り返すのは学園都市の予算的に厳しいからでもある。

そして最後、一方通行が今まで以上に研究協力に対する意欲を見せ始めたからである。想定外事件で彼女の過充電状態バーストを止めた際に何か心境の変化が生じたと見られるが、その原因を詮索することには何の価値も見られないので不問とする。

登校を許可されたのは常磐台中学である。全校生徒がLevel 3以上であることから、もし力量変換が不測の事態に陥ったとしてもその全校生徒でかかれば物量的に鎮圧できると考えたかららしい。

もつとも、彼女の能力の前でそれが抑止力になるかどうかは疑問だが。

よって彼女は精神安定剤トランキライザーの服用と、Level 5の超電磁砲レールガン、御坂美琴と同室に居住することを条件に念願叶って通学を許可された。

なぜ超電磁砲と同じ部屋が条件なのかというと、先に述べたように力量変換はその能力の特異性故、過去より能力の操作は上達して再び過充電状態になることはないが無いが、万が一に備えての保険でという意味だ。

もつとも入学したその後、常磐台中学の校則に合法的に退けられて隣の部屋へと移ることになるとは誰も予想していなかったが。

そしてその中心人物である彼女は今、仮住居である研究所から外へ出て、学園都市を散策中……もとい、入学に先立っての奨学金の引き落ろしに向かっていた。

「ふむうゝ、一方通行は気をつけろよって言ってたけど、そこまで危ないことはなさそうだよー？」

そう言って歩道を闊歩する彼女の姿は、周りを歩く者の目を引くには十分すぎる格好だった。

黒い肩まで伸ばした髪は歩くたびに小さく揺れ、上はキャミソールがすこしはだけ、下は薄い短パンと、今の季節を完全無視したフアッションである。もちろん彼女は機動性を優先しただけであつて、本来ならば例の“必要最低限の部位を隠したテーピング”で出かけるつもりだったのである。

もちろん、それは一方通行が顔を真っ赤にしながら全力阻止したが。

「それにしても、これが冬という季節かー」

彼女はその季節を全身で感じるように腕を広げてクルクルと回り始める。その一回転ごとにはだけかけていたキャミソールがひらひら舞うものなので、それを見守っている女性陣はハラハラ、男性陣はドキドキと言ったところか。

まあ彼女自身はまだ小学生という扱いなので、手を出したら即刻ジャッジメントに風紀委員が警備員に捕まってしまうが。

彼女は寒さを温度というエネルギーとして【吸収】しているので寒いとは感じない。ようするに温度として身体は感知していないことになる。

研究所では新たに彼女専用の放電施設といっても過言ではない設備が開発され、毎日貯めたエネルギーはその設備でタービンを回し、学園都市を明るく照らす電気に再利用される。ある意味究極のエコエネルギーだ。

「ふむう、そういえば郵便局っていう場所はどこのことなんだろう」

彼女は学園都市に來た時に行われる時間割カリキュラムりによってろくに学園都市を回っていない。ようするに世間知らずである。

研究員せんせいに貰った地図を頼りにここまで來たものの、どれが郵便局というのかさっぱり分からない彼女は首をかしげていた。

その時であった。突然目の前に自分より2〜3歳年下に見える女の子が現れたのは。

「ふえ！？」

「ふえ…？」

突然、何の気配もなく現れた目の前の女の子に思わず間の抜けた声を出してしまった。しかしそんな彼女とは対照的に突然現れた女の子は何が起こったのか分からないと言った様子で茫然とその場に立ち尽くしている。

「え……外……？」

ようやく口に出した女の子の声は小さかったが、その直後にシャッター中から男の野太い声が響いてきた。

『テレポートだあ？』

その声にハッとしたのか、女の子は必死に下ろされたシャッターを叩き始めた。

「白井さん！？中にいるんですか！？どうして私だけ！？」

女の子は今自分の置かれている状況にひどくパニックになっている様子で、一心不乱にシャッターを叩き続ける。

「白井さんも早く外へ！白井さん、どうして返事をしてくれないんですか！？白井さん！白井さん！？」

『グッ！？』

女の子が叩くシャッターの中で、誰かが蹴られる鈍い音が聞こえてきた。

その音を聞いた女の子が一瞬シャッターを叩く手を止めると、勢いよく振り返り、歩道を往来する人に向かって助けを呼び始めた。

しかしなぜか人はその女の子の前を通り過ぎていくだけで、誰もその声に応じようとはしない。せいぜい「ねえ、あそこヤバいんじゃない？」「警備員アンチスキルに連絡するか？」などというヒソヒソ話が広がるだけである。

「……一方通行から聞いてたけど、人ってホントに冷たいんだね？」

と、そんな達観したようなことを呟きながら、彼女も女の子の前を通り過ぎる、

ことなんて出来なかった。

「どうしたの？ボクにできることなら手伝っけど」

すでに泣き始めている女の子を諭すような口調で話しかけると、

その女の子は食いつくように彼女の服をつかんだ。

「この中に強盗が入ってて、その中に白井さんがッ……白井さんがッ……」

女の子はパニックになっているようで、これ以上はうかがい知ることができない。しかし彼女にはそれより気になることがあった。

「ふむう、人？助けたい人がいるの？」

「はい！だからッ……助けて下さい！」

そこまで聞くと、彼女はその女の子の頭をポンポンと軽く叩いた後、シャッターへと向き直る。

「能力は極力つかうなって言われたけど……、せつかくの人助けだもん。いいよね。一方通行？」

そういつと彼女は閉じたまま沈黙しているシャッターに手を触れ、その質量を【吸収】した。

「え？」

その様子を見ていた女の子はとても驚いたのか、泣きじゃくっていた顔がぼかんとしている。

「ふふふ、驚いた？じつわね」

その自分の能力に驚いている女の子に能力の事を説明しようとしていると、脇腹辺りにコッソンと何かが当たった。



「ふむう？……鉄球？」

彼女の脇腹にはなぜか、直径1cmくらいの鉄球が押しつけられていた。

しかしその鉄球は落ちる事は無くただ彼女の脇腹に触れているだけでピクリとも動かないでいる。

「なっ、絶対等速イコールスピードが効いていないだと！？」

どうやらこの鉄球の持ち主であるらしい男は、鉄球を張り付けたままの彼女を見て信じられないと言った表情でこちらを見ている。

「絶対等速？ああ、あの能力を切るか対象物が壊れるかするまで一定速度を保つ能力ですか？」

つい先日、研究者から受けた授業の中でそんな能力の事を言っていた気がする。それを思い出した彼女はニヤツと笑い、その信じられなさそうな男を見据える。

「まったく、君も不運だよねー。それってボクと一番相性が悪い能力じゃん？」

すると彼女は脇腹にくっついたままの鉄球に手を触れると、なぜかそこにあっただはすの鉄球はキレイに消えて無くなっていた。

「う、嘘だろ……おい？」

「ホントだよー？」

障害物が無くなった彼女は、その彼女の様子に驚いている強盗の犯人らしきその男にゆっくりと近づく。

「なっ！？なめてんじゃねえぞぉ！」

男は近づいてくる彼女に気づくと、ジャージのポケットから複数この鉄球をばらまく。その鉄球はまっすぐに、男に向かって歩いてくる彼女へと迫る。

「あ、危ない！」

中でなぜか倒れていたもう一人の女の子が声をあげると同時に、真っ直ぐに力量変換にぶつかった鉄球はその存在を吸われるように消えて行った。

「…………ふむう、充電完了。かな？」

啞然とする男の前で雰囲気とは不釣り合いな間延びした声で呟くと、突然彼女の背中のキャミソールを突き破って、黒い翼が左片方だけ生えてきた。

とても黒い、光さえその翼に触れることも出来ないような、深い漆黒。

その羽が左片翼一本だけ、彼女の背中から生えていた。

「さて、ボクはお薬の時間もあるから手早く済ませたいんだけども…………」

その時、羽が生えた時の風で流されて来たのか、一枚の書類がヒラヒラと舞い、漆黒の羽に触れた瞬間、ジリジリと焼けるような音

を立てて羽に触れた部分がキレイに消滅した。

その漆黒の片翼から舞い落ちる黒い羽毛も、床に落ちるとその床は強酸でもかけられたように穴だらけになっていく。

すでに男は立っていることなど出来なかった。その場にへたり込み、足は震え、腕は動かず、寒さではないなにかによって歯を力チ力チと鳴らしていた。

それを見下ろすのは、黒髪紅眼の漆黒の片翼を持つ、女の悪魔。その女の悪魔はその場の雰囲気とはかけ離れた、その姿からは連想出来ないような純真な笑顔で、こう言った。

「郵便局ってどこか、知ってる？」

その言葉を聞いた瞬間、死の呪いをかけられたように、男は意識を失った。

#### 第4話 はじめてのおつかい？（後書き）

これでいい……のか？

時系列とかなんかぐっちゃになってるやもしれませぬ。ご容赦を  
^ ;

ご意見、ご感想、お待ちしております。

でわまた次回 ノシ

## 第5話 はじめてのおつかい？（前書き）

どうも、実は原作をあまり知らない作者です（爆

ただいま必死に読破中ですのでご容赦をm（――）m

それでわどうぞ。

## 第5話 はじめてのおつかい？

「……よっし、もう大丈夫みたいだね？」

目の前の男が倒れたまま気絶していることを確認してから、漆黒の片翼を生やしている少女、力量変換はそう<sup>クレイドル</sup>宣言した。

人質として捕らえられていた客や係員達に、段々と安堵する声が聞こえてくる。

「じゃあ、いい加減危ないからしまっちゃおうか」

そういうと、力量変換は背中から生やしていた黒い片翼を霧散させた。翼を構成していた黒い羽はバァツと広がり、やがて形を保てなくなり空気中へと溶けていく。

その後に残ったのは一人の黒髪の少女と、その背後に残った強酸をかけられたような床だけだった。

「……………あ……………」

そのあまりにも不思議な様子に、<sup>ファンタジー</sup>風紀委員、<sup>ジャッジメント</sup>白井黒子は言葉を失っていた。

左足を怪我していることも忘れさせてしまうほど、その光景は神秘的だった。

そんな様子の白井に気づいたのか、その幻想世界の主の少女は手を差し伸べてきた。

「立てる？」

「あ……、はい。大丈夫ですの。お構いなく……ッ！」

少女の手を借り、左足に体重がかかったところで収まってきていた激痛が再び白井の華奢な身体に襲い掛かる。

そのまま倒れそうになった白井を、あわてて少女は抱きとめた。

「ふむう、強がってるね？ダメだよ自分の身体を粗末にしちゃあ」

少女はそんな様子の白井を諭すように声をかける。

どうやら怪我を負っていることはすでにお見通しらしい。まあ、この様子からして怪我を負っていないという考えの方がおかしいのだが。

「でも、こんな事態に陥ってしまったのも全て私の責任ですの。私がか先走ってしまったばかりに、初春や古法先輩を巻き込んで……」

その白井の苦痛の告白を聞いて、少女は一瞬黙ってしまった。しかし彼女はなにか決意を宿した目で一人頷くと、肩を貸している白井に向き直る。

その赤い瞳は、どこか爛々として輝いていた。

「そうだね。確かにあなたには責任があるのかもしれない。ボクにはよく分からないけど、これは大変な事態みたいだったからね」

その邪気のない瞳にまっすぐ見つめられた白井は、どこか居心地が悪くなって少し視線を逸らしてしまった。

それでも構わず、少女は話を続ける。

「でも、あなたはみんなを守ろうとして頑張ったんだよね？周りが見えなくなるくらい必死に」

その言葉に、白井は自分の中で違和感を感じた。  
本当に、自分は彼女が言っているような感情を持っていたからこのような行動をとったのだろうか。

実際は、いつまでも子供扱いする先輩に自分を見つめ直して欲しくてやった、幼稚な感情が先走っただけではないのか？

だとすると、彼女は私のことを買いかぶりすぎだ。そして、そのように思われている自分はそれと全く反した考えの下に行動していたことに対して、白井は静かに自分に激怒した。

「だから、あなたも、その部分は負い目に感じることはないと思う  
うん、そうだよきっと」

そついい終わると、彼女はニパツと、果てしなく明るい笑顔で白井に笑いかけた。

その光景は、暗い店内に差し込む日差しに照らされて、さながら微笑みかけてくる女神のようだった。

少女が消したシャッターの場所から、ぞろぞろと中にいた客や係員たちが外へと出て行く。

やっアンチスキルと警備員も到着したようで、外からはサイレンの音がまばらに聞こえ始めていた。

「じゃ、もう大丈夫そうだから、ボクはこれで」

「そつは行きませんの」

そのまま客とまぎれて外に出ようとした彼女の肩をガツシリと両



腕で固定する。肩を貸したままの状態だったので、白井の行動は避け切れなかったようだ。

「えと……できれば、離してほしいかなあー、なんて」

「確かにあなたに助けてもらったことには感謝していますわ。でも事実と結果は別ですの。あなたは参考人としてきてもらいます」

そう言つと、もう離さないといった様子で白井は掴んでいた両腕をさらにがっしり固定させた。これで彼女が空間移動テレポーターでも無い限り逃げることはできない。

「あはは……ふむう、困ったな……」

彼女は肩口くらいまで伸ばした黒髪を小さく揺らしながら、困ったという表情を浮かべてその場に立ち尽くすしかなかった。

結局、警備員が到着するまで助けた女の子に抱きつかれたまま拘束され、引渡しを行う際に逃げ出すまで、かなり時間を食ってしまった。

「まだボクの情報は極力流しちゃいけないって、センサーに言われてたしね……」

逃げ出す際に女の子がすごい怒っていたことはすこしが引けたけれど、力量変換はポケットに入れていた精神安定剤トランキライザーを水なしで飲み込むと、再び地図を広げ、周りをキョロキョロと確認する。

「さっきのが郵便局みたいだったけれど、もう使えないだろうしなあー……」

もう研究所を出てからかれこれ4時間くらい経っている。一方通行が心配してしまっているかもしれない。

「急がないとなんだけど……。ふむう〜？」

逃げる時は全力疾走だったため、もう自分がどこを曲がってどこを進んできたのか、すでに彼女はサッパリだった。ようするに、ただいま絶賛迷子中である。

「あはは……、ふむう、困ったな……」

あれ、なんかデジャブだー、と一人呟いていると、突然背後から声をかけられた。

「よ、どうした？もしかして迷子か？」

その声にすこしビクッとして振り返ると、頭の髪の毛がツンツンした、中学生くらいの男の人が立っていた。どうやら声をかけてきたのはこの人らしい。腰をかがめるようにして目線を力量変換と同じ高さにあわせている。

「あ、もしかして郵便局がどこにあるのか知ってる人？そうだったら嬉しいかも」

「郵便局か…。たしかこの辺りだったら……」

一人ブツブツ呟き始めた彼は、ここから近い郵便局を頭の中で検索しているようだ。どうやら怪しい人物ではなさそうなので、とりあえず待つてみることにする。

すると、なぜか力量変換と彼を見る人の目が、どこか怪しい人を見ているような、そんな目を向けられていることに気づく。

「……ふむう？ねえねえ、何かボクたち怪しそうな目で見られてるみたいんだけど？」

「はあ？なんじゃそりゃ……？」

と、ツンツン頭の彼がキョロキョロと周りを見回していた彼女の背中を見て凍りつく。

「？」

その様子に気づいたのか、力量変換もおずおずと自分の背中を首を回してなんとか覗いてみた。

結果から言うと、布がビリビリに破けていて、背中が丸見えだった。そして、この状況に加えて彼女のキャミソールの着こなし方が災いして、傍から見れば誰かに無理やり破かれたようにも見えなくは無い。

「……………きゃ」

とりあえず可愛く悲鳴を上げてみる。これは一方通行を弄る時と

同じような雰囲気を感じ取ったからだ。

ようするに多感な男の子にとっては非常に気がますぐなる行動と  
いうことで……。

「違いますこれは別に俺がやったわけではなくすでにこのような状態であったわけでした上条さんは一切合切やましいことはしておりませんーッーッー!」

ツンツン頭の彼は不審者を見るような視線を振り払いながら一氣にまくし立てると、彼女の手を掴んでその場から逃走した。

「ああもう！何かわかんねえけど不幸だアーッーッーッーッー!」

## 第5話 はじめてのおつかい？（後書き）

黒子……当麻……こんな感じだったっけ？

自分で書いていながら自信がありません。しっかりせねば（――；

）  
というか、終わらせられませんでした。スイマセン……。

ご意見、ご感想、お待ちしております。

でわまた次回 ノシ

## 第6話 はじめてのおつかい？（前書き）

なんとか原作5巻まで読み終わりました。

アニメの方も見ていたのでそれなりの内容は知っていたのですが、やはりアニメではぶられていたシーンは知らないワケで……。

上条さんのキャラが壊れてそうで心配です…。

## 第6話 はじめてのおつかい？

ツンツン頭の彼が周囲の重い視線に耐えられなくなり、クレイドル力量変換の手をとって走り出してから少し経った。

彼は常日頃から走りなれているのか、陸上部もビックリな華麗なフォームにて学園都市内を疾走中であつた。もちろん力量変換はそもそも走ること自体があまり無かつたので、そんな彼にほとんど引っ張られる形でなんとか着いて行っている。

しかしそれは、見方によっては『ツンツン頭の男子学生が無理やり小学生の女の子を連れまわしている』というようにも見えるわけ……。

「ああもうなんなんだよ！？俺は困ってる人に親切に接してただけだというのにー！」

「あ……あのつ、なんか……ゴメン」

ほんと不幸だーっと、頭をワシワシ掻きながら自分の手を引きながら目の前を走るツンツン頭の彼に、思わず力量変換は同情してしまった。

しかし、ことの発端は彼女の服装と行動にあるので、どこかお門違いではあるが。

そんなことには全く気づく素振りも無い力量変換は、すでにどのくらい走っているか分からない距離を手を引かれるがまま、ある自分の変化に気がついた。

寒い。

確かに今の学園都市は『冬』という季節が訪れており、走りながら視界の隅を通り過ぎていく人々の格好はどれも厚着を着ていることから、今日も順調に冷え込んでいることは分かる。

しかし今はそんなありふれた“一般常識”あたりまえが問題なのではなく、自分にその“一般常識”あたりまえが起きていることが問題なのだ。

彼女、力量変換の能力はあらゆるエネルギーの【吸収】と【変換】である。

よって、この『冬』特有である寒さも、彼女に触れた瞬間に“外気温度”という形で空気中の分子運動のエネルギーとして【吸収】され、自分の身体が発する体温以外は感じないはずなのである。

その常日頃から無意識で最低限の能力の使用、その演算式などは彼女の友達クラスメイトセラレタ一方通行が教えてくれたのだが、今ではその演算式が一つとして機能を停止している。

先まで全て【吸収】していた外気温、紫外線、歩く足にかかる負荷などが、全く【吸収】できてない。

“あのツンツン頭の彼の右手に自分の手を握られた瞬間から”

一步また一步と歩を進めるにつれて、彼女に今まで感じさせたこととの無い“一般常識”あたりまえが体力を夏の力キ氷のように削りだされ、あつという間に解けていく。



そんな非効率的な運動に、彼女の身体はついに悲鳴をあげた。

『ぐう』…』

「「え？」」

その彼女の主に腹部あたりから発せられる大きな悲鳴に、一心不乱に冷たい視線から逃げていたツンツン頭の彼も、その急ぐ足を止めて思わず立ち止まってしまった。

力量変換もその音を聞いて少しの間だけ思考が止まってしまっていたが、ハツとなんとか意識を取り戻し、おもわず苦笑いを浮かべる。

その表情にも、普段なれない環境に長時間おかれていたせい、疲労の色がチラチラと見え隠れしているのに、ツンツン頭の彼は今まで走りまわって温まっていた頭を冬の冷たい風に冷やされて、ようやく気がついた。

「……………よかつたら奢ろうか？」

「……………ごめんね」

その、自分の“素敵不幸体験”あたりまえに巻き込んでしまっただけで本当に済まない、と言いたげな表情の彼を見上げながら、力量変換は素直に彼の言葉に甘えさせてもらうことにした。

学園都市の空は紅く焼けて、ビル群は徐々に徐々に帯びている赤を濃くしていった。

「へえ、それじゃあ来年に晴れて中学生として学園都市<sup>じゅく</sup>に来るために、一人で見回ってたってことなのか？」

「そ。それでその途中にお金を下ろそうとして郵便局を探してたら、キミに会って現在の状況に至るってわけだよー」

「……………なんか、悪いな。振り回しちまって。親御さんとか、心配してるだろ？」

その後、ツンツン頭の彼と一緒に近くのファミレスに寄り彼女の鳴り続ける腹の虫を黙らせた後、なぜだか帰宅途中の学生に混ざって力量変換は盛大に駄弁っていた。

ツンツン頭の彼は彼女との会話は新鮮味を感じているのか、まんざらでもないといった様子で、さらに満腹から来る一種の安心感も相まって、力量変換はどこにでもいるおしゃべりな女の子へと変貌を遂げていた。

ここから近い郵便局の位置と、閉店時間まではまだ時間はあるとのツンツン頭の彼の情報を聞くと、力量変換は『ここまで来たのなら完全下校時間とやらまで付き合ってもらおう』という、夏休みの宿題を投げ出した小学生の言い訳のような考え方の下、すでにフ

アミレスに入ってから1時間が経過しようとしていた。

「大丈夫だよ。子供を一人で学園都市に向かわせるような人なんだから」

ツンツン頭の彼が外で見せたような申し訳なさそうな表情を再び見せると、力量変換は全く気にしていないといった様子で受け流し、ジュースを一口飲んだ。

実際は、彼女は自分の両親などというものを見たことはない。

気づいたら学園都市こくえんに居て、時間割りかりきゅうらむを受け、能力に目覚めて研究所に引き抜かれた。

一方通行の過去は本人に聞いても教えてくれないので知らないが、あまり愉快なものではなさそうは雰囲気ふんいきで分かった。

力量変換は両親の顔はおろか、自分の本名も覚えていないので、最早怖いとか寂しいなどということを書くことさえなくらいに完璧に思い出せない。

研究員けんせいに頭を弄もよほくられでもしたのだろうが、今の環境をイヤだと思ったことは無いし、一方通行と一緒に居て楽しいので、力量変換はひとかけらも気にしていなかった。

「……そういえば、キミの名前って知らないかも」

もう出会ってから大分経つのに、お互いに名前を聞いていないことに今更気づいた。

ツンツン頭の彼はそんな彼女の発言を予想していなかったらしく、すこし面食らったような顔になったが、すぐに元に戻って自己紹介を始めた。

「…そういえば、そうだな。よし、俺の名前は上条当麻。見ての通り学生だ」

今更ながらよろしく、と握手を求めているのかスツと目の前に右手を差し出してきた。

その行動に今度は力量変換が理解するのに時間がかかったらしく、ようやく次は自分の自己紹介の番だと気づくと、その差し出された右手に自分の右手を伸ばしながら彼女も同じように自己紹介する。

「えと、ボクはクレイドルって言うんだよ。見た通り来年中学生だよ。よろしくね」

そんな彼女の自己紹介 特に名前について を聞いて上条は少し首をひねったが、まあいいか、と何か割り切った様子で彼女の小さい手を握り、握手を交わす。

すると握手をした瞬間、彼女の表情が少し雲ったような気がしたが、確認する前に手を離されてしまったため、窺い知ることとは出来なかった。

「……とーまの手って、なんだか不思議だね」

「え、そうか？どこにでもいる、別になんともないただの学生の手なんだが……」

今の言葉に、なぜか頭の上にハテナマークを浮かべて首をかしげる彼女を見て、上条は疑問を持った。

話を聞く限り彼女は今日始めて学園都市に来たらしく、カリキュラム時間割りを受けたはずが無い彼女が自分の右手に気づくのはおかしい。そう感じとったからだ。

（大体名前からして思いつきり偽名だし……。でも、まあ）

深く考えるのは失礼だろうと、そこで上条は目の前でうんうん唸る彼女を疑うのをやめた。

人には人の事情があつて、そこに会ってから数時間しか経っていない他人があーだこーだ言うのは何か違うと思つたからだ。

「どうせ来年には学園都市に来るんだし。問題ないか」

「ふむう？今のとーまが言つた意味がイマイチ分からないのだけど？」

「気にするな。上条さんの独り言ですよ。ほら、そろそろ時間だぞ」

ファミレスの壁にかけてあつた時計を上条が指差すと、彼女は何か腑に落ちないといった様子でありながらもコクリと頷いた。

上条はそれを確認すると、座っていた場所が分かるほど長時間座りっぱなしだった椅子から立ち上がり、伝票を持って力量変換と共にレジへ向かつて会計を済ませた後、ファミレスを後にした。

「やっぱり俺もついていこうか？」

ばいばいと別れを告げた後、教えられた通りに郵便局へ歩き出すその小さな背中に、思わず上条は呼び止めた。

理由は分からないが、とりあえず呼び止めた方がいような気がしたから、そうしないと何故か後悔するよな気がして。

そして、その呼び止めた結果はすぐにやってきた。

突然、上条の呼び止める声に振り返った彼女のすぐ横に黒塗りのワゴン車が止まり、中から黒いスーツを着込んだ、いかにもな男が3人ほど降りてきた。

その黒スーツの一人が力量変換となにやら話はじめ、もう一人は携帯でどこかと連絡を取り始めた。

そしてもう一人がその様子に面食らっている上条に歩み寄った。

「君が彼女と一緒に行動していた学生か？」

その声もやはりいかにもというか、野太い腹に響くような声で、上条に問いかけた。

「なんだアンタ達。クレイドルに何の用が」

「怪我はないか学生？」

その予想を斜め上に行く黒スーツの発言は上条の思考を完全に止めてしまった。

（怪我をしてないか、だと……………）

目の前で返事を待つ黒スーツのサングラスで見えない目を睨みながら、上条は自分の中でなにか感情がふつふつと湧き上がってくるのを感じた。

はじめて会った相手に『怪我は無いか』と聞かれるのはもちろんはじめてである。が、今はそんなことを気にしているわけではない。

なぜ、ただの小学生女子を相手にしていただけで心配されるのだろう。

「……見た限りでは、目だった外傷はないようだな。予定時間を過ぎても彼女が戻らなかったため、精神状態になにか影響があったのかと思ったが、取り越し苦労だったようだ」

失礼する、と背中を向け目の前から立ち去ろうとする黒スーツの男に、上条はクレイドルを呼び止める時とは違う、怒りを感じさせるような声で黒スーツを呼び止めた。

「待てよ teme……。何が何なのかサッパリ分からねえが、アイツと何の関係がある……！」

その上条の声から怒気を感じ取ったのか、力量変換がワゴン車に乗り込むのを確認すると、立ち止まって上条の方へ向き直った。

「聞いてどうする、学生」

「ついさっき名前聞いたばかりだが、アイツは俺の友達だ。それが意味わかんねえ奴らに連れて行かれそうなのにハイそうですか、で納得できるかよ……！」

上条は、自分がここで何をしたところで何も変わらないことは何となく分かっていたが、彼の心がそれを許さなかった。

目の前にいる黒スーツに怒気に向けたまま、上条はそのサンングラスに隠れて見えない相手の目を睨みながら動かない。

しかしそんな上条の様子に何も動じることはなく、黒スーツの男はただその様子を一瞥すると、ワゴン車へと歩き出した。

「……そうだな。来年あたりに彼女に直接、聞いて見るといい」

まあ会えたらの話だがな、と黒スーツの男は吐き捨てると、ワゴン車に乗り込み、クレイドルと共に走り去ってしまった。

「……なんなんだよ……」

上条はついさっきまで笑顔で雑談に興じていた時の彼女の顔を思い出しながら、一人、白い吐息と共に呟いた。

今度会った時は必ずこのことを聞こうと上条は忘れないように頭の中に刻み付けると、思いを振り切るようにしてその場から踵をかえし、帰路についた。

季節は冬。

そんな出来事をかき消すように、学園都市に予言通りの時刻に白い雪が降り始めた。



後日、おつかいに失敗した力量変換は一方通行を連れ立って再び郵便局へ向かったのだが、その時の一方通行の様子は上条並み、もしくはそれ以上に怪しかったという。

## 第6話 はじめてのおつかい？（後書き）

どうだったでしょうか。

ようやく上条さんと力量変換が自己紹介してくれたので、作者的には嬉しい限りです。

そしてなぜか『偽名』という点でデジャヴが…。あれ、なんだろう？

ご意見、ご感想、お待ちしておりますm( )m

でわまた次回 ノシ

## 第7話 巣立ちの一方通行（前書き）

見事なまでに更新が安定しておりません……。

そして気づけばお気に入り件数が50件超！（9月15日現在）

本当にありがとうございます！

## 第7話 巢立ちの一方通行

突然だが、クレイドル力量変換はアクセラレータ一方通行の能力と類似する部分がある。

一方通行は運動量・熱量・光・電気量などといった、あらゆるベクトルを触れただけで変換するという能力を持つ。

普段は【反射】に設定されており、ありとあらゆる攻撃を自動的に跳ね返す、ほとんど無敵状態である。

そして力量変換は運動量・熱量・光・電気量などといった、あらゆるエネルギーを触れることで【吸収】【変換】するという能力を持つ。

エネルギーの【吸収】については完全にその運動量を【吸収】できるために、紫外線、外気温なども【吸収】し、肌に触れる事は無い。

そして【吸収】されたエネルギーは全て【変換】され、ブラックエネルギー正体不明として蓄積される。この蓄積されたエネルギーは自然消滅すること無く、身体的な上限もあるために適度に発散させなければなら無い。

ちなみにこの【変換】によって生まれたブラックエネルギー正体不明は、触れた対象を例外なく量子分解する。しかし、これは超高エネルギーによって物質が量子並みに“あらゆる方向から対象を貫く”といった現象であるため、一方通行の【反射】でもって対応は可能である。

力量変換が能力を発動する際に現れる『光を反射しない漆黒の翼』は、ある程度に蓄積された超高エネルギーを効率よく使用できるためで、体外に発現できれば翼の形である必要はない。

よつするに、翼という形状は力量変換の趣味である。

そして『触れるだけでバラバラにされる危険極まりない翼』を学園都市内の郵便局内で展開、民間人を脅迫した件について、彼女は学園都市上層部とその研究者たちに責任を負わされることになった。

といつても体罰や常盤台中学への入学権剥奪などではなく、前々から計画されていた、力量変換に能力制限プロテクタを着用させることで解決された。

この能力制限プロテクタは手足や首、頭などに装着させることで力量変換の能力スペックを一時的に下げる効果を持つ。

しかしLevel5であり一方通行とも対を成す彼女の能力スペックを完全に抑えることは出来ず、【変換】によるエネルギー変換効率が70%ほどカットされただけで、【吸収】はそのままである。

どうやら彼女の【吸収】は能力制限プロテクタが制限をかけたときに起こる矛盾結果による暴走の恐れがあるため、制限をつけることが出来なかった。

かくして彼女、力量変換は今朝に担当研究員により両手足・首・頭に能力制限を着けられ、様子見として学園都市への外出を禁じられていた。

「ふむう。暇だ暇だよ暇すぎるよ一方通行」

「ンだよさっきからうるせエな！」

今日は試験的に力量変換に装着された能力制限の観察およびデータ収集が実験の対象となつているため、今朝の時点で力量変換への実験は終了していた。

そして一方通行はその彼女の監視役。もしもの事態が起こったときのための対応役として彼女と研究所内の行動を共にしていた。

一見拘束具のようにも見える能力制限を鬱陶しそうに見つめながら、力量変換は深くため息をつく。

そして自ら力量変換のお守り役をかって出た一方通行は、さつきから横で暇だと騒ぐ彼女の高い声が響いて痛む頭を抱えながら、同じく軽いため息をついた。

（つたく、明日には俺は研究所こしを出て行くつてのによオ）

一方通行は誰に呟くわけでもなく、一人、頭の中で盛大にため息をつきながら愚痴った。

彼は『想定外事件』イレギュラー以後、研究に対してこれまでにない献身的な態度で臨んだため、ほとんどの実験を終えていた。

そして、次の実験は恐らく彼にとっても学園都市にとっても一番重要で残忍な実験。

『絶対能力進化（レベル6シフト）』計画である。

樹形図の設計者の算出したプランに従い、現在最強の超能力

者である一方通行を絶対能力者（レベル6）へ進化させる、学園都市の最大の目的を実現するための実験である。

もつとも、実験内容は、“20000通りの戦闘環境で量産能力者<sup>イレース</sup>を20000回殺害する”という、とても正気の沙汰とは思えない内容ではあるが。

実験は屋外で行われるものもあり、それに伴って一方通行はこの研究所からは別の一般生徒と同じようなマンションに移り住む予定だった。

（コイツのためと思うと癪に触るがよお……）

チラッと、横でブツブツと能力制限への不満を呟いている彼女を見て、一方通行はあの時のことを思い返す。

『いいねこれ。すごくいいよ』

学園都市に直下型地震クラスの揺れを起こし、前に居た研究所を潰して空に浮いていた彼女。

背中には光を反射しない漆黒の翼を6枚生やし、その翼から量子分解を起こす死の羽を大量に撒き散らしながらそう言って面白げに笑っていた彼女を見たくないがために、ここまで来た。

今彼女は自分に着けられた能力制限を見ながらブツブツ呟いて俯いているが、その顔は学校入学権剥奪にならなかったことにより安堵しているのを、一方通行は知っている。

（たかが強盗を追い払うだけになにやってんだか）

そう思った一方通行は笑おうとして、やめた。

昔から力量変換がそういう性格であるのは知っているし、自分も何度かその行動に良くも悪くも救われた一人だ。

この絶対能力進化計画も、今回の能力制限の件が無ければ自分ではなく力量変換に役が回っていたはずだったらしい。

そこまで精神が強くない力量変換は、恐らく実験の途中で自我を失うだろう。

そうなってしまうえば、今まで自分に見せてくれていたあの太陽のように眩しい、無邪気な笑顔は完全に消えうせ、“あの時”のような狂ったアイツになってしまいかねない。

だからこの実験のことも、自分が実験に参加することも伝えてはいない。

（狂うのも、背負うのも俺だけで十分なんだよ……）

自分の横で、自分より狭い歩幅でもしっかり着いてきている彼女をもう一度みて、思わず一方通行は頬が緩んだ。

さつきから沈黙してしまった一方通行の顔を覗き込むように、力量変換はその頬を緩ませる一方通行の様子に気づいた。

「ふむう、何か一方通行が笑ってる。もしか、ボクのこの格好を見てなにか考えてた？」

ニタアといつもの一方通行を弄る時の目つきになったことを確認すると、一方通行はすぐに緩んだ頬を元に戻し、力量変換が覗き込んできた際に止まっていた歩を再び歩き出した。

「ンなわけねエだるバーカ」

「ぬ、それはウソかな。ボクみたいな起伏に乏しい身体は一方通行



は大好きなはずなんだけどな！」

「ハア！？何言いやがるテメエ！」

怒鳴った一方通行を見て、キヤーと叫んで一目散に逃げていく力量変換。

その走る彼女の両足首には、鈍く金属色に光る能力制限が走る足が床に着くたびにガチャガチャと音を鳴らしている。

「……能力制限、ねエ」

力量変換の能力を削ってしまった結果になってしまったが、確かに彼女に降りかかるはずだった絶対能力進化計画は、ちゃんと払い除けることが出来た。

「俺が化け物になるまで、せいぜいのんびり学校を楽しんでな」

担当の研究者には、もう暴走する心配はないだろう旨の言い訳を適当にでっち上げて、明日の引越しへの準備をしようと一方通行は自分の部屋へと続く通路を歩き出す。

しかしなぜかふと足を止めて、力量変換が走って逃げていった方向の通路を振り返る。

もう力量変換の姿はなく、天井につけられた蛍光灯がどこか冷淡さを感じる明るさで灯っているだけだ。

「ハッ。柄じゃねエ。別にもう会えねエワケじゃねエンだからよ……」

誰もいない廊下にそう吐き捨てて、なにか振り切るように向き直ると一方通行は再び歩き出した。

翌日、なぜか一方通行は力量変換の部屋の机の上にごっそりシャープペンを置いてから、研究所を後にした。

## 第7話 巢立ちの一方通行（後書き）

一方通行のキャラがどんどん分からなく……（汗

というかやつとこさ絶対能力進化計画が話題に出せました。

上条vs一方通行は変えちゃいかん、という作者の独断で力量変換にはなんか知らん物を着けさせてもらいました。

スマン、力量変換（；・・、）

ご意見、ご感想、他にもなんでもお待ちしております。

でわまた次回 ノシ

## 第8話 巣立った鳥が残した巣（前書き）

お気に入り件数がすごいことに…… ^^ ；

このまま100件にいきそうな勢いに戦々恐々としつつ……

それでわそうぞ

## 第8話 巣立った鳥が残した巣

アクセラレータ

一方通行が研究所かを出て行ってから大分経ち、学園都市を取り巻く季節は冬から春へと移ろうとしていた。

肌を刺すような冷気は徐々になりを潜め、街を往来する人々もマフラーや手袋といった防寒具を身に着けているのは疎<sup>まば</sup>らで、春らしい格好をよく目にするようになった。

だが春といっても完全に冷気が去ったわけではなく、朝はやはりというか肌寒い。コートやジャケットを羽織っている人はまだ多かった。

しかしそんな冬と春の変わり目など知らぬとばかりに、黒髪紅眼<sup>クレイドル</sup>の少女、力量変換は合いも変わらず極薄着であった。

クラスには必ず一人くらいは居るといって、『冬でも半そでのやつなど当たり前だと言わんばかりにその少女の服装は薄く、その光景を傍から見ていた人はこぞって考えられないというように顔をしかめる。』

さらに彼女の異質性に拍車をかけるように、彼女の両手首・両足首・首・頭などには拘束具よろしく、見た目ゴツイ能力制限が麗<sup>うら</sup>らかな陽射しを反射して、その金属色特有の重く暗い輝きを放っていた。

そんないろんな意味で外れた格好をした力量変換は、どこか当てがあるわけでもなくまばらな人波に身を任せて散歩を満喫していた。

プロテクタ

ようやく能力制限の調整が終了したのはつい昨日。結果的にこの

拘束具が機能している限りは【変換】の効率が大幅に削られ、【吸収】以外の能力は実質的に封印されてしまった。

これは上層部側の意見によるもので、『一方通行と違いまだ中学生の彼女はまだ精神が幼く、それが原因で起きる想定外を回避するための最低限の処置』であり、次は直下型地震などでは済まない可能性を起こされない為の予防策でもある。

それほどまでに彼女の【変換】されたエネルギーが齎す脅威は異常であつた。

「……ふむう、暇だなあ……」

人波から外れ、歩いていた歩道に何本か生えている街路樹の内の一本の下で、ふと立ち止まった力量変換はため息と共にそう呟いた。

いつも研究所の中にいる時は一方通行と駄弁ったり弄ったりして暇だとは感じなかったが、この前に『重要な実験』とやらで出て行ってしまうて以来、彼女を構う人間は研究所内から居なくなってしまった。

研究員が見ているのは力量変換ではなくパソコンが弾き出す数値やデータ、演算結果などがほとんどであり、良い意味でも悪い意味でも彼らは仕事熱心で、全くと言っていいほどに取り付く島もなかった。

そのかわり能力制限を身につけ、完全下校時間内に研究所に戻るという約束さえ守れば、力量変換をどこまでも自由にさせてくれていた。

だが研究所の内も外も同じで、彼女の灰色の時間を塗りつぶしてくれそうな興味惹かれるものはなかったようだ。何回目かの今回で

確信したらしい。

「全く、一方通行も一方通行だよ。引越してからにも連絡してくれないし。ボクがどれだけ暇か分かっててこんなことを」

いつの間にか一方通行への愚痴にすり替わっていた独り言をブツブツ呟いていると、目の前の視界にどこかで見たような人物が二人、こちらに迫っていた。

「あれは？」

一人は茶髪の自分とさほど身長は変わらないツインテールの女の子、一人は頭に花がついた髪飾りをつけた、自分より2〜3歳年下に見える女の子。

「「「あ」」」

思い出そうとして記憶の海に素潜りして、誰なのか気づいたころにはもうすでに遅く、すぐ目の前でツインテールの彼女は腕を組んでまさに仁王立ちしていた。

そのよこで花飾りの女の子はそんな彼女を見て、きょんとしている。

「取調べから逃げ出してどこに消えたかと思えば、こんな所で油を売っているとは……ジャッジメント風紀委員も舐められたものですわね」

「ア、ハハハ……」

なにかとても威圧的なツインテールの彼女から後ず去るようにして、半歩、また半歩と距離をとる。

誰かと思えばあの時、郵便局の強盗を捕まえる時に一緒にいた足を怪我していた女の子であった。花飾りの子は確か外で必死に助けを呼んでいた子のはずだ。

「や、やあ久しぶり、じゃボクは用事があるか」

「お待ちなさい」

ぐいつと首につけてある能力制限を掴まれ、元居た場所に引き戻される。その様子をボーッと見ていた花飾りの女の子はようやく思い出したのか、「あー！」と大きな声を出して驚いた。

「あなたは郵便局の時の……！」

「やつと思い出しましたか……鈍いですわよ初春」

初春と呼ばれた花飾りの女の子は怪訝そうに睨んでくるツインテールの女の子と力量変換にガバツと頭を下げた。

「すみません白井さん、あの時はすごく混乱してて……」

えと、とここで力量変換を見つめて固まってしまう。おそらく名前を聞きたいのだろう。そう感じ取った力量変換が名前ぐらいは名乗っておこうと口を開きかけた時、白井と呼ばれたツインテールの女の子の方が先に喋りだした。

「湾千五百みづくあいは。あなたのお名前はそうでなくて？」

「へ？」



予想をはるか斜め上を音速でぶっ飛んでいく白井の言葉に、思わず力量変換は寸頓狂<sup>すつとんきやう</sup>な声をあげた。

そういえばこの前に担当の研究者に、『学校に通う際の名前と個人情報』について何か言っていたきがするが、全く今の今まで忘れていた。

どうやら力量変換は研究所外の学園都市内では『湾千五百<sup>みずくまいは</sup>』というらしい。なんと奇妙な名前を付けられたものだとのんきに思ってしまった。

「あなたが逃げだした後、古法先輩に頼んで少し書庫<sup>バンク</sup>を調べさせてもらいましたの。もちろん、能力も筒抜けでしてよ？」

よほど逃げられたのを根に持っているのか、無い胸を張った彼女は得意げな顔で語りだした。

「能力名は力量変換<sup>クレイドル</sup>。Level 15の超能力者。学園都市で八人いる超能力者の中で序列は2位。中々の超人ですわね」

「れ、レベル5!？」

白井の得意げな説明を聞いた初春が突然大声をあげた。その拍子に何人かの通行人が振り向くが、彼女は構わずに力量変換に詰め寄る。

その目は爛々と輝いていて、得物を見つけた猫、と言った感じだ。

「千五百さん、レベル5なんですか!？すごいですビックリしました!レベル5って能力を笠に着た上から目線のいけ好かないヤツだと思ってましたがその点千五百さんは全然違って優しく困ってる人を助けてくれる立派な人なんだなって!」

どこから沸いてくるのか分からないその言葉と熱意に気圧されかけた白井と力量変換は、ハッと我に返って途切れていた会話を再開する。

「しかも進学先は常盤台中学。まさかあなたと一緒に通うことになるなんて」

「え!?!」

白井の言葉に力量変換は「一緒に通うことになる」に驚き、初春は「進学先は常盤台」に驚いた。

「ほわあ、まさかそんな雲の上の人と知り合いになるなんて……」

そして初春はこの短い時間に何度も驚愕の事実を知ったことで脳の処理能力が限界に来たのか、頭の上からプシューッと音が聞こえてきそうな様子で沈黙してしまった。

「……まあ、初春のことは今は置いておきましょう……。これはあなたの情報を見せてもらっていた時に思ったことなのですが……」

なぜかそこで白井は黙ってしまった。何かこれは聞いていい事なのか悪いことなのか悩んでいるといった様子だ。

「…ふむう。なんか一通りばれちゃってるみたいだから、何でも訊いていいよ」

仕方なく力量変換がその真剣なようすの白井の雰囲気居心地の悪さを感じて先を促すと、コクリと頷いた白井がようやく口をひらいた。

「……なぜあそこまでセキュリティが幾重にも張り巡らされているんですの？たかが学生の個人情報だというのに。あれはまるで」

「それ以上は深入りしない方がいいよ。そのほうがいい」

白井が最後まで言い終わる前に力量変換は口を挟んだ。自分でも驚くくらいに殺気を帯びたその声色は、思考停止していた初春までも気を取り戻すくらいに、直接耳に響くような声であった。

「……コホン。要するに、ボクは謎多き乙女ってことでいいよね？」

暗く固まってしまった空気を解凍するように、力量変換はさっきの声色とは打って変わってとても明るい声を出すように努めた。

その声で本当にあたりの空気が解凍できたのかは分からないが、白井は飛びかけていた意識を取り戻し、明るく笑う力量変換を見てつられて笑ってしまった。

「そうですわね。人様の問題に首をむやみに突っ込むのは無粋ですわね」

やっと思考回路が再起した初春は、目の前で笑いあう二人と今まで何が起きていたかが分からず、ただおろおろするしかなかった。

日はまだ高く上ったまま。程よい暖気が学園都市を包む、そんな昼の出来事だった。

## 第8話 巣立った鳥が残した巣（後書き）

やっとこさ黒子、初春が登場^^；

黒子の喋り口調はなかなか難しい……精進せねば。

主人公設定にあるにもかかわらずほとんど空気になりかけていた力量変換の名前『湾 千五百』。

非常に弄りやすい名前ですw みなさんもぜひどうぞw（え

ご感想、ご意見、お待ちしております。

でわまた次回 ノシ

## 第9話 残された巢の行く末（前書き）

なんとも緊張感のない話がこれからも続きそうです……。

まあ、これは力量変換の性格からかもしれませんがw

## 第9話 残された巢の行く末

「それにしても、貴女のファッションセンスには驚かされますわ」

「ふむう？ どーゆーこと？」

その後、やっと再起動した初春をつれて今は三人共に学園都市内をフラフラとしていた。

しかしこれは別に何もすることが無くとても暇だから、という力量変換の呑気な理由とは違い、白井と初春は風紀委員の仕事として巡回しているだけである。

むしろ、その巡回中に力量変換に出会って今に至ると言ったほうが分かりやすいかもしれない。

「湾さん、気づかないんですか？ さっきから通りすぎる人、チラチラ見てますよ？」

何のことがさっぱりという様子の彼女に、初春は白井に代わってそれとなく指摘した。

今彼女、力量変換の格好はある種とても奇抜であった。上は本来、夏の昼間に良く見かけるような薄手のキャミソール。下はこれまた夏の昼間に見かけるような短いジーパンである。

そしてそのジーパンから覗く、日焼けなど知らないような白い生足の先の両足首には、今さっきまで鎖に繋がれてましたという感じの鉄輪が威圧感を放っていた。

無論、その鉄輪は両手首・首・頭の髪留めにも施されている。

「貴女はどこその殿方にも監禁でもされていたんですの？」

そんなファッションで街を出歩く彼女をみて、呆れたという風に白井は頭をかぶりを振る。

「監禁かあ……。うん、いい的ついてるね？」

「「……………はえ？」」

だからだろうか。そんな横を歩く奇抜な格好の彼女の言葉で、風紀委員二人は簡単に思考停止した。

全身にはついさっきまで鎖でガツリ繋いでましたと言わんばかりに主張する鉄輪。窓のない部屋に住んでましたと言わんばかりの白い肌。そして、見た目年齢とは対応していない言葉使い。

「は、ははは……。お、お冗談を。貴女がそんな格好で言ったら、洒落になりませんの」

「そ、そうですよ！ 湾さん、冗談キツイですよ！」

そう言つて無理に笑う新人の風紀委員二人。

しかし彼女の発言を冗談だと言つて片付けるには物的証拠が余りに多すぎる。普通に考えたら真つ先に保護する対象かもしれない。

「だってせんせー（研究員）、バレるといけないから（実験的な意味で）外には決して出るなつて言つたから、仕方なく家（研究施設）の地下にずっといたんだもん」

「「……………」」

ま、今は自由だけだね。という彼女の最後の言葉は、この風紀委員二人には届いていなかった。

まさかの、目の前にいる気の抜けた奇抜ファッション少女は、監禁少女であつた。

その事実だけが二人の思考を支配し、同時に同じ判断を下した。

「湾さん、現時点であなたを保護します（しますの）！」

「……え？」

力量変換はそのままズルズルとなにやら慌しく連絡を取る二人に引きずられて、そのままどこかへと連れていかれた。

（まあ、いいのかな？）

そんなお気楽思考が後々、本人も予想していなかった事態に発展するとは思っても知らず。

「で、この子が連絡で聞いた監禁少女？」

「はい（ですの）！」



あの後そのままズルズルと引きずられるままに連れて行かれた力量変換<sup>レイドル</sup>は、二人が入っていったビルの中のやたら書類が積み上げられている事務所的な空間に連れてこられた。

そしてなぜか眼鏡をかけた落ち着いた雰囲気的女性を対面にして、事務椅子に座らされている。

「え、えと…。これは、一体どういう状況で」

「初めまして。混乱するのも無理ないわよね。ずっと閉じ込められていたんでしょう？」

そろそろ樂觀視するのはマズイ状況かもしれない、と力量変換が口を開きかけた時、タイミング悪く白井が先に話はじめた。

「そうです。全く、本人があんな調子なので気づくのが遅れましたわ」

「いや、ボクは」

なんとかすごい誤解をしているらしい目の前の三人に弁解しようと言葉を続けようとすると、今度は初春が口を挟んだ。

「なんで早く言ってくれなかったんですか！？ 湾<sup>みずくま</sup>さんは私の恩人なんですから、遠慮なんてしなくてよかったのに！」

「えと、話を」

話がどんどんこんがらがってきている。もう樂觀視などしている余裕などはない。早く何とかしないと何か大変なことになりそうだと、力量変換<sup>クレイドル</sup>の本能が告げていた。

しかしなぜか当事者である力量変換の言葉は一切聞かず、口を挟んだ二人の意見を聞きながら、目の前の優しい眼鏡女性はうんうん頷いていた。

「とりあえずあなた達の言っていたことは分かったわ。確かに、この子はそんな雰囲気するわね」

（雰囲気って……）

もう力量変換は目の前で起きていることに苦笑いするしかなかった。クレイドルハハハ……と乾いた声が事務室に弱々しく響く。

「それじゃ、私は本部にこのことを連絡してくるわ。監禁少女の保護なんて初めてだしね」はこいりむすめ

言い終わると同時に、目の前に座っていた眼鏡女性は携帯を片手に立ち上がり、事務室の隅に引っ込んで行ってしまった。

これから本部とやりに連絡するのだろう。ここからでは姿は見えないが、話声はかすかに聞こえてくる。

「さて、これで大丈夫ですわね。全く、貴女って人は……」

「そうですよ！ 同い歳なのに水臭いです！」

そんな仮にも監禁されていた少女にかける言葉とはかけ離れた言葉を浴びせられながら、力量変換は自分が招いてしまったこの状況を打破する方法を考えていた。クレイドル

しかし結局はこの状況下で自分が何を言っても通じないだろうと

察した。まず自分は監禁されてはいなかったと言っても、誰も信じてはくれないだろう。

「おまたせ。本部への連絡とその対応を仰いできたわ」

そう言っで眼鏡の女性は事務所の隅っこから帰ってきたと同時に、携帯を懐にしまいながら待っていた三人に告げた。

「あなた……えーと、みずくま湾さんだっけ？ 湾さんは今日から、一時的にここで預かることになりました！」

「……………は？」

たつぷり三秒。そのくらい、クレイドル力量変換は目の前にいる眼鏡の女性から発せられた言葉を理解するのに費やした。おそらく、傍から見たら目が点になっているだろう。

「あ、でも安心して。あなたが常盤台に入学するまでの話だから、あくまで一時的。ここなら安心でしょ？」

「はあ……………？」

いまだ目の前で眼鏡の女性が何か嬉々として説明しているが、ほとんど力量変換の耳には入ってきていなかった。クレイドルほとんど放心状態で、自分の置かれている状況を搜索するのでやっとだからだ。

彼女は立場上、あまり表では目だった行動はとれない。プロテクタ外出だつて能力制限を着けているからであつて、入学なんて一方通行の助力アクセラレータによる、特例中の特例である。

（まあ、研究員せんせいが良いって言ったみたいだし、いいのかな？）

おそらく彼女が連絡した本部とは風紀委員ジャッジメントの本部であろう。それならば、力量変換クレイドルの話題が出た瞬間に、学園都市の上層部にも話は通っているはずだ。と力量変換クレイドルはそう解釈した。

まず、そうでないと自分が納得することができない。

「とりあえずもう外は暗いから、今日付けでここで保護するわね？  
ほら二人共、新しい住人のためのスペースを作るために片付ける  
わよ！」

「え？ は、はあ…。了解ですの」

「分かりました！」

嬉々とする二人は、未だ状況が飲み込めていない一人を連れ立って、季節外れの大掃除を始めた。

どうやら今のこの状況は、自分の居場所はここには無いと判断し、力量変換クレイドルはとりあえず外で待っていることにした。

「……一方通行、今どこにいるんだよう……」  
アクセラレータ

全てのことの発端である、出て行ってしまった彼を呪うように力量変換クレイドルは空を見上げた。

真っ赤に焼けた太陽が、少しきつくなつた夕陽を輝かせながらビルの向こうに沈んでいく。それと同時に周りのビルの窓は眩しく輝きを放ち、都会ならではの美しさをさらけ出す。

そんな夕陽に肌がやられないようにしっかり紫外線などは【吸収】しながら、力量変換は目に入ってくる強い西日に目を細める。

「……これからは、ちゃんと物事を考えて行動しよう」

そんな、一人の世間知らずな少女がまた一つ成長した、肌寒くも暖かい、初春しよしゅんの夕方での出来事であった。

## 第9話 残された巢の行く末（後書き）

最近、力量変換と打ち止めって、キャラ位置被ってるよなあ……と思う、今日この頃。

お陰様で、お気に入り件数がすごく伸びてます。アニメ第二期が始まったらまた伸びるのかなあ……（にや

ゲフン。力量変換も無事に保護され（？）、物語も原作に近づきつつあります。

駄文ですが、これからもよろしく願いします。

ご意見、ご感想、お待ちしております。

でわまた次回 ノシ

## 第10話 路地裏事件？（前書き）

お気に入り登録が70件を超えました。

はわわ、みなさまありがとうございます！これからもよろしく願います！

ちなみに、主人公設定にて力量変換こと、クレイドル湾千五百みずくまちいほのイラストを載せていただきました。

よければご覧下さいm(\_\_\_\_\_)m

## 第10話 路地裏事件？

「千五百さん<sup>ちいほ</sup>、何か飲みます？」

「ありがとう、かざりー。じゃあコーヒー砂糖大盛りで！」

了解です、と頭に『今の季節は自分達の時代だ』と言わんばかりの花飾りを付けた少女、初春飾利は注文を聞くと、トコトコと部屋に備え付けてあるコーヒーメーカーに向かっていった。

そしてその注文をした本人、湾千五百<sup>みずくまちいほ</sup>こと力量変換は、先週に季節外れの大掃除によって大量の書類と引き換えに確保されたスペースでパソコンに向かっていた。

理由としてこの部屋の実質管理人、固法美偉<sup>このりみい</sup>に「身の上的に、外の世界にはあまり詳しく無さそうだからこの際に」と言っただけで本人から渡されたからだ。

といってもパソコンは大掃除によって発掘されたお下がりであり、初春達が使っているものと比べると若干浮いて見える。

「おまたせしました」。砂糖大盛りの加減が分からなかったので、出来るだけ多く入れてみましたけど……」

「ん……。ぷは、うん。全然おっけーだよ！ かざり、ありがとう」

「ふふ、どういたしまして」

千五百が激甘コーヒーを一口飲み、淹れてきた初春にいつもの太陽のような笑顔を向けると、初春も自然と笑みがこぼれた。気のせ



いか頭にある花達も嬉しそうに見える。

このとてつもなく平和でゆっくりとした時間が流れているこの部屋は、初春達が所属する風紀委員ジャッジメントが詰めている支部の一つ、第一七七支部である。

本来ならばこの場所は風紀委員以外は立ち入りを禁止されており、入室する際には指紋・静脈・指先の微振動パターンをチェックされ、認証が降りないとロックが外れない厳重なセキュリティが敷かれている。

だが千五百は例外で、先週に少女監禁から保護した少女を一時預かっているという形で出入り自由とされている。もともと、誤解といえど保護されている身なのでそんなに自由に行動は出来ないが。

なので、基本的に千五百が外出する時の用事は、研究所に能力制限クダの調整を受ける時や、精神安定剤トランキライザーを貰いに行く時程度である。

千五百は淹れたてで熱を帯びたマグカップの熱を冷まさない程度に【吸収】しながら、チビチビと飲んでいく。

今の第一七七支部には、パソコンに向かって調べ物をしている初春と、初春から貰った激甘コーヒすすーを啜る千五百しかない。いつもは一緒に駄弁っている白井や固法は昼間の巡回パトロールに出かけてしまっている。

「……暇だなあ」

結局はそういうことだった。

はじめて触れたパソコンも初春に基本的な操作を教わると、その後はするするとスポンジが水を吸うかのように技術を吸収し、あっという間に白井のPC技術を抜き去り、「信じられませんの……」と呟かれてしまったほどだ。

彼女、湾千五百は超能力者（レベル5）。しかも学園都市に8人しかいないLevel5の序列で2位の座を勝ち取っている。

これは元々演算能力が高いLevel5の次席であり、学園都市で二番目に頭が良いということを表している。見た目は幼くても、頭脳は並みの大人など目ではないのだ。

そんなどこかの名探偵のような頭脳を駆使すれば、一週間もあればパソコンの使い方など熟知してしまう。そこから入る情報も然り。大体の予想はついてしまうのが、この天才少女の実力であり、今の悩みのタネであった。

「久しぶりに外、行ってみようかなあ……」

誰に言うでもなく呟いた後、チラッと初春の反応を窺<sup>うかが</sup>う。初春はなにか思い悩んでいるらしく、うーんと唸っているだけでこちらのことには気にかけてもいないようだ。

「あ、そうだ。ネットで新しく見つけたケーキ屋さん、アレ食べに行こうかな」

「……」

ピクッとこちらに反応したような気もしたが、「ガマンシナキヤ、キョウジュウニオワラセナイト」と、すぐにカタカタとキーボードを叩く音が聞こえてくる。どうやら今回は甘いもので釣れるような調べ物では無さそうだ。

「じ、じゃあ、行ってくるね？」

「あ……！」

残っていたコーヒーをグツと飲み干して、座っていた事務椅子から立ち上がる。それと同時に、先までパソコン画面の文字を追っていた目がどこか悲壮感を漂わせながらこちらを見つめていた。

「私は、生チョコレートケーキでお願いしますっ！」

「ボクはまだどのケーキ屋さんに行くとは言ってなかったんだけどな……」

アハハ…、とその決意に満ちた初春の顔に気圧されながら、思わず乾いた笑みが漏れる。

今日も第一七七支部はいつもの通りだった。

「はあ、今日はついてないです……」

ボタン、と千五百が開け放ったドアがしまる音を振り返らずに確認すると、再びパソコン画面との対話を始める。

今、初春が調べているのはこのごろ各学区で起きているある事件についてだった。

その事件の特徴は、被害者の証言と現場の状況に食い違いがあるということと、被害者のほとんどが

単独、一人きりの時に襲われていることだった。

被害者はその時の状況を「複数のヤツにボコられた」と言っているのに対し、現場検証では被害者と犯人の二人分の足跡しか確認できておらず、その犯人の足跡も毎回違うものになっていて、その靴を売っている店から特定するには種類が多すぎて特定できない。犯人は手袋をつけているのか指紋の類も一切検出されず、難航している最中だった。

「……千五百さんの外出を止めませんでしたけど、大丈夫ですよね……？」

今思うと、何となく危ないような気がしてくる。冬も完全に抜けきり、春になった今は色々と事件が起こりやすい。今回のこの事件もその類の一種である可能性は高いが、突発的に犯行に及んだにしては慎重であり、やはりこれは計画的なものだと伝わってくる。

「ま、まあ千五百さんはアレでもLevel5ですし。すぐ帰ってきますすよね!」

友よりも突発的ではあるがケーキを優先してしまった自分を恥じながら、とりあえず花飾りの眩しい少女はケーキと友達が無事帰ってくることを祈りつつ、作業に戻った。

「ツクシユ。…うう、花粉症かなあ……」

その能力柄ありえない持病の可能性を心配しながら、千五百は思わず止めてしまった足取りを進める。

実はケーキを買ってくるといふのは初春を外に連れ出そうとした際にとつさに思いついた嘘で、実のところはケーキを買う予定などこれっぽちも無かった。

しかし頼まれてしまったては手ぶらで帰るわけにもいかず、千五百はただいま絶賛ケーキ屋搜索中であつた。

「かざりが言つてたケーキって多分あそこのことだよね？ 前に羨ましそうに見てたし……」

もう彼女は自分がどこに居るのか分からなくなるといふことは無い。パソコンで学園都市の立体地図を完全に記憶し、とりあえずの常識も補完してみせた彼女はやはり天才というべき部類であろう。

今は歩きながら自分の現在位置の確認と、そこからケーキ屋に向かう最短ルートを計算中であつた。

「ふふふ、名づけて『ちいほナビ』！ ……………何言つてんだろ、ボクは」

ズーンと影がつきそうなほど自己嫌悪によって肩を落とした様子は、サンタクロースの存在を主張しつづける子供にその実態を知らず内にばらしてしまった親のように重く暗かった。

「やっぱりニートよろしく何もしないで部屋に閉じこもってるのはマズイね。次から風紀委員のお手伝いとかしようかな……？」

そうして今後の生活プランを組み立てていると、ケーキ屋への最短ルートの入り口であるビルとビルの間に着いた。

その裏路地は今まで千五百が歩いてきた歩道と比べると、完全下校時間を過ぎた深夜の学園都市のように静かで空気が沈んでいた。

「……何か見事に『ここを通ったら事件に巻き込まれますよー』って言わんばかりの雰囲気だね……」

この前の出来事で樂觀視は危険であると学習した千五百は、とりあえずキョロキョロと裏路地の様子を見回してみる。

ビルとビルに挟まれてきたその通路は薄暗く、奥に行くにつれて闇が濃くなっているようだった。脇にゴミが捨てられているのか、少し生臭い。

「……ま、やっぱり大丈夫かな」

しかし性格とはそう簡単に変えられるものではなく、結局はいつものなにかなる精神でその裏路地に一歩踏み出した。

そこからは一回も立ち止まらず、スタスタと歩いていく。生臭い臭いは鬱陶<sup>うつとう</sup>しかったため、すでに【吸収】で臭いをエネルギー変換していた。

スタスタと外回りのサラリーマンよろしく早歩きで歩いていると、突然眩しい陽射しが暗闇に慣れた目に突き刺さった。

どうやら裏路地を無事に突破したらしい。ビルとビルの隙間から突然現れた彼女を見た通行人が、少し注目したあと何事も無かったように通過していく。

「まーこう何回も事件に巻き込まれるのはボクの役回りじゃなかったってことだよ。ウン」

と言いつつも内心何事もなかったことにホットしながら、もうすぐそこにある目当てのケーキ屋に向かって歩き出す。

抜け出た裏路地から覗く、千五百に向けられた視線に気がつかないまま。

「ありがとうございますー」

程なくして初春に頼まれていたケーキとその他数種を買った千五百は、テイクアウト用の白い箱を持って店を出た。

午後に出かけたからかすでに日は暮れかけていて、西日によって影が横に伸びている。

「さて、保冷剤が解けないうちに、チャツチャと帰るかなー」

右手で持っている白い箱のケーキの重みに期待を膨らませながら、千五百は来た道をゆっくり歩きながら戻る。

すでに路地裏を歩いているが、さっきのように早歩きで歩いたりはない。いつもの歩幅、いつもの速度で歩いていく。

「あ、臭いを【吸収】するの忘れてた」

鼻につく嫌な臭いの原因である臭素を【吸収】演算の中に含もうとしていた時、背後でガサガサつと音がした。

「？」

突然後ろから聞こえた音に、思わず立ち止まり、振り返る。

ここは誰も通ることは無いはずの裏路地。不良たちがこついうところを闊歩し始めるのにはまだ早い時間帯のはずだ。

「……ネズミかな？」

裏路地だし、と一人納得した千五百はその場から歩き出そうとした。

その時だった。

ドンッ。



「ふえっ、うわああ!？」

突然、再び背後から、今度は衝撃によって千五百は吹っ飛ばされた。その小さい華奢な身体が地面に叩きつけられ、ゴロゴロと転がってビルの壁にぶつかって止まった。

このごろ『実験』や平和な日常によって【吸収】の能力が鈍っていたのか、完全にぶつかった時の衝撃を【吸収】しきることが出来なかった。

「ぐっ、何い……今の？」

【吸収】仕切れなかったダメージによってぐらぐらする身体を無理やり立ち上がらせながら、自分が何かにぶつかった場所を見る。するとそこには、自分よりかは身長の高い、セミロングに伸ばした茶髪の少女が立っていた。少女は立ち上がる千五百を見つめながら、なにかボソボソと呟いている。

「痛つ……。もしか、ボクがダメージを食らったのは初めてかも。結構効くね……」

彼女の能力、力量変換の一つである【吸収】は、どんなエネルギーであっても必ず全て吸収しきる能力を持つ。これを展開している限り、たとえ陽電子砲であろうが核ミサイルであろうが防ぎきることは容易い。たやす

しかしそれは展開している間だけの話であって、そうでなければ

ただのか弱い少女であるが。

現に日ごろの平和に慣れきって【吸収】が薄くなっていた彼女は、見た目同じ年の少女に突き飛ばされただけでこのダメージである。

「でも、もう大丈夫。再演算終了。ボクに何の用か知らないけど、急に後ろから突き飛ばした報いを」

さあどうやって謝らせてやろうかと彼女をしつかりと見据えた時にきづいた。

右手にあったはずの期待膨らむ重みが無い。

「え。……………まさか」

目の前に突っ立っている少女の足元を見る。突き飛ばされた時に一緒に被害をこうむったのか、そこには無残な姿に変わり果てた白い箱とケーキがあった。

「ちょっと、どうし」

「あああああああああ！！」

様子がおかしい千五百に思わず声をかけてしまった少女は、彼女の悲痛な叫び声によってその声をかき消された。その少女のことなどお構いなしと言った様子で千五百は現場へと走り寄る。

「ああそんな。ケーキが……。かざりに頼まれたケーキが……」

「え、えっと、ちょっとちょっと。私のことをほっといて、その汚く潰れたケーキの心配してるわけ？」

そんな彼女の言葉に、千五百はガバッと顔を上げた。その顔は暗闇でよくは見えないが、方がワナワナと震えている。

「ま、いいや。どっちにしろアンタにはここでちょっと伸びてもらうワケだし。覚悟は」

「できてるよね？ 知らないテメエ？」

ゆらりと立ち上がった千五百は、自己嫌悪の時とはまた違う黒いオーラを放っていた。路地裏の薄暗い中でさえも、その黒さは目に見えるほどだ。

「今からじゃもう完全下校時間近くだからお店は閉まっちゃってるだろうし手ぶらで帰ったらかざりになんて言えいいのか分からないしこんな状況にボクを立たせたお前が弁償しろコンチクショー！」

自分でも良く分からないまま突き飛ばした相手に向かって悲痛な叫びを浴びせると、その少女は何かメンドクサイ相手を選んでしまったなとバツが悪そうな顔を浮かべた。

「ああもうメンドクサイ！ さっさと済ますからちょっと黙ってる！」

「何！？ 逆ギレ！？……………って」

明らかに逆ギレた少女がそう言い放つと同時に、少女が立っている

姿が段々とにじみ始め、言い終わると同時にそれは起きた。

ばやけた少女を中心にして左右から二人づつ、それは少女の姿が横に平行にスライドするように分かれた。

細胞分裂を思わせるそれは、目の前にいたはずの少女が五人に増えると同時に止まり、そのどれもが姿かたち、服装も一緒であった。

「分……身……！？」

千五百は驚きを隠せないでいた。メタモルフォーゼ肉体変化という肉体変形能力

者はパソコンで見たことはあったが、分身する能力者など聞いたことも見たことも無かったからだ。

そんな信じられない物を見たという様子の千五百を見て、少女はニヤツと不敵な笑みを見せる。

「……そうそう。ちょっと私の能力を見た奴らは大体そんな反応をするんだよね」「」

ケラケラと少女達は笑うと、顔を引きつらせて固まったままの千五百を前に体勢を低くして身構える。

「……それじゃちょっと、私の練習台になってもらおうかな」「」

言い終わると同時、ダンッと少女達は地面を力強く踏み込み、一気に千五百へと殺到する。

クレイドル力量変換の初となる『実験』外の戦闘が始まろうとしていた。

## 第10話 路地裏事件？（後書き）

常盤台中学への入学前にちょっとした事件勃発です。

はたしてケーキの運命やいかに！？ ……違いますかそうですね  
(・・・)

ご意見、ご感想、お待ちしております！

前書きで書いた挿絵についても感想などをいただけたら嬉しいです。

でわまた次回 ノシ

## 第11話 路地裏事件？（前書き）

おかげさまでお気に入りに件数が90件をこえました！

本当にありがとうございます！

これからも精進していく所存です（・・・）>ビシ

## 第11話 路地裏事件？

「……はあっ！」「」

少女達は千五百ちいほとの距離を一瞬で縮め肉薄すると、間髪いれずに右ストレートを放った。それは人間の腹部、肝臓よりの場所へと突き刺さる。

それは人間の弱点をついた、千五百ちいほのような女の子に放つには必殺イキルにも匹敵する威力を持つ。殴られた瞬間に昏倒して、気絶やらずるはず。そう少女は確信していた。

……………そのはずだった。

「……えっ」「」

自分の勢いと体重移動によって重みを増した少女の拳は、確かに目の前の少女の腹部、肝臓のあたりにヒットした。

しかし、何も手ごたえがないのだ。

人を殴った時に感じる力んで硬くなった筋肉や、唯一骨が無い腹部特有の反発力。それらがすべて全くと言っていいほど感じられない。

これではまるで……。

「ビックリした？」

「「「!」」」

今まで目の前にいた少女を殴った時のポーズのまま固まっていたことに気づき、少女達は後ろに飛び退いた。

少女達は自分達の拳を見る。能力をうけて変化させられた感じはないし、いつもの、路地裏に群がる不良達をボコっていた時と同じ拳だ。

「影分身かぁ。これじゃ、本人がどれか分からないね……」

「「「お前、一体……?」」」

「アハハ。ふむう、困った」と頬をかいている目の前の少女、この現象をおこした本人であろう彼女に疑問を投げかける。  
すると目の前の少女はその言葉を聞いてにやっと笑い、コホンと一つ咳払いしてからペラペラと説明しはじめた。

「そうだね。簡単にいうと、ボクに触れた君の拳から運動量やその他諸々を【吸い取った】んだよ」

「「「【吸い取る】?」」」

「そ。そうだなあ……。スポンジに水をかけた、と思ってくれればいいのかな?」

そう言つと目の前の少女は地面に転がっていたビンを手に取り、少女達の一人に投げつけた。しかしそれは物体にぶつかることはなくその少女を通りすぎて、放物線をえがいたまま地面に落ちる。



「ありや、影かあ……」

残念そうに肩を落とすと、次は地面に落ちていたカンを拾い上げる。

「……っ、ちよつとなめるなよお！」「」

少女達は焦っていた。

彼女の話を経呑みにした気は無いが、もしその話が本当ならば、それは彼女達にとって致命的なことだ。

少女達はあくまで『幻影』であり、当たり前のように物体に触れることはできない。よって本体である一人がその『幻影』に紛れ込み、相手の不意打ちを狙って攻撃する。

それが封じられたのだ。何人もの不良達を倒して培ったこの圧勝スキルアウトパターンつちかが通じない。そんなことがあつてはたまらない。

そんな焦った思考が彼女を前へと押し出したのだ。拳を振り上げて目の前の華奢な少女へと振り下ろす。

今度は顎を打った。しかし、また手ごたえはない。一步も動かずに攻撃を受け止めている少女がカンを振りかぶった。

「……っ！」「」

距離を取るためにもう一度後ろへと飛び退く。その時に彼女が投げたらしいカンが『幻影』の一つを突き抜けていった。

「これも違う……と。おーけー」

「『お前……、なんでちょっと攻撃してこないの!?』」

何かを覚えているような仕草をみせる彼女に、少女達はおもわず叫んだ。あれは挑発だとは分かっている、それを無視することはできなかった。

「え、だって……。できないもん。攻撃」

「『……は?』」

「だってボクの【攻撃】は、君を消し飛ばしちゃうことになるから……」

目の前の少女は、なぜかとても悲しそうに呟いた。だが逆にその言動、仕草が少女達の何かに触れた。

プチッと、頭の中で何かがキレたような音が聞こえた気がした。

「『はああ!? 何その上から物を言うような言葉。自分は弱い者いじめはしませんってか? 舐めるなよクソがあ!』」

瞬間、今まで群体で行動していた『幻影』達が一斉に分散する。完全に自分達をなめきったような言葉にキレた少女達は、それぞれの行動がバラバラだ。今までのきれいに揃った行動とは違い、もう本体がどこにいるかなど把握できない。

「わ、わ。ゴメン、なにか怒らしちゃった?」

「『うるせえつつつてんだよ!』」

バラバラに走りまわっていた少女達はそのまま一斉に千五百ちいほへと

殺到する。それぞれが殺気をまとい、握りしめた拳を振り上げる。

「まあ、作戦通りなんだけど」

「「「なっ!?!」」」

襲いかかってくる少女達の中、千五百ちいほは殴って来た少女の本体に的確にカウンターを決めて見せた。

千五百ちいほの拳は小さいが、的確に人間の腹部の弱点を突いている。

「があっ…あ……」

飛びかかって頭をなぐる恰好のまま、その腹には千五百のストリートが刺さっている。『幻影』の能力を使うことが出来なくなったのか、電球の明かりを消すように分身たちは一瞬で消え去ってしまった。

「はあ、はあ……。あー怖かったあ〜…」

少女が戦闘不能になったことを確認すると、千五百ちいほは緊張の糸が切れたように、地面が汚いことも構いなしにペタンとその場に座り込んだ。

千五百ちいほは元々、この少女のように殴る蹴るなどの戦闘はしない。研究所ではもっぱら遠距離からの【射撃】がほとんどだからだ。スナイパーライフルを持ちながら敵に接近する狙撃者はいないのと同じだ。

よって今の千五百ちいほの行動は、その面から見れば一種の賭けであった。

少女は千五百ちいほの肩に乗ったままだが、肩にかかる体重は【吸収】

しているので重みは一切感じない。

「確かにボクは君のこと挑発したけど、あそこまで怒るなんて」

「…アンタなんかには、分からないわよ」

ビルの壁にもたれかかるように千五百ちいほが地面に少女を降ろすと、未だダメージが残っているような弱々しい声で、しかし憎々しげに呟いく。

その瞳の中には、羨望と憎悪が渦巻いているのが見えた。

「私がなんでこんなことをしているかなんて……。アンタみたいなLevel 15 なんかに！」

「っえ…？」

突然声を荒げた少女に、千五百ちいほは驚きを隠せないでいた。いつの間にか少女のその瞳からは先ほどの思いは感じられず、代わりに涙が浮かんでいる。

「何驚いてんのよ……。まさかちょっと気づいてないとも思ってたワケ？ ふざけんじゃないわよ」

そう言っている間にも、少女の目からは涙が溢れ出ていた。その涙は頬を伝い、きれいとは呼べない裏路地の地面に落ちる。

「力量の【吸収】、地球には存在しないエネルギーでの攻撃。アンタ、湾千五百みすくまちはなんですよ。序列第2位様が、ちょっと私より小さかったなんてね」

「むっ……。君だって相当な能力者だと思うけど…」

「私は違う。ちょっとそこら辺に居るLevel12だよ」

千五百ちいほに負けたことで心が安定しないのか、少女は千五百ちいほに怒鳴った後、今度は自嘲気味に笑っていた。

それでも少女から流れ出る涙は止まらない。涙を吸った地面が深く色を変えている。

「私は……、常盤台中学に入りたかった。勉強もして、能力の練習もして」

そこでふつと千五百ちいほは思いだす。彼女は最初に攻撃を仕掛けてきたときに、『それじゃちょっと、私の練習台になってもらおうかな』と口走っていた。

「じゃあ、これも練習…?」

「そう。いや、正確には“だった”がちょっと正解かな」

少女はビルとビルの間から見える夕焼け空を見上げ、ため息をついた。それは泣いていたからか、若干震えていた。

「さっきも言ったでしょ。私、Level12なんだよ。常盤台は最低でもLevel13以上が入学条件。惜しかったなあ。あと一つの数字で入学できたのに」

少女はその小さく切り取られた夕焼けに手を伸ばす。ビルとビルの間からみえる夕焼け空は、いつも見る夕焼け空と同じのはずなの

に、どこか遠く、届かない場所のようにみえた。

「……でも、君のやったことは間違っているよ」

「分かってる。いつの間にか能力の練習が憂さ晴らしに変わってたことくらい」

少女は夕焼け空に伸ばしていた手を力なく降ろす。それでも涙を溜めて潤んだ目は、夕焼け空を見据えたまま離そうとはしていないかった。

「……もういいよ。これ以上話してもちよつと私はアンタに八当たるだけだし。風紀委員ジャッジメントなり呼べば？」

「それは……嫌、かな」

「え？」と少女が千五百ちいほの言葉に驚いて夕焼け空から目を離すと、いつの間にか目の前に立っていた彼女と目があつた。

千五百ちいほのその紅い瞳は、どこか決心と確信に満ちていた。

「君、常盤台に入るのに前科持ちってちよつとまずいよ？」

「……………え？」

「だ、か、ら！ 入れるよ。常盤台」

千五百ちいほはズイッと、座ったままの少女に向けて手を差し出す。

少女は何が起きているのか先まで悲しみと諦めでいっぱいだった頭ではついていけず、千五百ちいほの顔と手の間をキョロキョロと少女の視線が往復する。

「ボクの私見だけど、途中君の分身がバラバラに行動したよね？ア  
レって今までであったこと？」

少女は千五百ちいほに挑発されてキレた時、今まで自分の周りについて  
くる程度にしか動かなかった分身がバラバラに別行動をした。

本来の少女の能力では自身の分身を作り、自分と同じ行動をとら  
せるので精いっぱいであったはずだ。

最初は1体だけだった分身も練習によって徐々に数を増やし、最  
大4体まで出せるようになった。それでもさっきの『本体とは違っ  
た行動』はできなかった。

「え……うそ……」

「いやはや、ボクもびっくりだよ。本来、分身に自分の行動を取ら  
せつつその本体も走りまわるなんて。それだけで演算キツイだろ  
うに……」

少女は胸が高鳴っていた。しかし、本当に信じていいのだろうか。  
今までで駄目だったものがここでできるようになるとは。少女は信  
じ切れずにいた。

「信じられないのは分かるけど、君の能力は間違いなくLevel  
3以上だよ。うん。そうじゃないとおかしいもん」

目の前に居る少女はうんうんと何度も頷いて見せる。だが頷くた  
びに彼女の黒い髪が小さく揺れて、元気づけようとしているであろ  
う彼女の仕草に、可愛らしさが見え隠れしていた。

「……はあ。まさか小学生に励まされるなんて」

「む、その言葉はいただけないね。ボクも今年で常盤台中学なんだけど？」

思わず少女は、そういつて無い胸を張る彼女を凝視してしまった。どこからどうみても自分とは身長差が離れ過ぎている。少なくとも2・3歳年下だと思っていたからだ。

「……そこはかとなくバカにしてるね？」

「いや、ちよつとそんなことは……」

「そこはかとなくバカにしてるね」

そう言つて千五百ちいほはムスツと頬を膨らませながら、座ったままの少女の手をとり引つ張り上げた。

と言つても身長が足りないので、途中から自分で立ち上がった少女を見上げる事になってしまったが。

「ふむう……」

その事実には不満げな視線を少女に向けていると、少女はこの気まぐずい沈黙をどうにかしようと口を開いた。

「と、とりあえずお礼として……。私は深泉水曜ふかいずみ すてら。まあ、あなたの名前ちよつと知ってるけど、一応聞いておこうかな……」

「ふむう……。ボクは君の言つとおり湾千五百みずくま ちいほだよ」



よろしく、と2人はとりあえず握手をしてみる。しかしその後は千五百ちいほがお互いの身長差を自分の中で比べたのか、黙ってしまった。このままだとまた会話が絶えてしまうのは目に見えているので、水曜すてらは黙ったまま恨めしげに自分を見上げていた千五百ちいほに話かけた。

「とりあえず……、ごめんね。突然襲いかかって」

「ふむう、牛乳は飲んでるんだけど……。ふえ？ ああ、そのことなら心配しなくても……」

とそこまで言ったところで、なぜか突然、ピシッと千五百ちいほの動きが止まってしまった。口を開いたままある一点を見つめている。

「あ……。ケーキのことも、ごめんね」

「うん、大丈夫だよ。そう、ダイジョウブ。……多分」

千五百ちいほが見つめる先には見事にひっくり返って中身をぶちまけている白い箱があった。どこから湧いてきたのか、すでに働き者のアリたちが列を成している。

もう、汚れがどうこうという問題ではなかった。

「事情を説明すればかざりも分かってくれと……思っ」

「微妙なんだね。その間から察する辺り」

「とりあえず常盤台のことはボクにまかせて貰っていい？ 多分大丈夫なハズだから」

「うん。その方が助かる。ありがと千五百<sup>ちいほ</sup>」

水曜<sup>すてら</sup>から名前を呼ばれたのが新鮮だったのか、千五百<sup>ちいほ</sup>はすこしくすぐったそうな表情を浮かべる。

とりあえず今は今後の連絡をとる時の為に、お互いの携帯のメアドと電話番号を交換した後、路地裏にずっといることも無かったので表通りへと出てきていた。

「やっぱりケーキちょっと買いに行こうか？」

「いいよいいよ。あのお店、完全下校時間になると閉まっちゃうみたいだし。もう開いてないよ」

今は完全下校時間から十分ほどたった頃だ。千五百<sup>ちいほ</sup>が入った時は閉店の準備をしていたので、おそらく時間ぴったりに閉めるつもりだったのであろう。

それでもどこか申し訳なさそうな水曜<sup>すてら</sup>に、千五百<sup>ちいほ</sup>はわざと大きな

声で「さて」と言って、終わりそうにない話題から強引に変える。

「じゃあボクは早速手回しに向かうけど……、水曜<sup>すてら</sup>はどうする？」

「……私は帰るよ。もう練習をすることもないしね」

そう言う水曜<sup>すてら</sup>の表情は、どこかすっきりしたような様子だった。本当に今まで常盤台に入りたくて悩んでいたのだろう。そんな不安が吹っ飛んだ、受験生が張り出された自分の番号を見つけた時のようだった。

結果は後で連絡すると約束して、この日はとりあえずそれぞれの目的のために別れた。

すでに夕焼けは星空にうつり変わろうとしていて、ぽつぽつと星達も雲の間から見え隠れしている。

「今日は帰れないかなあ……」

そのまま研究所へとむかう道の途中、千五百<sup>ちいほ</sup>はポツリと呟いた。だがその言葉とは反対に、表情は嬉々としていて瑞々（みずみず）しい笑顔だった。

「……ケーキ、怒るだろうなあかざり」

一瞬で千五百ちいほの表情が萎えた。

## 第11話 路地裏事件？（後書き）

どうも。自分の表現力のなさに絶賛絶望中の玉露飴です。

これは報告なのですが、目次にある『主人公の説明』を『オリキヤラの説明』に変更しようと思います。

誠に勝手ながらすいません。これも作者の計画性の無さが原因です…。

というかい加減、常盤台に入学しろやって話。

美琴、正直スマン（´・・・`）>”

というか、常盤台に入ったら力量変換はなんて呼ばれるんだろう…？

誰が良い案、教えてください…（焦

ご意見、ご感想、お待ちしております！

でわまた次回 ノシ

## 第12話 友達への思い（前書き）

お気に入り件数が110件を突破しました！

プレッシャーを感じつつも、頑張っていく所存であります！

## 第12話 友達への思い

これまで力量変換という少女は、いくつもの研究所を渡ってきた過去がある。

その研究所では毎回、白くか細い腕に注射器を射され、抱きしめたら折れてしまいそんな華奢な身体を拘束具で縛りつけ、少女の能力についてデータを取る。

そこでの『実験』が終了すると、次は向こうで『実験』。その後も『実験』という、モルモットのような扱いを受けてきた。

しかし彼女自身には、時折に研究者が行う置き去りを用いた非人道的実験のような事は行われなかった。

なぜなら彼女は、学園都市における序列1位。その貴重なデータを、ぞんざいに扱って良いはずはなかった。

だからそれなりに彼女はさして不自由もなく、今まで生きながらえることができたのだ。

しかし、彼が学園都市に現れてから、その安定した生活は緩やかに変わり始めた。

『アクセラレータ  
一方通行』。

運動量・熱量・光・電気量などといった、あらゆるベクトルを触れただけで変換するという能力を持つ少年。

彼が現れてから学園都市の順位も変わり、序列は2位になって、

今まで行われなかった種類の『実験』にも参加させられるようになった。

それでも彼女は彼に対して恨みや憎しみなどは抱いていなかった。見ている者の心を和ませるような人懐っこい笑顔で、彼女はやってきて間も無い彼に声をかけた。

「これからヨロシクね、クラスメイト君」

「着きましたーっ」と

先まで学園都市のビル街を紅く染めていた夕陽はすでに沈み、新開発された明るい街灯が夜の闇を取り払うように煌々と灯っている。

千五百は先ほど文字通り肉体言語で知り合った友達、深泉水曜ふかいずみすてらの常盤台中学入学のために、研究員達せんせいと話をするために慣れ親しんだこの研究所にやってきていた。

千五百はいつも通っている裏口から研究所の中へと入る。いくつ



かせキュリティーがあるが、能力制限がカードキーの代わりの役目を果たしているので問題はない。

研究所の中での様子は、代わり映えしなかった。

いつものように研究員は手元の資料を見ながら早足で通路を歩いていく。誰も私語などは話さず、聞こえてくるのはコンピューターの冷却用ファンの周る音と、通路を歩く研究員の足音のみ。

「何度来ても、変わらないなあ……」

今では昼辺りになると、古法や白井、初春などの友達が学校から支部へやってきて、駄弁つていたりしているのだが、それもここに居た時では考えられなかったことだ。

何度も血を抜かれ、データ収集のための『実験』に使われ、時にその『実験』は置き去りも加わり、【チャイルドエラー力量変換】を調べるための“モルモット”に用いられた。

アクセラレータ一方通行と最初に出会った場所もこの研究所だった。最初は人を拒絶していた彼も段々と接している内に打ち解けて、時たま会々と駄弁ったりしたのもここであつた。

「やあ、相変わらず元気そうだな？」

無音の通路の奥から現れたのは、クレイドル力量変換の『実験』を指示・監修していた、30歳後半の男性だった。

彼は白衣をだらしく羽織り、ヨレヨレのシャツとズボンを着て、無理やり櫛でとかした頭をワシワシと片手で掻きながらやってきた。

ちいほ  
千五百の前まで来ると、彼はタバコ臭い息を一つ吐いた。

「ため息ついてばかりだと幸せが逃げてくよ？」

「幸せ不幸せなんていう確立でしかないものに逃げられても、あんまり悲しくはないかな」

彼がもう一つため息を吐くと、千五百ちいほはタイミングを見計らって水曜すてらのことを話し始めた。

「なんだけど、どうにかならないかな？」

「ムリだな」

あつさりそう言い放つと、彼は千五百ちいほの横を通りすぎ、歩き出した。

「わわわ。待ってよ。ふむう、ちよつとは考えてくれてもいいじゃない」

「あのなあ、お前の常盤台編入の時も結構無理やりだったんだぞ？ それを何の研究価値もない学生の為になんて……。俺らは慈善事業じゃないんだぜ？」

また一つため息を吐くと、彼は通路脇に設置された喫煙スペースのドアを開け、中に入る。千五百ちいほも続いて中に入り、自分の【吸収】の対象にタバコの臭いなどを新たに加える。

「一方通行が『例の実験』に参加することを条件にしてやっとならな。お陰でこちら大事な実験対象失くしてんだ。簡単には領

けねえよ」

「ケチ」

「ほつとけ」

頬を膨らませて不満を露にする千五百を尻目に彼は自販機からい  
つも吸っている銘柄のタバコを一つ購入し、横長の椅子に腰掛ける  
と、千五百もそれに続いて座った。  
フタを開け、その中のタバコを一本口で啜えりと、シワだらけの  
白衣からライターを取り出した。

「……女性の前で平気でタバコ吸うんだね。だから30過ぎても独  
身なんだよ」

「なっ……。うるせえな！俺は一人の方が好きなんだよ！大体お  
前はチビじゃねえか！」

「言ったね？別に今ここでセンサーの体温を根こそぎ【吸収】し  
てもいいんだよ？」

「怖えなおい！」

あまり広いとは言えない喫煙スペースでそのまま二人はワーキャ  
ーと論争をし、キリが無い事を悟るとお互いため息を吐いてそのま  
ま黙った。

タバコにライターで火をつけ、一口吸うと、煙を吐き出しながら  
彼は黙ったまま所在なげに足をプラプラさせている千五百を見ずに、  
喋りだした。

「ま、完全ムリってワケじゃないんだがな。これも結構」

「何？　どんな条件付き？」

言い切る前に口を挟まれてしまった。先まで困った表情をしていた彼女は彼の言葉を聞いて一転、期待に満ちた子供のような顔で彼に詰めよった。

「ま、お前ならイケるか？　簡単に言うと、人殺しなんだけだよ」

「え……」

驚いた、というよりも嫌そうな表情を浮かべる千五百ちいほを見て、彼はああ、やっぱりだと確信した。

千五百ちいほの能力、『力量変換』は、あらゆるエネルギーを地球には存在しない正体不明に【変換】し、その絶大なるエネルギー量もっを以て対象を量子分解させる。

その能力柄、過去の『実験』でも同じようなことをやってきた。一瞬で髪の毛一本、血液の一滴をも残さず“消し飛ばす”彼女の攻撃は、その呆気なさに人を殺めたという感覚が伝わってこないほどだ。

そして千五百ちいほは元々、その正体不明をあまり使いたがらない。使っても『実験』、必要な時の威嚇プロテクタなどであり、能力制限を架せられただけ、その威嚇さえも行っていない。

（『実験』でも置き去り相手にビビってやがんだ。やれって言う方が酷だよな）

彼はそう判断し、俯いて黙ったままの彼女を保護先に帰そうと立ち上がった時だった。

「……………分かつ……………たよ」

「……………お前、正気か？」

今聞いた返事が彼女との経験上、ありえない言葉であつたので思わず彼は聞き返した。

すると今度ははつきりと、俯いていた顔を上げ、必死に何かをこらえるような表情で千五百言<sup>ちいほ</sup>つた。

「分かつた、って言ったんだよ？　気は進まないけど、条件だしね……………」

無理をしているのは目に見えて分かる。しかし、彼はそれに対して何も言わず「そうか」と一言だけ言うつと、吸っていたタバコの煙を吐き出し、ゆっくりと喋りだした。

「目標はこの研究所を襲撃してくる暗部組織の殲滅。まあ、拠点防衛ってヤツだ。失敗はないぜ？」

「……………その暗部のデータは？」

「暗部名は『テキスト』。ついこの前に別の研究所に買収された組織だ」

そこで彼は吸っていたタバコを設置してある灰皿に捨てると、新しい一本を咥え、ライターを取り出す。

「どうやらその研究所は『例の実験』に反対する勢力ですよ。要するに賛成派は少なくともしよつて魂胆だろうな。……ったく、研究者の癖して攻撃的なヤツらだぜ」

咥えていたタバコに火をつけると、再びその灰色のくすんだ煙を口から吐き出す。

そんな彼の態度とは逆に、千五百は苦渋ちいほの選択をするような難しい表情で再び下を向いてしまった。

「ちなみに、上から殲滅しろと言われてんだ。それ以外に方法はねえよ」

彼の発した言葉で千五百はハッと顔を上げる。どうやら今考えていたことを当てられたらしく、今にも泣き出しそうな苦痛の表情を浮かべた。

「……やっぱこういうのは暗部の奴らに任せるか？ お前がやらなくても、暗部雇うから変な義務感は持たなくていいぞ？」

「うつん、やるよ。……時間は？」

「明日の25時ジャスト。場所は二時間前に連絡する」

「分かった……。それで、それが達成できたら」

「ああ。理由はよく分からねえが、そのお友達をなんとか常盤台に入れてやる。成功したらな」

「…………おっけー」

ちいほ 千五百はよろよと立ち上がると、そのまま喫煙ルームから出て行った。喫煙ルームに残された彼は大きなため息を大げさに吐くと、再び指で挟んでいたタバコを啜える。

「…………すまん、アクセラレータ 一方通行」

啜えていたまだ半分ほど残っているタバコを先ほど捨てた設置されている灰皿に乱暴に投げ入れると、彼はそのまま喫煙ルームを後にした。

「俺も結局、血も涙もねえ汚い大人ってワケだ」

## 第12話 友達への思い（後書き）

暗い……。早くにぎやかな日常に戻りたいです><

やはり何の代償もなく物を得られるほど世間は甘くないわけで。

五百円拾ったと思ったら、どこかのゲーセンのメダルという……。

関係なかったですね^^;

ご意見、ご感想、お待ちしております！

でわまた次回 ノシ



### 第13話 魂の重さ（前書き）

暗い話が続きそうです。

ああ、はやく常盤台でののほほんとした日常が書きたい……。

### 第13話 魂の重さ

その日、いつものようにもう何回目かわからない研究所への異動を終え、そこで行われる『実験』開始時刻まで待つていた時だった。

「お姉ちゃんだれー？」

「ホントだ、知らない人がいるー」

研究所の中に用意された仮眠室で力量変換クレイドルが連日の異動に疲れた体を休ませているしているところに、まだ年端もいかない子供数人が声をかけてきた。

力量変換クレイドルは研究所内に子供がいることを不思議に思い、いまだだるい身体でゆっくりと布団から起き上がる。

「……ふあーう」

力量変換クレイドルが起きたことを確認すると、子供達は好奇心か、そろそろとまだ寝ぼけている力量変換クレイドルに群がっていった。

「お姉ちゃん今日来た人でしょー」

「なんだ女かよ。ガツカリだぜ」

「ゆう君そんなこと言っちゃダメだよっ」

「サッカーとかしたかったのになー」

群がってくるなり、率直な感想を言えるのは子供の特権と言わんばかりの歓迎をされた力量変換クレイドルは、未だに寝ぼけて状況に追いついていない頭で、キヤーキヤーと騒ぐ子供達に話しかけた。

「……君たちは研究所の子？ 研究者の子供とか」

「違うよ。私達はここの近くに住んでて、今日はセンセイと一緒に遊びにきたの」

純真無垢。そうとしか呼べない輝かしい笑顔で力量変換クレイドルの質問に答えてくれたのは、真っ赤なりボンが似合う可愛らしい女の子だった。

力量変換クレイドルは立ち上がると、自分が使っていた布団を整えはじめた。仮眠室はすでに子供達の遊び場と化している。とてもじゃないが、再びゆっくり眠ることは無理そうだった。

「あ、私も手伝うー！」

「あたしもー！」

すると、質問に答えてくれた女の子も含め、二人の子が布団の整理を手伝ってきた。力量変換クレイドルより小さい身体を懸命に動かし、二人がかりで敷布団を片付けようとする。

「ああ、いいよ。それはボクがやるから。枕とかお願い」

その頑張ろうとする心には申し訳ないけど、と力量変換クレイドルはその敷布団を二人の腕から受け取る。布団が彼女の肌に触れたと同時に身

体にかかる重さは自動的に【吸収】され、力量変換は羽毛布団クレイドルを運ぶかのように敷布団を持ち上げる。

「わ。すごい」

「力持ちなんだね。お姉ちゃんって」

なぜか羨望のまなざしを向けられた力量変換クレイドルは、予想外の褒め言葉に少し照れた。

「じゃあオレが乗っても大丈夫だな！」

そう言うやいなや、先まで仮眠室で騒いでいた男の子の一人が布団を持った状態の力量変換クレイドルの背中に飛びついた。

しかし、その男の子は飛びついた瞬間にまるで熱いものに触れたように、半ば条件反射の勢いでバツと飛びのいた。

「うわっ何だこれ！？　すごい冷てえ！」

「ああ、それはね。ボクが君の体温を吸っちゃったからだと思うよ……っつと」

布団をもとあったスペースに下ろすと、そのまま布団が数枚積み重なったところの上に腰掛ける。すると自然に子供達が力量変換クレイドルを囲むように集まってきた。

「ボクはまだ能力がうまく使えないから。意識してないと常に触れた物から何か【吸収】しちゃうんだ」

ちょっと待っててね、と力量変換クレイドルはその囲いから抜け、仮眠室の入り口の横にあつた洗面台に向かった。そこにあつたコップに水を入れると、待っている子供達の囲いの中に戻る。

「さて、ここで質問。水はどうやって氷るのかな？」

「えーっと、冷蔵庫に入れたら出来るよね？」

「そんなの知らねえよ」

「ゆう君！ …えーっと私も分かんないや」

子供達は一様に考えながら、結局は答えにたどりつけなかったらしい。コップを持ったままニコニコしている力量変換クレイドルに降参の意の目線を送る。

「じゃあ正解。簡単に言くと水はね、温度を低くすれば凍るんだよ。こんな風に」

力量変換クレイドルは手に持っていたコップに意識を向ける。すると、コップの中に入っていた水は一瞬で凝固し、ピキピキとコップが急激に冷やされる音とともにひんやりと冷気が漂ってきた。

「ボク 능력は『力量変換』。触ったエネルギーを吸いだせることも出来るから、こんなこともできるの」

「でもじゃあなんでゆう君はさっき冷たいって言ったの？」

先ほど布団の整理を手伝ってくれた女の子が、手を挙げて質問する。その後ろでは力量変換クレイドルから渡された凍ったコップを手に、男の

子達が不思議そうに首をひねっている。

「それは氷と一緒にだよ。ボクは周りの温度を【吸収】するから、さっきの男の子の肌の温度が下がったの。ほら、家の窓を開けっぱなしだと寒くなっちゃうでしょ。アレと同じ」

「へえ〜」

しかし、すでに女の子はそんな力量変換クレイドルの説明よりも凍ったコップが気になるようで、説明を聞きながらチラチラと男の子達の方を見ていた。

その様子に力量変換クレイドルは「行っておいで」と言うと、元気よく頷きその群集に駆けていった。

コップ一杯の氷でワーキヤーと騒いでいる子供達を眺めながら、腰掛けた布団から感じる柔らかな弾力にうとうとし始めていると、仮眠室の天井に設置されたスピーカーからアナウンスで呼び出しがかかった。

クレイドル  
力量変換は手を振りながら子供達から別れると、仮眠室の外で待っていた研究員に連れられて『実験』を行う場所に向かった。

「今回の『実験』は今までのものとは違い、負担は少ないと思いますよ」

「そう？　なら助かるなー。このごろ大変なのが多くなって……」

歩きながら研究員と『実験』についての話をした後、『実験』を行う施設にある待合室に通される。すると、どこかで聞いた話し声が待合室の扉の向こうから聞こえてきた。

「え……」

恐る恐る開けてみると、やはりそこにいたのは先ほどまで仮眠室でコップに入った氷で遊んでいたはずの子供達だった。

クレイドル  
子供達は力量変換を見つけると、トコトコと走り寄ってきた。

「あー、さっきのお姉ちゃんだ」

「なーんだ。お前もこの『じっけん』ってやつをするのか？」

「あ、だから今日来てたんだー」

待合室は省電のためか薄暗く、いつもいる所ではない慣れない場所にいた所為か、子供達はどこか安堵した様子だった。

しかしそんな子供達の様子とは裏腹に、力量変換の表情は曇って

いた。そもそも研究所に子供がいること自体がイレギュラーだったのだ。今回の『実験』に参加するためだったのだろう。

先の説明も、『実験』内容には間接的にしか触れていなかった。

『実験』内容はまだ知らされていない。これも今までに無いイレギュラーだ。

「……嫌な予感がある」

クレイドル  
力量変換が最悪の予想に辿り着こうとしたときに、まるでそれを遮るようにして、アナウンスで力量変換クレイドルに呼び出しがかかった。

「いつてらっしゃーい！」

子供達の元気な声に曖昧な笑顔で答えながら、煮えきれない思いを胸に待合室を後にした。

しばらく通路を歩いて、呼び出された場所は『実験』を行う場所を上から眺めることが出来る、と説明されていた研究員用の部屋だった。すでに何人かの研究員がパソコンに向かって準備を進めている。

邪魔にならないような場所で待っていると、白衣をだらしなく羽織り、ヨレヨレのシャツとズボンを着て、無理やり櫛でとかしたような髪型をした研究員が奥の部屋から出てきて、力量変換クレイドルの元へ歩



いてきた。

「よ。まあ軽く自己紹介とでもいこうか。俺は瀬川一筆。せがわ ひとふで 今回の『これ』の担当だ。よろ」

「『実験』に参加する力量変換クレイドルです。それでだけど

」

「ああー分かつてる。『これ』の内容だろ？ それを言うために呼んだんだ」

一筆は白衣のポケットからリモコンを取り出すと、いくつかのボタンを操作した。すると今まで閉まっていたらしい壁だと思っていたシャッターがゆっくりと上がっていく。その下から今回の『実験』場所が見えてくる。

「さて……。お前は“魂” ってのを信じるか？」

「へ？ いや……。何で急に？」

「“外” の人間は、人間は死ぬとコンマ数グラム軽くなるだろ？ それが魂が抜けるって言うらしいんだが……。ま、これはその魂があるかどうか確認する実験だな」

シャッターはぐんぐんと上がっていく。力量変換は一筆に連れられて、窓から今回の『実験』場所の様子を見た。

「じゃあ、あの子供達つてまさか

」

「ん？ ああ、あの置き去りガキどもと一緒にだったか。アイツらは今回の『実験』の被検体サンプルだが？」

力量変換<sup>クレイドル</sup>は全身から血の気が引くを感じた。

これから力量変換<sup>クレイドル</sup>は 人間の魂を抜く 実験に参加する。ということは、あの子供達に触れて、死んだ時にしか抜けないはずの“魂”を力量変換の【吸収】で無理やり抜き取るという意味だろう。

「でも、でもそんなことをしたらあの子達は……………！」

「あん？ 別に問題はないだろ。すでに麻酔を打って眠らせてある。暴れられたら困るしな」

「だからあの子達は ー」

自分の質問にちゃんと答えずにうやむやに返す目の前の男を問い詰めようとすると、その言葉を掻き消すように『実験』の開始を意味するサイレンが鳴り響いた。

「ほら、開始予定時刻だ。さっさと行つて来い」

「なっ！？ ボクはこんなのやりたくない！ やめろ離せ！」

一筆に掴みかかろうとした力量変換<sup>クレイドル</sup>は、何人かの研究員によって抑えられ、そのまま実験をする場所まで連れて行かれた。

途中研究員の体温を根こそぎ奪おうとしたが、何か細工をしているのか、全く【吸収】できない。この時の彼女はまだ能力を制御できていないので、【変換】したエネルギーは未だ放出できない。年齢的に言えば小学生の彼女の腕力では、大人に逆らうことは敵わなかった。

実験をする場所につくと、麻酔を打たれて眠っている子供達の前に立たされた。

『始める。力量変換』  
クレイドル

「嫌だよ……。こんなのできるわけ」

クレイドル  
力量変換が拒否の姿勢をとったと確認すると、側に就いていた研究員に腕をつかまれ、そのまま眠っている子供の一人へと引つ張られる。

「痛っ！ やめて離してっ！ ボクはこんなことしたくないっ…！」

引つ張られる先には眠っている女の子。仮眠室で布団の整理を手伝ってくれたあの女の子だった。女の子の様子には一切の警戒の色も混ざってはならず、無防備な寝顔だった。

でも、力量変換クレイドルが女の子に触れれば魂を抜けるとは限らない。それだけ魂とは不確定なものはずなのだ。

それでもなぜか本能が、この子に触るな、魂を抜いてしまっ、と警鐘を打ち鳴らし続ける。

『いつでもデータがとれるようにしておけ。恐らく機会は一瞬だからな』

「いやあああああああああああああああ！」

その手が女の子の無防備な寝顔に、触れた。

「……嫌なもの、見ちゃったな……」

千五百ちいほはむくり、と重い瞼をこすりながら電源をつけっぱなしのパソコンの時刻を見る。

昨日の夜、一筆と話をつけて研究所から第177支部に帰ってきた後、そのまま丸一日分眠ってしまったらしい。

千五百ちいほの机の上には、初春の字体で「なにかあったら相談に乗りますよ」と書かれたメモが置いてあった。

「……ありがと、初春」

いつのまにかかかっていた毛布を椅子に引っ掛け、伸びとともに立ち上がる。

初春のメモをそつと自分の机の引き出しの中にいれど、千五百ちいほは誰もいなくなった支部から外に出て、研究所へ向けて歩き出す。

「でも、相談に乗ってもらうのはまた今度にするよ」

今回の『これ』は、誰かに相談できるものではない。夢で見たあれとは違い、今回は自分から人の命を刈り取りにいくのだ。

千五百ちいほは精神安定剤トランキライザーを水なしで飲み込み、携帯で受信したメールを確認する。

そこには時間通り、一筆が待機場所と敵の情報を記したメールが入っていた。

千五百ちいほは携帯をポケットにしまつと、夜特有の静けさに包まれた歩道から夜空を見上げる。

満天とまではいかないが、夜空には星々が爛々と輝いている。

「……行ってくるね」

誰かに言うでもなくボソツと呟くと、千五百ちいほは走り出した。

### 第13話 魂の重さ（後書き）

今回のプロットを作っていて思ったのですが、「13歳の女の子の過去にしては重すぎね？」という感想を持ちました、作者ですw

『とある魔術の禁書目録？』テレビ放送まで一週間を切りましたね。  
。

これによりさらにとあるの二次創作が増えるような予感がしますよ  
( \_ \_ ) ; )

そしてお気に入り件数、およびPV・ユニーク数も何かすごい勢いで増えてます。

感謝感激ですっ！( > < ) ヽビシッ

ご意見、ご感想、お待ちしております！

でわまた次回 ノシ

## 第14話 暗部 VS Level 5（前書き）

今回は前回に引き続き、暗い話です。

苦手な人は読まずに飛ばして次回の後日談だけ読む、ってのもアリです。

## 第14話 暗部 VS Level 5

「今回は暗部迎撃のため、特例で能力制限プロテクタ リミッターの制限を7から4へ一時的に引き下げる。いいな？」

「分かった。場所はここでもいいの？」

「ああ、暗部襲撃の情報は上からのものだからな。信用に足るだろ」

千五百ちいほは一筆に指定された研究所の駐車スペースの隅にしゃがみこむ。携帯を肩で挟むようにして持つと、空いた両手で履いてきたスニーカーの靴紐を結びなおし始めた。

指定された時間は今日の25時ジャスト。携帯の時刻はすでに0時30分を回っていた。

ピツと短い電子音が響き、千五百ちいほの両手首・両足・首・頭についている能力制限プロテクタ リミッターが赤く一瞬点滅する。遠隔操作で制限のレベルを下げたのだろつ。

「テキストは全て能力者で構成されている。水流操作スイマー・発火能力バイロキネシス・エアロシューター・エレクトロマスター風使いに電撃使い。どれもパツとしねえ平々凡々な奴らだ」

「Levelは2・3だっけ。問題ない。お望み通り、早く終わらせるよ」

そこで一筆との通話を切ろうとすると、一筆が「待った」とそれを遮ってきた。先に見た夢による焦燥感と、今から人を殺すという緊張感で苛立っていた千五百は、珍しく声を荒立たせて返事をする。



「まあそうピリピリするなよ。……一応もう無いとは思うが、釘を刺しておく。逃がそうなんてバカなことは考えるなよ?」

「……っ。分かってるよ。切るね」

返事を待たずに通話終了のボタンを押すと、乱暴に携帯をズボンのポケットに押し込む。

そして、携帯を持っていた右手をそのまま、駐車場のアスファルトの地面にあてた。

「エネルギー【吸収】。対象を震度1以下の振動、及びアスファルトの外部・内部温度に設定」

考えていることを口で出して意識を演算に集中させる。普段はこんな口で言ってから能力発動なんて回りくどいことはしないが、今は緊張によって意識が乱れていた。緊張は能力の演算を阻害する。その一番の対処法だった。

【吸収】を発動すると、アスファルトに変化が現れ始めた。表面からは冷気が発せられ、うつすらと白く凍結し始める。

心の中で10秒数え終わると、アスファルトから手を離れた。しかし温度を【吸収】され冷えたアスファルトは、未だ冷気を発し続けている。

「こんなものかな。後は時間まで待機」

携帯を開き時刻を確認しようとした時だった。どこからか音が聞こえたのを感じ、慌てて壁の隅に見を隠し、息を殺す。

その時、人が寝静まった静かな夜に、車によるエンジン音が向こう側からゆっくりと迫っていた。

「しかし、あんな研究所の言うこと聞いてて言いわけ翼<sup>たすく</sup>？」

「別に問題ねーだろ。報酬は良い方だし、雑用もあっちが勝手にやってくれる」

暗部組織、『テキスト』は、裏ではそれほど知られてはいなかった。メンバーの能力もLevel 2・3程度であり、裏での仕事も『後片付け』や『後始末』のような地味な依頼しか回ってこなかったのもその理由だ。

「アイテムとかスクールみたいに、パツとした仕事が来るようになったのも、買収されてからだしね」

「誰がなんと言おうと、最善の選択をしただけだろ」

今から一つの研究所とその関係者を排除しに行くはずであるのに、

4人の空気は学校の教室で雑談している生徒のそれに近かった。

「それにしても、静かだな」

「そうだね。わざと情報を流している以上、ここまで楽に来れたつてのも不気味だね」

『テキスト』を買収した研究所は彼らが夜に襲撃するという情報をわざと相手側の研究所にリークしていた。開始時刻は本来の30分ほど遅くしてあったが。

この情報のリークは相手側への威嚇の意味もあったのだが、どうやら相手は一戦交える気らしい。リークに対し、降伏などの動きはなかった。

しかし一戦交えるきならばこの状況はおかしい。すでに目の前には相手側の研究所が見えていて、検問や奇襲などの様子は一切見当たらない。

「……何か嫌な予感がするな」

「なーにカツコつけちゃってんの？ もともと翼はダサいんだから背伸びしないの」

「うるせえな加佐子！ お前は毎回だが緊張感が無さ過ぎだろ。いつか死ぬぞ」

「あー怖い怖い」

大して怖がっている素振りも見せず、加佐子は組んでいた足を組みなおした。高飛車な表情からは、今の忠告による効果は一切感じ

られない。

その様子に翼は眉間をつまみながらため息を吐くと、突然後ろの座席から肩をポンポンと叩かれた。

「まー加佐子はいつものことだから。心配しすぎだよ？ 翼」

「そう言うお前もだがな、斗近。…はあ、これでよくここまで裏で生きてこれたな」

「運も実力の内」

「エセ侍、それ冗談になってないぜ」

後部座席の斗近の横に座っているエセ侍と呼ばれた少年は、我関せずといった様子で腕を組んで目を瞑っていた。

そうしている内に車は目的地に着いたらしく、運転席にいる研究所からの雑用係がオート式のドアを開ける。

「さて、今日もお仕事頑張りますか」

さきほどまで足を組んで退屈そうにしていた加佐子は、車から降りると嬉々とした突然声をあげた。

静まり返った夜の闇にその声は予想以上に大きく響き、加佐子以外のメンバー全員が一樣に焦ったが、研究所の警備員やらが出てくることは無く、ほっと胸を撫で下ろす。

「あのなあ……バトルマニア戦闘狂なのはいいんだが、ヒヤツとするようなことをするなよな」

「まあ、誰も来ないみたいだしいいんじゃない？」

「油断は大敵だ。皆、警戒を怠らぬよう！」

エセ侍がいつものように仕事前のおはこ十八番を言おうとした時だった。斗近が降りて、『テキスト』メンバーがそろうのを確認していたように、空気を引き裂くような音が降りた車から響き渡った。

車は音も無く真つ二つに切り分けられ、ガソリンに引火し爆発する。雑用係が生きているかどうかなど、確認するまでもない。

「一体どこから……！」

たすく翼は爆風に吹飛ばされ、地面に叩きつけられた身体をなんとか起き上がらせると、頭を何度も振り周囲を確認する。メンバーはどうやら爆風に巻き込まれたようだが、軽傷のようだ。

ツシユバンしかし車から上がる炎によって、遠くの景色が全く見えない。閃フラ光弾に似た、状況を上手く使った戦法だった。

運悪く、夜空には弱々しい星の光以外はなにも照らすものがない。月も今晩は新月らしく、あたりは車からあがる炎のみが煌々と『テキスト』メンバーの姿を照らし出す。

「まずいよ翼。たすくこのままじゃ敵に丸見えだよ」

「ならば炎を消せばいいのだな？ 承った」

エセ侍は左手を車からあがる炎にかざすと、その手のひらから水が勢いよく噴出した。そのまま水は車の炎へとかかり、消火を始める。

「任せたぜエセ侍。これで目が暗闇に慣れれば……」

「無駄だよ。ガソリンからあがる炎は普通の水じゃ簡単に消せないもの」

暗闇から突然、まだ幼さが残るソプラノの声が、真っ暗な景色の奥から聞こえてきた。その声は段々と大きくなっていて、近づいてきているのが分かる。

「くっ、近くにいますぞ！」

いつでも能力が使えるよう身構えながら、翼はメンバーに呼びかける。彼女の言うとおり、車からあがる炎は未だに消えていなかった。

「おい加佐子、お前の発火能力でなんとかならねえのか！？」

パイロキネシス

「私は燃やすことは出来ても消すなんてしたことないわよ！」

完全に炎の眩しい光に慣れてしまったらしく、もう炎の周辺以外は景色が真っ黒に塗りつぶされたように確認できない。炎があがる音もうるさく、声の主の位置も、これでは確認できそうにない。

「こないんだ？ なら、ボクから行かせてもらっよ」

嫌な言葉とともにソプラノの少女の声が響くと、先ほどの車を真つ二つに切り分けた時のような、大気を引き裂くような音が響く。

「なっ」

その音に一瞬、エセ侍の聲が混ざった気がした。ワンテンポ遅く消火をしているはずのエセ侍の方をハツと向くと、そこにはエセ侍が崩れたように倒れていた。

左右きれいに切り開かれた状態で。

「なっ……うぶっ……あ……」

その光景を直視してしまった翼は、腹の奥から湧き上がってくるものを必死に押さえ込みながら、ひたすらに声の主、少女の声を探す。

「ああーもうじれったい！ このままアイツみたいに切り開かれてたまるかっての！」

「待てっ、加佐子！」

しびれを切らした加佐子は翼の制止を振り払い、闇雲に手のひらに集めた炎弾を辺りへと放つ。暗闇で見えないが、遠くで起きる爆発の音からして少女に当たってはいいらしい。

「ちっ、さっさと出て来いガキがあ！ 影からコソコソとしやがってクソ野郎が！」

全弾をはずしたことに對するイライラと、仲間を殺された怒りによつて完全にキレた加佐子<sup>かさね</sup>は、辺り一帯に向かつて怒鳴り散らす。

彼女の能力に答えるように車からあがる炎も勢いを増し、その眩い明るさはついに声の主を照らし出した。

夜の闇に溶け込むような真つ黒は、その日焼けが見られない白い肌によつて強調され、炎によつて紅く光る双眼は、燃えるようというよりは血の色に似ている。その少女の幼い顔立ちにはそれらは不釣合いに写つた。

「ありゃ、ばれちゃつたね。せつかくこの作戦を思いついたのに」

「うるせえんだよクソガキがあ！」

叫ぶように加佐子は目の前の少女に怒鳴ると、車からあがる炎を操つて、問答無用にその少女をそのまま包み込む。

「そのまま丸焼きになつちまえ。カスが」

「……炎のエネルギーを全【吸収】」

轟！ と今まで少女を取り巻いていたはずの炎が、突然そのうねりを止め、蒸発するように消えうせた。いつのまにか、車からあがつていた炎もそれと共に消えてしまっている。

「【吸収】したエネルギーを【変換】。適当な形状にて【展開】」

それは少女の背中から生え出てくるように、まるで蝶の羽化のようによつくりと現れた。



背中から現れた、夜空に溶け込むほどの黒く禍々しい翼。

それは左右2対現れ、その翼からは黒い羽のようなものがはらはらと落ちている。

「逃げないでね？ ……ボクも、辛いんだ」

言い終える前に少女は2対の翼で飛翔するようにこちらに向かつてかけてくる。その速度は人間のものとはとても思えなかった。

「くそっ！」

翼はさつきからうるさくて仕方が無い心臓を必死に押さえつけながら、彼女にむけ能力を使う。音速の壁を破った風の一撃は、通常の人間ならば一発で吹き飛ばせる。

しかし、それは彼女には叶わなかった。

なにも防御をする素振りをしていないはずなのに、翼の一撃は彼女に当たると同時に消え失せ、そのままの勢いで翼へと突っ込んでくる。

「くそっ！何なんだよコイツは！」

すんでのところで翼は横に跳んだ。少女はそのまま翼が居た場所を通りすぎ、首だけをこちらに向ける。

「はっ、なんだよ。何もしてこねえじゃ」

「翼、腕が……！」

斗近の悲鳴に近い声に気づいて自分の左腕を見る。

いつの間にか左腕の肘から先が無くなっていた。視線の先には何か肌色をした細長いモノが転がっている。

自分の腕が切り落とされたことを脳が認識すると、切られた腕の断面から焼け付くような痛みが襲ってきた。

「うああ……ああ……あああ！」

まるで脳を直に殴られているような痛み、<sup>たすく</sup>翼は左腕を押さえつけながら地面で苦悶する。

「<sup>たすく</sup>翼！？　しっかりして、<sup>たすく</sup>翼！」

斗近は血の気が引いたように急いで<sup>たすく</sup>翼の下へ駆け寄ると、もがき苦しむ<sup>たすく</sup>翼の左腕を止血しようと押さえつける。

「加佐子！　早く止血しないと、<sup>たすく</sup>翼が、<sup>たすく</sup>翼があ！」

「くっ、お前がやられてどうすんだよ……！」

加佐子は斗近が押さえつけた左腕の断面に手をかざし、炎によって強引に傷を塞ぐ。それと同時に<sup>たすく</sup>翼の割れんばかりの悲鳴が響くと、気絶したのか黙ってしまった。

「……ごめんね。本当に」

斗近はキツと声の主である少女に対して人を射抜くような殺気に満ち満ちた視線を向ける。その表情は普段穏やかな彼女からは想像できない、修羅のような怒りに支配された表情だった。

「なにが“ごめんね”よ！翼たすくの腕を切り落としておいて！なに  
良い子ぶってんのよ！」

「違う、ボクは」

「うるさい！　死ね、死んでしまええええええええええ！」

斗近はその修羅のような表情で、慟哭するように叫ぶ。目にはいっぱいの涙が溢れ、頬を伝う。

明らかにLevel3とは違う、Level4以上の電気を帯びた彼女はその電撃を少女に放った。

壮絶な爆発音とともに、チリチリと電撃による電磁波が爆煙と共にほとばしる。

「死ぬ、くたばれ、消え失せろおおおおおおおおお！」

続けざまに斗近は狂ったように爆煙に向けて電撃を放つ。その度に雷にも似た大氣が爆発するような音が、電撃の閃光と共に発せられる。

しかし、その閃光と爆音がふつと途切れた。斗近は腹部に感じる違和感に、視線を自分の腹に落とす。

そこにはレーザーに似た禍々しいほどに黒い一線が、腹部を貫いていた。そしてその一線は、真横にスパツと刀で横薙ぎに切るように移動すると、往復するようにもう一度腹部を一閃した。

「ごとり、と斗近はそのまま地面に崩れ落ちる。上半身と下半身は真つ二つに分かれていた。」

「斗近……うそ」

加佐子は目の前で起きたことに追いつけずに居た。すでにメンバーの2人が死亡。リーダーの翼も左腕を切り落とされ重症、今満足に戦えるのは自分しかいなかった。

スッ、と朦々<sup>もうもう</sup>と立ち込めていた煙から、斗近の電撃を喰らったはずの少女はあろうことが掠り傷一つ見当たらない姿で現れた。

戦闘狂である加佐子も、この状況には怖気づいてしまった。これはもはや勝てる勝てないの問題ではない。もはや一方的な虐殺だ。<sup>ワンサイドゲーム</sup>

もう闘う気が失せてしまった加佐子は、その場にペタンと座り込んでしまった。このままでは間違いなく自分も殺される。そうと分かっているにも、怯えきった身体は言うことを聞いてくれない。

「ごめんね。怖いよね。こんな化け物……」

すぐ目の前に立っているのは、夜空に溶け混むような禍々しい黒い翼を持った、大切な仲間の命を二つも奪った、悪魔。

それが、こちらを向いて、立っている。

「うわあああああ！ 来るな化け物オオオオオオオ！」

手のひらに火球を作り、そのまま目の前の悪魔へと投げつける。しかしその火炎は悪魔にぶつかりと同時に霧散し、わずかに散った火の粉がパラパラと風に流され消える。

「……ごめんね」

最後に見た瞬間、なぜか悪魔は泣いていた。しかしその意味を考えるより先に、加佐子の頭は禍々しく黒い一線によって貫かれ、加佐子はその場に力なく崩れた。

「後は……、君だね」

力なく倒れている翼<sup>たすく</sup>に、少女はそつと近づき、首筋に手を添える。

「なんで……、こんなことを、する？」

首筋を触った時におきたのか、元々おきていたのか分からないが、翼<sup>たすく</sup>は喋るのも苦しそうな表情で少女に話しかける。

「……友達を、学校に通わせるため」

少女は涙声になりそうな自分の声を必死に抑えながら答える。その答えに翼<sup>たすく</sup>は一瞬間をしかめると、先のような苦しそうな顔ではなく、どこか優しい表情を浮かべる。

「それだけに、俺たちは殺されるのか。まあ裏だから仕方ない、か」

少女の頬に涙が伝い、翼<sup>たすく</sup>の煤で黒く汚れた頬に落ちる。翼<sup>たすく</sup>はそれを横目で確認すると、目を瞑って泣いている少女に言った。

「俺を、殺せよ。そうすれば、そいつ、学校行けん、だろ」

「分かってる、分かってるけど………っ」

少女の顔はすでに涙でいっぱいだった。翼たすくの頬に彼女の涙が雨のように滴り落ちる。

「俺は今、苦しいんだよ。さっさと楽にしてくれ。……仲間のところにも、行きたいしな」

少女は翼たすくの言葉に頷けないまま、首に手を触れた状態のまま泣き続ける。

暫くして少女は顔を上げると、心の中でずっと葛藤してきたのであろう、すこしやつれた顔でこくつと頷いた。

「そうか、助かる。……そうだ、あと一つ。そいつに言って、おいてくれ」

少女は未だに泣いている。翼たすくの頬はすでに彼女の涙で濡れきっていて、まだ涙は滴り落ちていた。

「学校、頑張れよ」

少女は思い切り目を瞑り、首に触れていた彼女の手が強張るのが分かる。それと同時に、急に意識が重くなって、底へ底へと沈んでいく。

（きれいに死なせてくれるんだな）

死ぬ時に見るらしい走馬灯は見当たらず、ただただ意識だけが暗い闇の中へと引きずりこまれていく。

（研究所の次はあの世に招待か。『テキスト』も人気になったもんだな）

もう自分の身体感覚などない。周りの音も、匂いも、光も、全て遠くに感じられる。

（今行くぜ、みんな）

そして翼<sup>たすく</sup>の意識が、一番深い底へと、着いた。

## 第14話 暗部 VS Level 5（後書き）

千五百無双です。ちいほ……こんな無双、全然書いてて楽しくないですが。

暗い話はここで一区切りです。次回からは後日談の後、日常編へと戻ります。

人の命は、大切なんです。

ご意見、ご感想、お待ちしております！

でわまた次回！（> <）ノシ



第15話 台風一過。曇りのち晴れ。(前書き)

更新おくれてスイマセン。前話のダメージが癒えるのに時間がかかりましたw

これからは先は当分ほのぼのなのでご安心を。

## 第15話 台風一過。曇りのち晴れ。

「楽しみだなー常盤台での学園生活！ 千五百もちょっとそう思わない？」

「…あ、うん。そだね。ボクも学校に通えるから嬉しいかな」

湾千五百が彼女の友達、深泉水曜を常盤台中学へ入学させるために瀬川一筆に頼んだ際、彼が出した条件である『襲撃してくる暗部組織の殲滅』を終えた千五百は、その後、精神的問題から数日間に渡って研究所で過ごししていた。

千五百の担当研究員である一筆が投与した新型の精神安定剤により大事には至らなかったが、その時の記憶・感情が時折フラッシュバックするという後遺症を遺してしまった。

研究所ではすでに2回このフラッシュバックを起こしており、その時は幸い一筆の手によって最悪の事態を回避することが出来たが、その時の千五百から危険を感じた一筆は上層部へ連絡。症状を説明した後、彼女の常盤台への入学を中止するよう呼びかけた。

しかし彼の進言はなぜか却下され、何事もなかったように千五百は常盤台へと入学することが再決定された。

「……ねえちょっと。千五百、何か顔色悪くない？」

「…え？ そんなこと、ないよ。そんなことない……から」

たとえフラッシュバックによってあの時の記憶が再生リビートされるとしても、あの時の記憶は『記憶』として残っている。

それは昨日に食べた夕飯の味気無さや、177支部でのみんなの表情のようにいつでも思い出せるものなのだ。

それが彼女を追い詰め、責め立て、苦しめて、最終的にフラッシュバックという形の“発作”によって表面上に現れる。

目の前にいるのはそんな記憶を作るキツカケになった友達。表面は平気なふりをしていても、心は悲鳴をあげ続けていた。

「まあ千五百ならダイジョウブだね。なんたってLevel5なんだから！」

「ふむう、そんなことないよー」

（アハハと顔を見合わせ、笑いあう。そんなこの風景を、ボクは求めていたのに　　）

千五百はそのままいつものように楽しげに喋りだす水曜に笑顔で相槌を打ちながら、心の中で暴れる何かを必死に押さえつける。

（何でこんなにも寒くて、苦しいんだろ……）

季節は春、真っ盛り。

常盤台中学の入学まで残り少ないカウントダウンを始めた、ポカポカな暖気が学園都市を包む日常の日々の中で、彼女は一人憂いた。

学園都市はこの季節の移り変わりと相応に、冬の殺伐とした雰囲気から一転、春らしい賑わいを取り戻していた。

それは新年と共に訪れる受験シーズンが終わって受験生達がそれぞれで落ち着いてきたこともあってか、歩道には冬の時とは倍近い人で溢れている。ここは学生が人口の約8割を占めている学園都市ならではの現象であろう。

そんなテレビの情報通りの光景の中を、あと数日で中学生への階段を上る少女たちはのんびりと歩いていく。

「そっいえばさ。千五百つてちょっといつも同じ服を着てるよね」

「えっ。そうかな？」

事実、千五百は外出する際はいつも上はいつものキャミソール。下はいつもの薄い短パンと、やっと季節に準じてきたファッションであった。

前に白井や初春、古法と一緒に千五百の服を買いにいったことがあったが、どれも運動性に欠けるということで大事にダンボール箱に保管されている。

「はあ、機動性ねえ……。千五百ってそんな活発だったわけ？前の千五百は知らないけど、私が見てる限りはちよつとそうでもないじゃん」

「ははは…、ふむう。まあ、個性つてことで」

実は機動性・運動性を重視している、というのはウソで、実際はただ暑いのが嫌だから、という単なるワガママである。

彼女は能力柄、常に無意識下で日々の生活の中で不必要な要素を【吸収】しているので、衣服による体温の調整・保温はしていない。

もつとも、それも建て前であり、研究所内ではいつも“必要最低限の部位を隠したテーピング”で過ごしていたため、身体を覆う衣服が暑くて鬱陶しいだけだったりする。

小学校では季節を問わず半袖シャツで過ごしていた少年が、中学のブカブカの制服を着て感じる感想と一緒にある。

「えー。でも、常盤台になったら常時制服だよ？ どうするの？」

「え」

今日、何度目かになる「え」を発した千五百は、その場で歩を止め、停止した。後ろを歩いていた学生らしき通行人がぶつかって舌打ちするが、それでも彼女は動き出さない。心無しか、目が点になっているようにも見える。

「あれ、知らなかった？ ちょっと、ちゃんと自分が通う学校くらい知っておかないとだめだぞー？」

そんな千五百の様子から知らないことを察したのか、そのことにすこし優越感を感じた水曜は自慢げな顔で止まったままの千五百の前に立つ。

「常盤台は特別なことが無い限り、休日でも制服で過ごすんだよ？今のうちにその他の服に慣れておいた方がいいでしょ？」

水曜が喋っている途中でハッと我に帰ってきた千五百は、その言葉聞いて考え込む。あごに手を当てて考え込む姿は、容姿からかどこか可愛らしく見える。

「っていうかさ、千五百ってLevel 15で序列2位なんですよ？お金たくさん持つてるなら使っべきだよ！わたし……いや、学園都市のために！」

「いや、今私って言いかけたよね？ しかも学園都市は別に不景気とか円高とか関係n」

「いいから！ ほら、善は急げ！」

千五百が言い終わらないうちに水曜は彼女の腕を掴むと、そのまま返事を聞かずに走り出す。春の陽気でこった返す人ごみを掻き分けながら、その表情は新しい友達との買い物への期待で喜色に満ちていた。

「わあ、ちょ、ちょっと待って。ねえ！」

急に腕を掴まれて体勢を崩しながらなんとか走る千五百には見えなかったが。

「「おわあ！？」」

水曜が千五百の手を引きながら曲がり角に差し掛かった時、ついに人と正面衝突した。千五百もぶつかった反動で後ろに倒れてくる水曜に押し倒される形で、受身もとれずにそのまま倒れる。

彼女とその上に乗っかっている水曜には、千五百の能力によって倒れたダメージはない。しかし目の前で盛大に頭を地面にぶつけたらしい少年は、ぶつけた後頭部を抱えて転がりながら悶絶していた。

「いつつ…。あ、千五百ゴメン」

「いや、ボクは大丈夫だけど。その、相手の人が……」

千五百は水曜の後ろを恐る恐るという風に指差す。

水曜がその指が指す方向を振り返ると、アスファルトに頭の後ろから思いっきり頭突きしたらしいツンツン頭の少年は、息も絶え絶えに苦しんでいる。痛みはまだ去ってくれていないらしく、かすかに呻き声も聞こえる。

「あー、えーつとそのー…。ちょっとすいません？」

「ちょっとつてなんだよ！？ あと疑問系かよ！？ こっちは今日も平和だなーとか思いつつ朝からダラダラして過ごしてたらもう昼を過ぎててしかも明日は高校の入学式で何も準備してねえって焦って走りながら何がいるか頭の中でまとめてたら今の衝撃で全部飛んでっちまってパアじゃねえか責任とれこのヤロウ！」

水曜がツンツン頭の少年に近づいて顔を覗きこむようにしゃがむと、突然ガバツと起き上がり、涙目になりながら訴えてきた。内容を聞いている限りではよくある自業自得なのだが。

水曜はそのツンツン頭の少年の剣幕に若干引きつつも、とりあえずぶつかっただけこちらが悪いからと自分に言い聞かせ、どうしようかと後ろにいる千五百に目送りする。

「いや、ボクを見てもどうもできないって」

「え？」

水曜が千五百に目送りしたのにつられたのか、ツンツン頭の少年も千五百の顔を見た。それと同時に痛みで涙目になっていた表情か



ら一変し、まさに驚いたと顔に書いてあるような驚愕の顔に変わっていく。

その様子を見て、千五百は首をかしげる。目の前の少年とは今初めて会ったという気はしない。昔どこかで会っていたような……と頭の中でそのシーンを探し始める。

「クレイドル……なのか？」

「くれないどる？ ちよつと誰よそれ。この子は私の友達で、ちゃんと灣千五百っていう立派かどうかは知らないけど名前はあるのよ！」

立派かどうかは知らないってひどいなあ……と思いつつも口には出さず、必死に目の前にいる彼の名前を思い出す。確かに前に彼とは会っている。あと少し。

「ちいほ？ でもお前、あの時はクレイドルって……」

「あ、思い出した。えと、とーま。とーまだよね？」

やっと頭の中でつかんだ彼の名前の記憶を忘れないうちに口に出す。水曜はワケが分からないといった風に首をかしげているが、彼はそれで確信したようだ。どこか安心した顔で千五百に近づくと、まだ地面に座ったままの彼女に手を差し出す。

それを掴んで立ち上がると、千五百は服についたホコリをポンポンと軽くはたき落とす。するとツンツン頭の少年、かみじょう とつま上条当麻は彼女が顔を上げる前に口を開いた。

「ええーと……ちいほ、だっけか？ “あの時”からずっと聞きたい

ことがあるんだが……いいか？」

「ふむう？ 別にボクは……いいけど」

突然、上条の声色が真剣な色に変わり、まっすぐな眼差しで千五百の答えを待つその表情に一瞬ドキツとした千五百だが、すぐいつもの調子に戻る。

なぜか水曜の顔に赤みが差していたが。

その様子に気づかない二人はとりあえず場所を移そうと、最寄のファミレスを探してウロウロし始めた。千五百が頭の中で地図を広げ、一番近くにあるファミレスを見つけ出すと、上条もそれにしがいが歩き始める。

ハッと意識を取り戻した水曜はいつの間にか遠いところを歩いているツンツンと千五百を見つけると、顔を赤いままに走り出す。

友達との買い物を邪魔された怒りと一人置いてけぼりにされた怒りと一瞬彼の表情にドキツとしてしまった自分への怒りを込めて、水曜はその勢いのまま目の前を歩く当麻へと突進する。

背後から聞こえるタタタ…という音に気づいてふと振り返る当麻だが、もう遅い。すでに相手は怒りを速度へと変えたかのように猛スピードで突っ込んできていた。

「ちょっと何勝手に話を進めてるの！ ってか置いてくくなやこらああああ……！」

振り返った上条の真正面、その腰の辺りへと水曜は思いつきり突

っ込んだ。

ドス！　っという嫌な効果音と共に上条の身体はそのまま宙を舞い、地面へと落ちる。しかもなぜか後頭部から。

上条をクッション代わりにして無傷らしい水曜は、勝ち誇った顔でそのまま立ち上がる。千五百は目を点にして「へ？」と状況の展開に追いつけずにいる。

「ふ、不幸……だあ……あ……あ……あ」

二回強打した後頭部を押さえればいいのか、タックルされてとても痛む腹を押さえればいいのか、訳も分からないダブルパンチに、上条はただその場で身を振りながら悶え苦しむしかなかった。

第15話 台風一過。曇りのち晴れ。（後書き）

うん、いい。後半の、こういうのがやりたかった（、・・・）

『とある魔術の禁書目録？』、はじまりましたね。今回はその第1話にあやかった落ちを付けてみました。

詳しくは原作の第五巻の91ページか、アニメ第1期18話をご覧ください。

水曜、こんなキャラだったっけ？^^；

でわまた次回ゝ ノシ

第16話 晴天の前の夜（前書き）

闇咲さん、カッコええ……。OPもいいし……。

完全に私見ですがw

## 第16話 晴天の前夜

「……で、背後からの不意打ちをどう捌くかの話だっけ」

「ちげーよ。あの時、郵便局の時、あの黒服のやつらはなんだったんだ？ 親がつけた保護者…なわけねえよな？」

あの水曜すてらの不意打ちから上条かみじょうが復活するまで待った後、現在は千五百いほの案内で一番近くにあったファミレスに座っている。

上条と千五百はテーブルを挟んで向かいあい、先ほどの空気から一変してどこかピリピリした空気で包まれている。

水曜は先ほど完全に置いてけぼりにされたことをまだ根に持っているのか、ドリンクバーで持ってきたコーラを拗ねた顔のままチビチビ飲んでいる。

「ああ、そうだっけ。ふむう、とーまなら話ても大丈夫かな？ あまり『こっち』のことに巻き込むのは気が引けるけど」

そこで千五百は手元にある、先ほど頼んだ砂糖やらガムシロやらで極甘になったホットコーヒーを一口飲むと、軽い口調のまま喋りだした。

「あの人たちは別になんでもないよ。言うなら、日雇いの護衛（エージェント）かな？」

「護衛？ 学園都市を見学しに來ただけの小学生にそれは用心深すぎないか？」

確かに、小学生の女の子につけるには護衛など大仰だった。もしこれを平然とやってのける保護者がいるなら、それは極度の親バカか、相当な金持ちのご令嬢などだろう。

上条もそのどちらかだと踏んだようで、何か頭の中で想像するようにならなうに上を見上げて目をつむる。

「あ、言うておくけど、あの時にとーまに言ったことは全部ウソ。見学に来たことも、親がいることも。迷ったのはホントだけだね」

その上条の思考をぶった切るように、千五百はおどけた様子であつさり二つの仮説を否定した。その目の前の少女のあつけない言葉に、上条は思わず座っている椅子からずり落ちそうになる。

「な、何だ？　じゃあお前はあの時ずっとウソ吐いてたってワケか？」

「ふむう……。結果的にそうなるかな？　学園都市の見学も、親がいることも、ボクの名前も」

上条はその呆気なさに思わず苦笑する。半年弱に渡って悶々と考えていたものが、目の前の少女の爆弾発言により次々と碎かれていく。

千五百はふと上条側の席に座る水曜の方を見る。予想通りというか、水曜は全く会話に介入できないことにご立腹らしく、むくれた表情のままコーラを飲み続けている。そのコーラは、いつの間にかドリンクバーで補充してきたらしく、先ほどより量が多い。

「……まあ、そだね。もったいぶらないでぶっちゃけるよ？　……ボクは学園都市の人間です。そして、あと数日後には常盤台中学に

入学して、中学生です」

「ってなんだよ。やっぱり金持ちのお嬢様じゃねえか」

「うん。今はそれでいいよ。もうこの話は今度にしよう？ …… 水曜がさつきから恨めしげな視線でボクを見てるし」

そういつて乾いた笑みを浮かべる千五百に気づいて、上条は横目で隣に座る少女を見る。

その途端、ギロツツと効果音が付きそうな動きで、鋭い視線を水曜は横目で見る上条に向ける。その目はどこか据わっていて、今にもまたタツクルを食らわされそうな様子だった。

「別に千五百たちだけで喋っていいよ。どーせ私はちょっと脇役  
モブキャラ  
なんだし」

と、その後ブツブツと何かネガティブな言葉を呟き始める水曜。相当根に持っているようだった。

「ごめんね水曜。とーまが空気も読まず話をしようっていつから」

「俺のせいだよ！？ っていつか、約束放って俺についてきたのはお前じゃねえか！」

「ふむうヒドイ。『話がある』とか言ってたのは一体どこの誰なのかな！？」

水曜のフォローに入った千五百のセリフに、言われようのない事が含まれていたことに対し、上条が反論する。水曜のフォローに入った千五百もこれには引けず、またそれに反論する。



これに見かねたファミレスの従業員がぎゃあぎゃあと言い合う二人を注意すると、いつの間にか席を立てて口論していたことに気づき、二人とも顔を俯かせながら黙って席に戻る。

「ちよつと夫婦漫才みたいだったよ？」

「「だれが夫婦漫才かつ！」」

ほら息ピッタリじゃん、と水曜はため息を吐くと、ふと右腕につけてある腕時計を見る。すでに5時を回っており、完全下校時刻まで1時間を切っている。

「じゃ、私はそろそろ帰るわ。千五百、また今度買い物いこうね」

「もちろん。次はとーま、邪魔しないでね？」

「するかよ。今回だってわざとじゃないし、俺だって明日から高校……」

そこまで言うと、上条の顔がサーッと蒼冷める。元々、上条は明日の高校の入学式に必要な文房具やら新しい制服やらを揃えようとしていたのだ。それが千五百たちと偶然にも出会ってしまったので、完全に抜け落ちてしまっていた。

文房具類はコンビニなどで見繕えば何とでもなるだろう。しかし制服はどうにもならない。ここから歩くには遠いし、電車はあと数十分で終電をむかえる。行きは大丈夫でも帰りは悲惨なことになること必至だろう。

「ぬあーーーー！ 何だ何だよ何だってんだ！？ ああつくそ、不幸だあーーーー！」

上条はバネに弾かれるように走りだすと、ファミレスから猛烈なスピードで出て行ってしまった。あの脚力なら帰りも別に大丈夫なんじゃないかと千五百は疑問に思ったが、なんだか上条が不憫に思えてきたので自分の中で留めておく。

「……じゃ、私も帰るわ。お会計よろしく」

「ふえっ！？ ボクが？」

水曜が立ち去ったテーブルには伝票と自分一人。無論彼女には食い逃げなどという考えは毛頭ない。仕方なく伝票を手に取り立ち上がると、ため息を吐いてファミレスの窓の外を見る。

すでに上条と水曜の姿はない。何度かこういうことをしていたと思わせるような手際の良さだった。

「……まあ、いいんだけどさ」

その帰り、千五百の雰囲気若干沈んでいたことは、誰も知らない。

「それで、絶対能力進化（レベル6シフト）計画の進行度は？」

『問題ありません、順調に進んでおります。よろしければその映像を手配しますが？』

「いい。誰が血みどろの映像を見たいなんて思うんだよ。…ハア、こちらも順調だ。問題ない」

シワついた白衣をだらしく羽織り、乾燥機から取り出してそのまま使っているヨレヨレのシャツとズボンを着た研究員、瀬川一筆<sup>せがわ ひとふで</sup>は、秘匿の電話から聞こえてくる定期連絡を適当にメモすると、今日何度目か分からないため息を吐く。

「しかしこれだけ待遇の差があると、思わず同情したくなるな」

『同情……ですか？ 存外、あなた程の方もそのような感情を抱くんですね』

「うるせえ」

思いつきり皮肉ったような電話相手を、おどけたような声で流す。肩で挟んで持っていた受話器を右手に持ち替えると、一筆は左手で口に咥えていたタバコをつまみ、口から煙を吐き出す。

研究室は基本禁煙だが、彼はそれをぶつちぎっていた。それを咎める者はいないし、咎めることはできない。彼は今重要な『実験体』の保護責任者であり、監督している。無闇に手をだして『実験』から外されるのを皆恐れているのだ。

「こつちは毎日、調査した情報を総合して演算。総合して演算なんだぜ？　アイツは呑気に学生してるし。そっちは毎日人殺してるのによお」

『それは計画の方針が違うからなのでは？　そちらは補充員サイドラインなのですから』

「へーへー。本命さんは大事大事と……。そろそろ切るぞ」

『はい。また一週間後に連絡します』

通話は一筆の返事を待たずにガチャリ、と切れてしまった。一筆はツーツーと空しい電子音を繰り返す受話器を机の上に放り投げると、左手で持ったままだったタバコを再び口に咥える。

『補充員サイドライン……か……。なんで俺はこつちにしたんだか』

彼はそう一人ごちる。独り言を言ったびに口からタバコの煙が漏れ、プカプカと天井についている換気扇に吸い込まれていく。煙を吐き出そうとタバコに手をかけると、不意につけばなしのパソコンの一台から短い電子音が響いた。どうやらメールが届いた

らしい。一筆はめんどくさそうに椅子に座りなおし、パソコンを操作する。

「なんじゃこりゃ。セキュリティがかかってやがる」

一筆は一瞬顔をしかめるが、しょうがなくセキュリティを解除にかかる。おそらく上からのものだろうとは察しがついたが、このころの彼らはまるで思考が読めない。精神的にまだ不安定な力量変換の放置や、研究所襲撃の情報をわざと開示するなど、奇怪な行動が多すぎる。

いつもの解除コードを打ち込み、メールを開く。文面はずいぶん長いらしく、一筆はめんどくさそうにそれを読み始める。

しかしその表情はすぐに驚愕の色に変わった。段々とスクロールするスピードが早くなる。

「……ホント、何を考えてやがんだ連中は……」

思わず上層部に対して悪態をつく。口に咥えていたタバコを乱暴に灰皿にねじ込むと、メールに再びセキュリティをかけ、もしこのパソコンを開いても読めないようにする。不機嫌な様子で立ち上がると、そのまま彼は研究室をあとにする。

「決めるだけ決めて、後は丸投げってか。くそ」

彼は懷から黄色い携帯電話を取り出し、歩きながら電話をかける。恐らくこんな連絡を予想だにもしなかったであろう相手に。

数回コールが鳴った後、間延びした返事がスピーカーから響いて

くる。周りに誰がいるのか、喋り声もかすかに聞こえる。

しかしそんなことは気にも留めず、一筆はすぐにその苛立った声で半ば怒鳴るように言った。

「いいか？ 今日付けでお前は、『絶対能力進化（レベル6シフト）計画の護衛についてもらう。異論はナシだ。返り血浴びていい服に着替えて、さっさと俺のところに来やがれ！」

## 第16話 晴天の前の夜（後書き）

どうしてこうなった……orz

やっと日常に戻ってきたというのに、戦闘を入れようとするとき暗くしてしまう自分の習性が嫌になります…。

でも、この先の展開上いつかやることなので、早いうち処理したほうがいいですね、うん。

でわまた次回 ノシ

## 第17話 “始まり”の日（前書き）

お待たせしました。なんとか次話更新です。

そろそろ周りも落ち着いてきたかなーと思うと、またすこしだけ慌ただしくなる。

これはなにかの陰謀か？ …… いやまさか、ねえ？



## 第17話 “始まり”の日

『貴女は、どんな学園生活をおくりたいですか？』

常盤台中学の入学式の後、新1年生として迎えられた千五百<sup>ちいほ</sup>達は皆、新しい学校とそこでの生活を想像しているのか、どこことなくソワソワしている様子だった。

運よく同じクラスになった水曜<sup>すてら</sup>は、落ち着きなく自分の席から教室をキョロキョロと見まわしている。周りにも同じような生徒はいるが、明らかに浮いていた。

千五百<sup>ちいほ</sup>は窓側の席の後ろから2番目。縦に6列、横に6列の正方形に席は配置されていて、教室に入る時はその配置の見事さに、皆が席に座るのを戸惑ったほどだ。

そして始まったSHR。<sup>ショートホームルーム</sup>ここで冒頭の質問へと帰ってくる。担任の先生がこの質問を席順に当てて聞いてくる。

『はいっ！ 私はお嬢様らしく優雅に過ごしたいです！』

『優雅……ですか？』

『はい！ 優雅、華麗、エレガント！ ちょっといいじゃないですか！ そういうの、憧れだったんです！』

この返事はもちろん水曜のものだ。千五百の目の前、窓側の席の後ろから3番目に水曜は座っている。

対して、この返事は想定していなかったのか、庶民全開の水曜の答えに笑顔を引きつらせている。そんなやりとりを見て緊張の糸がきれたのか、今まで押し黙っていた他の生徒もクスクスと笑いだす。

『そ、そうですか。水曜さん、貴女が望むような学園生活がなくなるというですね』

『ありがとうございますっ！』

そういつて水曜は勢いよく先生にお辞儀をした後、席に座る。「では次に……」と先生は出席簿に一瞬だけ視線を落して名前を確認すると、また女の先生特有の柔らかな笑顔を生徒に向ける。

『はい、みずくま ちいほ湾千五百さん。貴女のおくりたい学園生活を教えてください？』

その口調も柔らかかで、泣いている子供を諭す母親のような雰囲気  
の先生だった。背もスラッとしていて、まさに美人教師、もしくは幼稚園の先生という言葉が良く似合う。

『はい。ボクは、そうですね……』

そこでなぜか千五百の語尾は濁り、黙ってしまった。水曜は千五百の学校への憧れの強さはお喋りの中で知っていたので、すぐに答えられるものだと思っていたので驚いた。

「どうしたの？」と小声で聞こうとして後ろの席にいる千五百に後ろに振り向く。そして起立している彼女の顔をのぞきこんで

『……やっぱり、楽しく過ごしたいです。水曜みたいなのも、楽し

『そうだけど』

顔を逸らされた。しかしどうやら言葉に詰まっているわけではなかったらしい。色々と言いたいことはあったけれど、それを表わす言葉を探していただけたようなのだ。

そんな千五百は何故かしてやったりな顔を後ろを振り向いていた水曜に向ける。そうすると、先ほどの水曜の言葉を思い出したのか、クラスの何人かが思わず噴き出した。

『なっ！？ 千五百〜！』

『人が考えてる顔を見ようとした報いだよ〜？』

ふふん、と千五百は満足げな表情を浮かべると、先生に一礼して席に座る。

『ぬう〜。そんなにちよつとおかしいこと言っただかな私は』

『少なくとも、本当のお嬢様がいるここで言うことではないんじゃない？』

今は2列目の生徒が先ほどと同じ質問を先生から受け、答えている。千五百の後ろの席は欠席なのか予備席なのか、誰も座って居なかった。

『そっかー。それもそうだよなー……。ってことは、リアルお嬢様を友達にするチャンス！？』

『そうかもね。でもボクはあまりそのことは……。…水曜？』

千五百が話かけるが、水曜は反応しなかった。どこか上を見上げて、幸せそうな顔をしている。大方自分がリアルお嬢様と友達になつてお茶をしているところでも想像しているのだろう。

こうなると水曜を現実に戻すのは時間がかかるので、千五百はふう、とため息をついた。この前にも同じようなことがあつて、起こしてあげたら水曜に怒られたのだ。千五百はただ、横断歩道の真ん中で硬直フリーズしているのは危ないと思つてした親切心だったのだが。

『楽しく過ごす、か……』

なんとなく窓から見上げた空は、雲一つなく、どこまでも青く澄んでいた。朝の天気予言では今日は雨はふらず、暖かな陽気に包まれた春日和と言つていたのを思い出す。

今日の常盤台中学入学により、当然だが117支部から学生寮へと引つ越した。その時の初春はなぜか涙目だったのは今でも思い出せる。

引つ越しといっても千五百の荷物はほとんど言つてもいいほどなかった。時間はかからなかった。後は古法に「たまには支部にも顔を出してね」と言われたくらいだった。白井は引つ越しが忙しいのかその時の支部に姿は見えなかったが。

目を凝らせば昼でも星が見えるんじゃないかとも思える青空は、千五百の心の中とは裏腹にどこまでも透き通つていた。いつの間にか先生の質問は自分の横の席まで回つていたらしく、ガラツと椅子を引く音が横から聞こえる。

『 “ 楽しく ” 過ごせたら、いいんだけど ”

誰にも聞こえないくらい小さな声で、千五百は誰に言ってもなくボソツと呟いた。

辺り一面が真っ赤だった。

いや、真っ赤などというほどその色はきれいではない。赤黒い、もしくは赤紫を濃くしたような色が、目の前一面に広がっている。

その赤黒い海に浮いているのは、その色を被った何か。まるでその海で溺死したようにうつ伏せになっているモノや、途切れたように転がっているモノなど。形容しようとするればキリがなかいほどに、その光景は悲惨だった。

そして異様なのは全てのモノが“五体満足でない”ことだ。

つい先ほどまで戦場だったそこに、一人の少女が立っていた。赤黒い海の上に立っているその姿は、月明かりに照らされてどこか幻想的に見える。

その少女の姿も赤黒く染まっていたが、他のモノのように五体不満足ではなかった。彼女が着ている服の端から、ポタポタと赤黒い雫が垂れ落ちる。

少女は月を見ていた。その赤黒い海よりも澄んだ、真っ赤に染まっていた目だった。その表情はどこか悲壮を含んでいて、やはりその顔にも赤黒い色は着いていた。

少女はその飛沫しぶきを被ったように着いた赤黒い色を手でぬぐった。しかし、その手も赤黒く染まっていたので、さらにその頬は白い肌色から赤黒い色へと塗り替えられる。

今日は厄日だった。正確には違いかもしれないが、少女にはそう思えた。つい先ほどまで胸を満たしていた新しい生活への想いは不安に変わり、新しい生活を共にするルームメイトと握手を交わした右手は赤黒く染まってしまった。

「なんで……だろう」

少女の声は震えていた。この惨状のおぞましさに。この惨劇を生

み出した自分自身の能力に。

少女が右手を一振りすれば、目の前にいた3人の上半身が吹き飛んだ。

少女が左手を一振りすれば、目の前にいた4人の首が宙を舞った。

そう、すべて一振り。たった一つの、何気ない動作で、目の前の人間はあっけなく死ぬ。どんなに辛い過去を背負って生きていても、どんなに苦しい事情を抱えて生きていても。

少女の目の前に立つということは、そう言うことを意味していた。

「なんで、こんなこと、してくるの……」

少女に銃を向けても、その鉛弾は通ることなく地面に落ちる。手榴弾を投げて、その爆風の中から何事もなかったかのように現れる。

そして少女の目の前に立ってしまった彼らは言う。

たった一言。 “ 化け物だ ” と。

「やっぱり……。ボクは化け物なんだ……」

少女はスッと、目の前で淡く輝く月を掴むように手を伸ばす。

毎夜、あの人達は昨夜なのがあったかも知らないように少女の目の前に立ちはだかる。それは化け物退治に来た王国の騎士のように。

しかし実際は逆だ。あの人達は少女の後ろにある研究所を狙って来る盗賊で、少女は研究所を守る番犬だ。番犬ならば、侵入者を襲って当然、むしろ自然なことだ。

だがその番犬は優しかった。毎回やってくる盗賊を襲うたびに、その心は傷つき、罪悪感とその傷口から沁み入ってくる。もう耐えられなかった。

少女の真つ赤な瞳に、丸く輝く月が映る。あんなに飛沫がたつたというのに、あの月は何事もなかったかのように真つ白なまま、その淡い光を照らし続けている。それはなぜか。高いところにあるからだ。

少女がいくら手をのばしても、月に届くことは叶わない。地球と月は離れていて、地上にいる人間では触れることも、掴むことすらできない。

ならば、月まで行けばいい。誰も届かない、誰も近づけない。そんな月に、なればいい。

「そうだよ。ボクはなるんだ。ならなくちゃ、いけないんだ……」

少女の目に映る月は、丸く真つ赤に染まっている。その淡く赤く光る月は、少女の目の中にあつた。

ギュッと、月に向けて伸ばしていた手を握り締める。今は掴むことはできなくても、いつかこの手で掴んでみせる。その時には誰も目の前には立てない。立っていたとしても、自分に触れることは、叶わない。



「強者<sup>ばけもの</sup>じゃダメなんだ。無敵<sup>つき</sup>にならなきゃ……」

そうすればあの無駄な戦闘は行われなくて済む。自分には敵わないと知ってくれば、人を殺さなくて済む。

そして、もう自分が苦しい思いをしなくて、済む。

「お前は本当にそう思っているのか？」

突然そんな声が背後から聞こえて、少女は振り向く。よれよれの白衣を着た、自分を誰よりも知る人が目の前に立っていた。

その人はゆつくりと赤黒い海を渡って自分のもとへやってくる。啞えたタバコもいつもの通りだ。

「一筆、それ、どういうこと？」

少女はその鋭い紅眼を白衣の男に向ける。それに対して男は怯みもせずに少女のもとへ歩み寄る。

「まんまの意味だ。お前、『絶対能力進化（レベル6シフト）』計画に加わる気なのか？」

「うん。<sup>アクセラレータ</sup>一方通行には悪いけど、それはボクに引き継いでもらう。ボク有能力なら、問題ないでしょ？」

少女の目は決意に満ちていた。その目は何回の殺生を見て、何回の涙を流したのか、白衣の男には見当もつかなかった。

「無理だな」

しかし白衣の男はその目に宿る決意を打ち破るように言い放った。少女は面食らったように驚き、すぐに反論する。

「なんで！？　ボクなら一方通行の計画も引き継げる。残りの1万人の差だってすぐ……！」

「いや、アイツからそう言われてんだ。もし自分の計画を引き継ぐと言いやがったら、即断わってくれとな」

白衣の男が、啞えていたタバコを赤黒い海へと吐き捨てる。赤黒い海に落ちたタバコの火は一瞬で消え、煙も立たずに沈んでいく。

「……まあ、引き継ぎは無理だが。そうだな、関わるな、とはアイツ言っただけだったな」

「！　それ、どういうこと？」

うつむいていた少女の瞳に、再び月明かりが差す。その赤みは増し、白衣の男は不本意にも悪魔だと思ってしまった。

「もともと『絶対能力進化』計画はお前ら二人でやるハズだったんだ。ま、アイツが俺だけで十分だと抜かしやがったんで、お前はもしもの時の補充員サイドラインという位置に下がった」

「補充員……」

少女は白衣の男から初めて聞いた自分の役割に驚いた。自分がしようとしていたことは元々行はずだったもの。それを一方通行が

拒んだだけだったのだ。

「……なんで一方通行はボクを拒んだの？」

「俺が知るか。自分で聞け」

白衣の男は少女の言葉を一蹴すると、白衣の胸ポケットからタバコを取り出し、口に咥える。そのタバコの先にライターで火をつけると、ため息を吐くかのように吸った煙を吐き出した。

「で、お前はアイツの補充員だ。要するに補欠。補欠はレギュラーが消えないと舞台には出られない」

「え、それって……まさか」

「そう、補充員ってのはもしアイツが実験中“死んじまったら”入れ代わる補欠なんだよ」

白衣の男はさも当然のように、あまりの驚きで固まってしまった少女に言い切る。少女の目は見開かれたままで、微動だにしなかった。

「殺せ、一方通行を。お前のその手で」

さらに白衣の男は固まったままの少女に言い続ける。

「そうすれば一方通行よりお前の方が有用であることが認められる。それで正式に『絶対能力進化』計画はお前のものだ」

少女はやはりまだ固まったままだった。白衣の男を見つめたまま

時が止まっているように、未だにその時は動きださない。

その様子を見た白衣の男はポケットからメモ帳を取り出し、付いていたペンで何かを走り書きすると、少女の下へと投げる。

「明日のアイツの実験場所と時間を記しておいた。別に明日が無理なら別の日でもいいぞ。俺のところにくれば教えてやる」

じゃあなと最後に言い加えると、白衣の男は少女に背中を向け、さつさと赤黒い海から出て行ってしまった。

その後しばらくして、少女は錆びたブリキのおもちゃのように、ぎこちない動きで足元に投げられたメモを拾い上げる。

メモは赤黒い海の色を吸って、赤く染まっていた。けれどそこに書いてある文字はまだ読める。そこにはあの男の走り書きしたところか、場所と日時が書いてある。

このまま毎夜に侵入者を殺し続けるか、それとも一方通行を殺して無敵になるか。少女の目の前には今二つの選択肢が浮かびあがっている。

「なんで、なんだろう……」

自分はただ普通に学生らしく生きたかった。ただそれだけだったのに。

時間割り（カリキュラム）を受け、この能力が発現してから、彼女の生活はがらりと変わった。研究所という閉鎖空間に閉じ込められ、その中で初めて友達として生きていられた人も、今自分の手で

殺めようとしている。

少女は思わず頬をぬぐった。今までに散々涙を流してきた彼女に付いた、忌まわしい癖だった。

しかしその手には、いつものような温かな水滴はつかない。代わりに、ぬるりとした冷たい赤黒い液体が頬にべったりとつく。

涙なんて、一筋も流れてはいなかった。

「そうか、もう泣くこともできないんだね……」

涙も流さず、血を血でぬぐう化け物。今からとても人間とは思えない、“友達殺し”を行おうとしている自分にはびつたりだと、少女は思った。

「ごめんね一方通行。悪く……思わないでね」

少女は心に決めた。こんな化け物が人間ぶっているのは人間に失礼だと。だから自分は化け物らしく、化け物じみたことをすればいい。

[illegible]

少女は笑った。化け物じみた狂喜の表情で。すると背中からあの光を返さない漆黒の翼が3対、狭いビンの口から抜けるように、バサツと宙へと伸びる。

その翼から舞い落ちる羽は、地面に広がる赤黒い海に落ちるとその面積だけ赤黒い色を真っ黒に染めていく。翼を伸ばし終えるころ

には、舞い落ちる羽はさらに数を増し、みるみるうちに赤黒い海を干上がらせ、浮いていたモノも蒸発していく。

狂喜に震える黒髪紅眼の少女は、声をひそめることもなく、その化け物じみた笑い声を上げ続ける。

背後にある月明かりに照らし出された六枚の漆黒の翼とその少女は、まさに地に舞い降りた悪魔だった。

「いいねこれ……。あは。いいねこれ、すごくいいよ」

キシツと音を立てて、少女、力量変換は歪んだ笑顔クレイドルを浮かべていた。

## 第17話 “始まり”の日（後書き）

ああ、どんどん日常から離れていく……。どうも玉露飴です。

更新が大幅に遅れてしまいすいませんでした。今回はちよくちよく書きとめていたものをまとめて、ようやく更新した次第です。また遅れるかもしれないので御容赦のほどを^^;

活動報告にて、すこし読者様の意見が聞きたいのでアンケートっぽいものを更新しました。

最新のものがそれです。気が向いたら、暇だから、などそんな軽い感じで結構です。

こんな投げっぱなしな願いではありますが、宜しく願いします。

でわでわ ノシ

【NEW!】

活動報告にてお知らせです。

## 第18話 秒読み（前書き）

更新が遅れて本当にスイマセンでした。

アニメ第7話での一方通行さんのお陰で吹っ切れた感があります。

あのセリフを聞けるとは……何か感動。



## 第18話 秒読み

自分が何者なのか、分からない。

これは最近まで自分の心の中で渦巻いて離れなかった悩み。そして、今まで自分が自分でいられた心の支え。

力量変換クレイドルには研究所に来る前の記憶が無い。過去に一度思い出そうと試してみたことがあったが、その時は記憶が薄ぼんやりと霞がかっているようではつきりとしなかった。でもそんなことは別にいい。気にはなるが、今がよければ別にいい。そう思って今まで生きてきた。

自分が何者か分からなければ、探せばいい。

毎日行われる自分の能力についての研究の中で、力量変換はそう考えた。内気な自分、明るい自分、頼りない自分、活発な自分。色々な自分を演じ続けた。

そして気づけば、その中で気に入った自分を見つけたのかも分からない内に、友人が出来てしまった。

何てこと無い、毎日の変わらない実験の合間にあった休憩時間。その仮眠室での出来事だった。

連日の能力の実験に疲れて、そして自分が誰かを探すのに疲れてきた、そんなタイミングで。

「お姉ちゃんだれー？」

「ホントだ、知らない人がいるー」

あの時の温かな声は、今でも鮮明に思い出せる。自分の過去はここから始まっているのだ、と勘違いが出来るほどに。

その時の自分は今まで演じてきたどの自分かは分からない。もしかしたら、その時の自分が本当の、『素の自分』というものだったのかもしれない。

久しぶりに会話と呼べるような言葉を交わし、どうでもいいような、生きる上ではなんら必要の無い言葉を述べる。

それはとても新鮮で、力量変換は初めて心に会話の楽しみを、自分を演じることの滑稽さを覚えた。

そして、『素の自分』の恐ろしさを、知った。

なぜ、目の前にある自分の手が、血で赤く染まっている？

さっきまで仮眠室と一緒に喋っていた女の子。さっきまで、一緒に布団を片付けていた、男の子。

さっきまで、笑っていた、自分の友達。

その全てが、自分の手の中で息絶えていた。

あの時に見せてくれた眩しい笑顔などぐちゃぐちゃに掻き混ぜて捨てたような、悲惨な表情。そして、つい先ほどまでこの研究施設内に響いていた、耳に残る残響を思い出す。

違う、これは自分がやったんじゃない。無理やり手を押さえつけられて……。

残響が力量変換の心を振るわせる。ジリジリ、ジリジリと、まるで余震のように。

先ほどまで痛くなるほど男の大きな手で締め付けられていた自分の手首は、あたかも何もなかったように、その赤みさえ無くなっていた。

あんなに痛かったのに、ねじ切れそうになるほどに痛かった手首には、痣も一切なかった。

「ああ、そうか」

痛かったのは、心の方だったんだ。

男が手首を握ったのは最初だけで、その後は自分が勝手に動いた。そしてその時の心の痛みが、男に握られた手首に伝わって自分の身体全体に知らせている。

作業をするロボットのように動く身体を、心が押さえつけようとしていたのだ。

でも身体は止まらなかった。「痛い」と泣き叫ぶ心を見てみぬフリをして。はじめから眼中にないような様子で作業を続けた。

それから力量変換は『素の自分』を出さないようにした。誰とも同じ挨拶で。誰とも同じ接し方で。誰とも同じ反応で。誰とも同じ距離を置いて。

空に浮かぶ、あの地球との距離を一定に保って周る、月のように。

そうして他人を傷つけないようにしていたのに、何の因果かそれは不意に破られた。

よく分からない内にお世話になることになった177支部への帰り道。その少女に出会った時だった。

彼女の話聞いて、思わず同情してしまった。それが運の尽きだったのかもしれない。

新しく出来た自分の名前を呼んでくれる日々が心地よくて。学校に通えることが決まったことが嬉しくて。過去に起きた出来事と同

じ状況だということに気がつけなかった。

また、自分は友達という存在のせいで人を殺めている。でもこんどはその友人は死なずに、別の誰かが死んでしまった。

その人はとても心が広くて、自分なんかよりよっぽど生きていることに価値がある人だった。

また、再び、自分に関わったせいで。

それから、灰色だった。

あんなに楽しみだった学校も、今では自分と関わる人が増えてしまっうんじゃないかと不安で仕方が無い。

そしてそれまで毎夜に繰り返されていた殺戮。再び心とは反して動く身体。同じだった。あの時とほとんど。

そしてどうやら、心も壊れてしまったようだ。

あんな提案、普段の自分なら激昂して否定するはずなのに。するりと飲み込めてしまった。だから、後は作業をするのみ。

「ボクは、化け物なのだから……」

「……手紙だア？」

いつものようにファミレスで昼食を済ました一方通行が自宅であるマンションに帰ってきて見たものは、ドアの郵便受けに挟まれていた封筒だった。

差出人も住所も書いていない、まっ白な封筒に首をかしげながら、とりあえず一方通行はドアを開け自分の部屋に入る。

元々備え付けてあった嫌に座り心地のいいソファに腰掛けると、無造作に封筒の口を破る。中からは手紙と思しき紙が二枚入っていた。

「さアて、この一方通行サマに手紙なンザ送ってくる奴は何処のどいつなんだか……」

一方通行は何の気なしに見た手紙に書かれていた名前に目が留まった。

『力量変換』

「ハッ。よりにもよってアイツかよ。いつの間に俺の住ンでるマンション見つけて……」

一筆の野郎の差し金か？ と心底めんどくさそうにため息を吐く

と、その目に飛び込んできた力量変換以外の文字に目を見張る。

そして再び一方通行の居る部屋に沈黙が流れる。しかしそれは先ほどのように一瞬では途切れず、破られたのは大分経ってからのことだった。

『午後１時。第１１学区の資材置場にて待つ』

「はア？　なんだこりゃ」

あまりの簡潔さに一瞬頭が追いつかなかった。というより、理解に苦しんだ。本当に力量変換の考えていることは分からない。だが、一応言われたとおりに行ってみることも、吝かではなかった。

「ま、コツチの都合を考えてる辺り、アイツらしいのか？」

一方通行は首を鳴らしながらそう言うと、持っていた手紙をテーブルの上に投げ捨てる。そしてそのままベッドに倒れこむと、静かに寝息をたて始めた。

頭の片隅に、果たし状みたいだな、という考えを抱きながら。

## 第18話 秒読み（後書き）

早っ。待たせてしまった割りに短くてスイマセン。

次回こそ一方通行vs力量変換になるはず。すごく不安ですがw  
これからもこんな自分ですがよろしくです。

誤字脱字の指摘、感想など、お待ちしております！

それでわ ノシ



## 第19話 最狂vs最凶（前書き）

大分遅れてしまい、申し訳ありませんでした！

## 第19話 最狂vs最凶

歩く。

少女はヒタヒタと素足のままで、雨に打たれて冷え切ったアスファルトの上を歩いていった。その足取りはひどく静かに、足元で踏みしめる水音も聞こえて来はしない。

今の時刻は午後10時過ぎ。すでに学生達は帰宅する時間であり、学園都市に連なるビルの森林が色とりどりのネオンサインという花を咲かせていた。その思い思いに輝く光が、降り注ぐ雨に反射して夜の街を明るく染め上げる。

歩く。

溢れる光りで鏡のように照っていた水溜りを、歩く少女の素足が踏みつけた。その瞬間に水溜りはピキピキと擦れるような音を静かに立たせ、少女がまた一歩進めるために足を上げればそこには冷気を漂わせる薄氷に姿を変えた。

その様はまるで何かを抜き取られたかのように儚く、決して見てはならないような危うさを秘めていた。

歩く。

少女の体に当たる雨粒も例外ではなかった。彼女の肌を濡らすことも叶わず、蒸発するかのように姿を消し去る。それはまるで、世界が彼女に干渉を拒むかのように。

やがて少女が歩き続けるにつれ、段々と足元を照らす輝きが減っていった。あんなに鮮やかに咲き乱れていた電飾の光も、今は粗末な街路灯の白く濁った光りしか見当たらない。そしてその光も潰えてこの時間相応の、漆黒に抱かれた世界へと足を踏み入れる。

それはかつて獣が狩を行う時刻。爪が肉を引き裂き、狩られた者の鮮血を散らす時間。牙が喉元を掻き切り、狩られた者の死への恐怖が轟く空間。

しかし少女の心に怯えはなかった。代わりに心に満ちているのは、この夜の色にも負けない程の、どす黒く薄汚れた欲望。

全を蹴散らし我を通す。そうして我を通さなければ、この我の中に渦巻く欲望に飲み込まれるだけ。そうなればもう助かりはしない。そこにいるのは、ただ突き進むだけの愚かな暴力を持った人形だけだ。助かる道は、元より他には存在しない。

助かるために足掻いて、それで誰かの悲しみが生まれることになったとしても、それは甘んじて受け入れよう。

「ボクは、クレイドル揺り籠なのだから」

そして、その少女の歩みが止まった。先までの眩い光は遠くに退

き、ここにあるのは静かな沈黙と冷たい闇。後戻りなど赦されはしない。

そして少女は、今まで死んでいたかのように静かだった息を大きく吸い込み、ゆっくりと吐き出す。少女の紅い瞳の色が、濃くなっている。

「こんばんわ、アクセラレータ 一方通行。」

少女はさも楽しそうに、友人の家に上がる時の子供のような声で、闇の虚空の中にそう呼びかけた。辺りの物に打ち付ける雨の音が、強くなっている。

「つーかよオ、こっちは早く帰りてエンだ。雨が鬱陶しくて困っているだよ」

その雨音を突き抜けて、重くのしかかる闇の中を掻き分けて、ひどく細身の少年が姿を現す。彼が着ている白と黒のＴシャツは雨にぬれ、それが不快なのか深く眉間に皺シワが寄っていた。その目は少女と同じ紅色に染まり、少女の小柄な姿を射抜く。

「ごめんね。この時間と場所じゃないと、頼めない事だったから」

「だったらサツサと言えや。あんな真似までしておいて、シヨボい内容ならただじゃ済まねエぞ」

睨み付けるような視線が、変わらずに彼から少女に向けられている。しかしそんなことには慣れているのか、少女にはそれに対してなにも言わず受け入れている。

少女は彼、一方通行の言葉を聞くと、ガクツとうなだれるように俯いた。この降りしきる雨の中で湿り気も帯びていない少女の前髪が、サラサラと重力に引かれて顔を隠すように垂れ下がる。

一方通行はその様子に訝<sup>いぶか</sup>しむと、雨に濡れて黒く光るアスファルトの上を歩いて少女に地近づいていく。少女は依然と黙ったままで、その拳は強く握り締められて震えていた。思わず首をかしげてしまった。

「オイオイ、まさか久々の再会でお涙頂戴ってか？ 冗談じゃねエ、帰るぞ」

少女の様子を見てそんなに大した用事でもない判断した一方通行は、これ以上ここに留まっている理由がないのでそのまま少女の横を通り過ぎた。少し先には、この資材置場を照らす外灯が一本立っていた。

「……『絶対能力進化（レベル6シフト）』計画」

ぴたり、と一方通行の足取りが止まる。しかし彼は振り返らず、少女が不意に口にしたその単語を聞いた途端に口元を吊り上げた。

「一筆の野郎の仕業かア？ テメエが何を知ってるのか知らねエが、アレは俺の」

「……代わって、欲しいな」

外灯の光がパチンと、何かが弾ける音と共に消えた。その音によって一瞬紛れたかのように思えた雨音が、その隙間を埋めようとするかのようにつるさく鳴り響く。

一方通行の表情が、一転して深刻なものへと変わる。彼の心が苛つきはじめている兆候だった。しかし彼はそれでも振り向かず、構わずに止めていた足を踏み出す。

その一步が踏み込まれる瞬間、また少女の言葉が紡がれた。

「ボクね……もう、耐えられないよ」

それはひどく弱弱しい声。心を何度も何度も強く打ちつけられて、ボロ布のようになってしまった者から発せられる、救いを請う声。

「知ってる？　ボク、もう数えられないほどのヒトを殺したんだよ」

一方通行は再び足を止めた。何かに後ろから鎖で引つ張られるように止めた歩みは、足元の水溜りで小さな波紋を打つ。

「返り血で体が真っ赤になるまで殺したんだ。……でも、もう限界だよ？」

鼓膜の上で反響する雨音の中で、何かの足音がこちらに向かって近づいてくる。一方通行はそれに構わずに、ただそこで立ち竦んでいた。彼の白い頭髪から滴り落ちた雨水が、足元のアスファルトに落ちていく。

不意に、背中に温かい感覚と共に何かしがみつくような力が加わる。雨で冷え切っていた一方通行の体にとって、その温かさは軽い火傷をしそうだと思うほどに熱い。

腰に回された腕に入る力が、線が細い彼を締め上げるようにして

強くなった。かすかに、嗚咽のような音も聞こえてくる。

「助けてよ……。ボクを、私を、置いて、いかないで……。一人に、しないで……」

背中が始まった、小さな独白。

彼が腰に絡みつく少女を振りほどこうと思えば、いつどのタイミングでも行える。でも、一方通行はそのような素振りは見せず、静かにその少女の告白に耳を傾けていた。

やがて言葉はなくなり、少女の静かな嗚咽と背中から感じる熱いほどの体温だけが残った。雨ですっかり濡れてしまった白い髪を、一方通行は片手でクシャリとかき混ぜるようになして掻く。

「ッたくよオ、俺はテメエのお守りを任された覚えはねーんだ。俺には関係ねエ」

そして大げさに溜息を吐くと、腰に回されていた少女の細い腕を振り解く。少女の小さい悲鳴と共に、その体が固く冷たいアスファルトの上に転がった。

後ろで座り込んだまま俯く少女の顔色が絶望の色に染まっていく。頬に伝うものは、決してこの雨のものではないだろう。瞳いっぱい溜まったそれが、一つ、また一つと筋を増やしていく。

それを見ることもなく、一方通行は歩き出した。今度は止まる様子はなくしつかりとした足取りで、少女にとっては残酷なまでにはつきりと歩いていた。アスファルトに広がる雨水を踏みしめる音が、段々と少女の下から遠ざかっていく。

(クソが)

一方通行は歩きながら苛立ちを隠せないでいた。その矛先は先の少女へではなく、自分自身に対して向けられている。

今まで背中では鳴き続けていた少女、クレイドル力量変換を巻き込ませないためにしたことの筈なのに。現に今、彼女は「辛い」と泣いていた。今の自分が関わっているこの計画が本来、彼女に課せられると知った時に連想した一番見たくない結果。ワイジョン

このままでは彼女の心はそう長くはもたないかもしれない、それを今まざまざと見せ付けられた。どれもこれも全て自分が引き起こした結果だ、と一方通行は自分に言い聞かせる。

早く自分はこのクソみたいな計画を終わらせ、誰もが挑むことも諦める『最強』へと昇華でなければならぬ。そうすれば、今泣いている彼女を守りきることが出来る。

もう二度と、あんな表情を見なくていいように。

「サッサと帰って寝るか」

一方通行がそう呟き始めたとき、突然何かが爆ぜるような音が鳴り響いた。その爆裂音の元凶によって飛ばされてきたのか、長さ15mほどの鉄骨の束が一方通行の頭の上に降り注ぐ。

そしてその一本が彼の頭に直撃した。しかしそれはくの字にグニヤリと折れ曲がると、失った勢いのままゆっくりと横に倒れ、アスファルトにぶつかる甲高い金属音が鼓膜を打ちつけた。



「あアン？」

一方通行が怪訝そうに今まで振り返ることはなかった後ろを振り返る。外灯はすでに消えてしまっているため、距離が遠くになるにつれ黒く塗りつぶされていて様子を窺い知ることが出来ない。

それでも目を凝らして先を見ようとしていると、再びあの爆裂音が鳴り響く。地響きと共に鳴り渡ったそれは、今度は一方通行の頭上に複数のコンテナを降らせた。

貨物列車によく積まれている長方形のコンテナは、資材置場のアスファルトを抉って落下した。その上にも別のコンテナが激突し、金属同士の激しくぶつかり合う音と鉄板がへこむ音が大気を震わす。

狙いは大雑把なのか、それとも狙ってさえいないのか、コンテナは一方通行にぶつかることはなかった。でも、これで彼にとっては分かったことが一つだけあった。

「オイオイ、無視されたからって癪癪おこしてんじゃねエよ。本当にガキだな」

十数本の鉄骨やコンテナを空中に放りだすほどのことを『癪癪』で済ませられるのは彼くらいだろう。それはこの学園都市におけるLevel 5の能力の異常性を示していた。

そして、この『癪癪』を起こした本人がゆっくりと塗りつぶされた闇の中から姿を現す。その紅い瞳は爛々と燃えるように輝いていて、いつの間にか濡れた黒い髪の毛がカラスの羽を連想させる。すでに、嗚咽は止まっていた。

代わりにあつたのは、冷え切った表情と冷え切った視線。そして、背中から伸びる長大な6枚の黒い翼だった。

夜の暗闇でも視認できるほどの、何物にも染まることはない漆黒。光さえ反射しないその翼は普段より荒々しくなびいていた。翼からあふれ出す羽がアスファルトの上に舞い落ち、その場所を溶かしていく。

「ボクはお前を全力で殺す。寸々（ずたずた）にして殺す。粉々（ばらばら）にして殺す」

雨が強く降り注ぐ。しかしそれはこの場にいる二人を濡らすことは叶わなかった。片ほうには弾き飛ばされ、片方には音もなく消し飛ばされる。

少女の体がゆっくりと上昇し、やがて地面から10mほどの高さで停止した。それに合わせて6枚の黒い翼も大きくなり、そこから降り注ぐ羽も格段に量を増す。すでにアスファルトはその下にある地面の部分を露呈し、ボロボロの状態だった。

「そして、ボクが最強<sup>つぎ</sup>になるんだ」

少女の右腕が一方通行に向けられる。その右腕に絡みつくように、少女の体から滲み出た黒い煙のようなものがゆっくりと集まっている。

「ああそうか。ガキはガキなりに考えたわけだ」

その禍々しい様子に特に注意するでもなく、一方通行はそう呟い

た。恐らくこれは彼女にとって最初で最後の、助けを求める信号<sup>シグナル</sup>。  
誰が吹き込んだかは大体予想は付くが、今はそのことは後回しだ。

「遊んでやるよ。来い、力量変換<sup>クレイドル</sup>！」

刹那、資材置場から稲妻の如き轟音と、雨雲を貫く黒い柱が立ち上がった。

## 第19話 最狂vs最凶（後書き）

覚えている方いらっしゃいますかね。実はとあるの二次創作も書いていた玉露飴です。

ようやく力量変換vs一方通行の戦闘開始。ああ、早く力量変換と工場長……じゃない、垣根提督との戦闘が書きたい。未元<sup>ダイクエネルギー</sup>力量vs<sup>ダイ</sup>未元物質。いつの日になることやら。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6290n/>

---

とある科学の力量変換（クレイドル）

2011年3月22日19時21分発行